091459-000-5

特13-663

明治侠客三幅対

伊東　専三／編

M24

DBN-2379

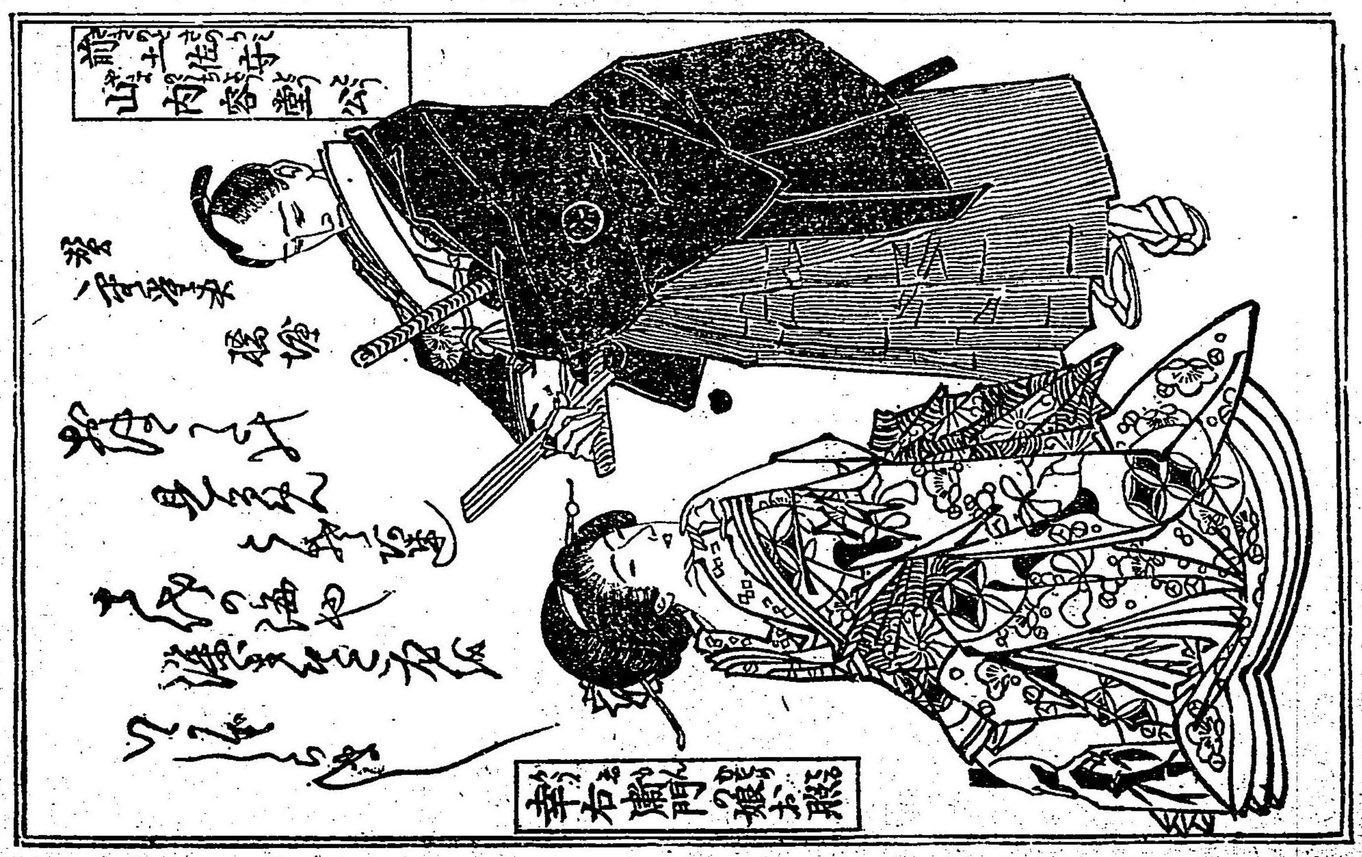
# 花春時相政

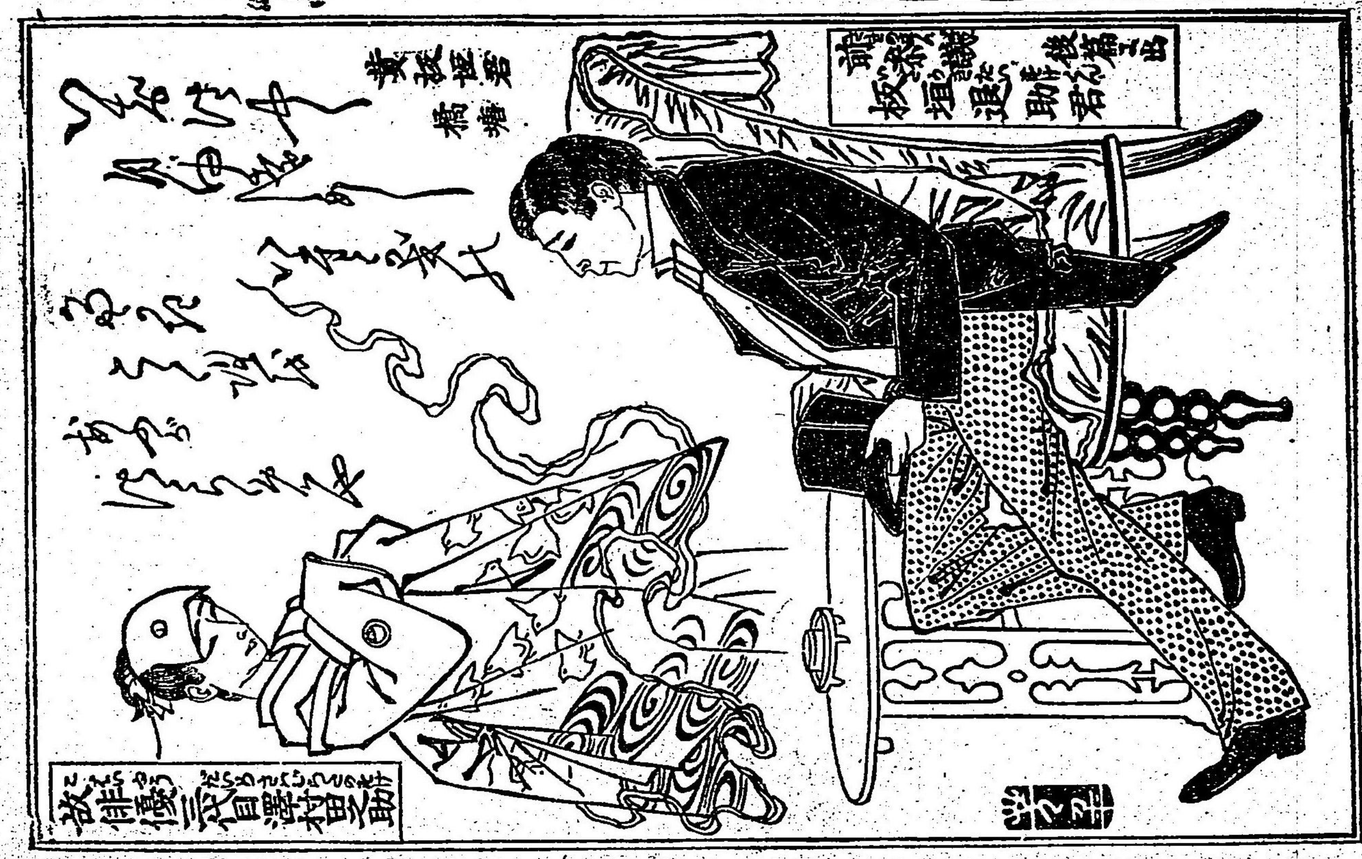
庭前の梅花ハ漸々よ。微笑かけて香りを傳へ風と寒き冬も暮。春は近き此頃に戸外出もおさ引籠り。筆机の上ハ節氣の如く。いろがわりけに書て滑稽堂に。迫はさらるゝ物の本。安受ものゝと延したる。外題ハ即ち花の桃改花咲頃までよ。三編揃ひの賣物に。花を飾ら。先初編をと急がれて。辯解暗き行燈を搔立つゝも夜を日に次ぎ。編果さりし本傳は。梅花の香を傳ふる如く。開いて愛顧を給へと爾云

明治十六季一月下旬

橋塘伊東專三記

明治引籠





特13
663

# 花春時相政

東都　橋塘伊東專三編輯

## 第一章

大江戸より町奴の所分大和屋より俠客の成立

俠客を以て自ら任ずる者は男達を稱ふる顔役い東京とならぬ江戸の昔し彼町奴の跋扈せし頃より枚擧するに暇あらねど多くは賭博を事として腕力以て政府を恐れず暴勢以て下民を掠め假子と稱する輩を從へ而中を縱横なして憚らざれば人皆毛虫の如く忌ども勢ひ當り難かる故より是を假令へば蜂の巣の如く政府も兎し難き程なる保護日本橋横山屋町の本宅を二男なる道之助より讓り京橋區新富町五丁目より隱居して只月花を友とし世を樂しむ消光なる相撲屋山中政次郎(前名政五郎)即ち相政い遠く文化の昔しより明治の今に至る迄諸家諸侯の方々へ人入を以て業となし千三百餘人の假子を從へ土木の用に勤るより假親と立て大尊と稱され又元締と尊稱せらるゝ物から敢て自贅他毀の行ひを爲す謙遜以て自ら居り常より假子を戒めて苟くも他人の害と成可き行ひをさせる事なく他人の爲より死をだも辭せざれば其名ます〳〵全國より聞え上い朝より在る顯官貴紳も相政の人と爲りを常より稱され下い裏店住居する人力車夫三泣車を押す小僧と雖も相政の名を聞て其德を慕ひ其人より見えて世より誇らんとするの想あり然ば東京八十餘萬の人よりして相政の名を知ざるいなく殊より相撲

俳優、講釋師、落語家等の諸藝人ハ其門ヨ依て強を挫き弱を助るの風負ヨ預らんと欲し又各所の俠客、消防組の頭取人足等ハ交際を厚して相互ヨ助合んことを希圖せり斯の如く相政の世ヨ賞翫さるゝ所以のものハ偶俠客の破落戸とハ異ヨして身を殺して仁を爲といふ眞の俠客たるより前の土州老侯山内容堂君の寵遇を得たるヨ因等單へヨ積善の餘慶といふ可し故ヨ今此老人の事蹟を記して世ヨ公ヨ爲すものなりかし話説す徳川の水滔々として淀みなく十一代の將軍文恭院殿家齊公御代に召す文化年中の頃かとよ芝口二丁目ヨ諸家の手廻六尺の人入を業となす大和屋定右衛門といへる者あり遠く先祖を尋れバ大和國ヨ代々住ふ塚本何某といふ鄕士ありしが往る元弘元年ヨ後醍醐天皇笠置の奥ヨ行幸ましゝ楠正成を以て軍師とあしら旗を上させ給ふをり塚本ハ馳參じ楠正成の陣ヨ至り恩地左近の手ヨ屬て千早、赤阪、金剛山數度の戰ヨ軍功ありしが重傷を負て仕へも難しと古鄕ヨ退き世を送るヨ南帝入洛ましゝてより敢て仕への道を求ず耕して食ひ織て着る子孫幾世を累しする當時の定右衛門ハ江戸ヨ出仕への道を計る折から其頃江戸ヨハ町奴と唱ふる達衆の多くありて所謂幡隨長兵衛首め唐犬權兵衛その他とう諸國より來る青年輩を集て之が假子と從へ人入を以て業となし假子の中ヨて追々と人ヨ知れつ顔の賣れバ個を取上て親分とす故ヨ其又假子の出來勢ひいと〳〵盛んなり此体を見て定右衛門ハ世ヨ勇しき事と思ひ仕への道の針路を變他人ヨハ依で我一個芝口二丁目ヨ住居を置め古鄕の大和を其儘ヨ大和屋定右衛門と名乘つゝ武家の月抱又ハ日雇登城のお供下馬の行粧それヨ用ゐる人足家業能を撰びて爲たりしかバ早くも其名ハ知れけり斯て八代將軍有德院殿吉宗公の代享保年間町奴人宿の行ひ能しからずとて時の町奉行大岡越前守を以て之を停止し假子と唱ふる寄子の者を抱へる事を禁じられ親分ハみな元締と改稱せられて組を立て營業をなす事とハ成バ定右衛門も元締となりて子孫繁らず業を營み當時の定右衛門の世と成しが夫婦の中ヨ子なきヨより細川家の浪人ヨて石狩豊吉といふを養子となし之れヨ土岐山城守の家來ヨて代々家老の次席を勤る加藤何某の娘お美代といへるを嫁ヨ貰ひ定右衛門と改名させ親定右衛門ハ隱居なしぬ斯て兩個が中ヨ兩個の小兒を擧け兄を松五郎弟を政五郎とこそ名附けれ此弟ハ即ち相政なり政五郎ハ文化五年九月九日の出生ヨて虫氣も有ず育つヨぞ父母の愛一方ならず掌中の珠髮挿の花と愛育するうち政五郎ハ育ヨ從ひ筋骨逞しく其性鋭敏ヨして記憶能く手習算盤讀物も一を聞て十を知る才智ハあれど之を嫌ひ幼稚を集て頭となり火事の眞似事木遣の唄少し計りの爭論も喧嘩といへバ先立て向ふへ踏込み遲れを取ず又或時ハ幼稚を相手ヨ劒術柔術の學びをなすヨ自得ながらも法ヨ叶ひて政五郎の右ヨ出る者なく幼稚仲間の親分と尊稱せられて自然顯す氣性ぞ頼母しけれ茲ヨ又當時京橋白魚屋敷ヨ人入の元締ヨて相摸屋幸右衛門と言るあり先祖ハ由緒ある武士なりしが浪人の後元締と成て幾年經ほどヨ妻のお喜代と兩個が中ヨ只四郎といふ息子ありて出入屋敷も四五軒持ち假子も多く暗からず消光をるより政五郎の父定右衛門と懇意ヨなし常ヨ往返政五郎の幼少ながら活潑なる氣性を好してをり〳〵ハ悴只四郎ヨ是ほどの强膽あらバ行末とも頼母しからんと喞言がましく吻く事もありしとなん時ヨ文政三年の春正月幸右衛門ハ定右衛門方へ年始の禮ヨ來りしかバ夫婦ハ其處へ重詰の下物を出し屠蘇酒を繼ぎ待遇折から戸外より近所の幼稚の泣聲立て此方の家の政さんが吾僧の紙鳶を引裂捨たり今日ハ七種の祝ひ日も紙鳶の有らねバ面白からずと兩の眼へ兩の手より磨り出せし破鐘聲毋

ゝ聞つゝ立出て开ゝ氣の毒ある事成かし歸らゞ急度折檻して再度悪戯ゝさせぬ程ゝ今日ゝ御辨し給へかし幸ひ茲ゝ政五郎が他所より貰ひし給紙鳶あり義經辨慶二枚半恰好糸目も附てをり是を代りゝ進せるゆゑ泣顔拭てモウ一度廣場へ行て揚直し氣嫌直して歸つてたべイザと計りゝ差出す紙さへ厚き親の詫我破られし紙鳶よりも能ゝ反つて氣の毒と幻稚心ゝ打喜び押頂いて吹風の變らぬうちゝと泣顔も笑ひと變る春の山霞ゝ非で草履下駄引つゝ勇んで行ゝける

## 第二章

新錢座ゝ厩合の葛藤　司馬口ゝ養子の悲望

跡見送つて定右衛門夫婦の者ゝ顔見合せ常の遊びの荒々しきを頻りゝ嘆息する側より幸右衛門ゝ取爲で育つ勢ひ壯んなる幼稚である故この位ゐな悪戯を爲ゝ當然なり然のみな心を苦め給ひそと言をり門より歸り來る政五郎ゝ十三歳灣泊盛り角髪の額へゝ垂るを上もせず朝より未下る頃まで揚飽たりし奴紙鳶ゝ土間へ放下して見も返らず登ると开がまゝ幸右衛門ゝ辞義を爲つゝ父親の側ゝ座れゞ定右衛門汝ゝ先刻余處の子の紙鳶をゞ破り捨しゝ有ずや今先の子が家へ來て斯と言告たるゝ依り代りの給紙鳶を渠ゝ取せ詫てやう〳〵歸したり平常よりして双親の教ゝ悖り荒々しき遊びを爲ゆゑ今日の如き不始末も仕出來あれ急度折檻す可き處ろ折よくも白魚屋敷の元締がお出ゝて取爲るゝゆゑ今日ゝ此まゝ叱りもすまゝ打もせねゞ是より心を改めて悪戯撮なし紙鳶ゝ限らず他處の子の物塵ひとつ傷を附てゝ成ませぬぞと言葉正く言懲すをつくゞ聞て政五郎少き膝を進めつゝ父ゝ向つて偖いふやう仰一々承まゝりぬ然ゝあれども吾儕無法ゝ人の紙鳶をゞ破りし成らず是ゝゝ仔細ある事ゝて吾儕等大勢新錢座の通りゝ紙鳶を揚てをるゝ最前家へ來りしゝ尾張町とやらの幼雅ゝして毎日吾儕等と同じやうゝ新錢座へ來て紙鳶を上げ糸目ゝ鴈木を拵へて朋友の紙鳶を切飛し又或時ゝ蔓せて紙鳶を引裂捨るもあり故ゝ一同口惜おもひ此方も同く鴈木を附け又蔓せて破らんと計る物から紙鳶を揚る伎藝ゞかり か年までも渠ゝ劣れゞ詮方なく此元日より七種まで負てをりしゝ吾儕もまた心快おもへども吾儕ゝ對して無禮なる舉動なけれゞ今日まで怒りを忍びてをりたるゝ今日ゝ一同打寄て今迄渠ゝ切飛され引裂れたる恨をゞ返して呉よと頼れしゝ爭かこれを推辞可き順ゝ承諾待ゐたるゝ例の如く來りしかゞ恨の由を言聞せ吾儕と紙鳶を合するやと問ゞ渠奴ゝ打笑ひて勝負ゝ時の運なれゞ誰か相手を撰む可き然ゝ何方が負るとも決して泣な言告るなと堅く約束なしゝうへ互ひゝ雪井遙ゝ揚途中ゝ於て蔓せしゝ渠ゝ鴈木を用ゐつゝ切んとするを事ともせず刃物を持ゝ卑竟なりと思へゞ隙さず手繰寄せ引下しさま渠の紙鳶を破亂離ずんと引裂たるに側ゝ並ゐる夥多の幼雅ゝ日頃の恨これゝて晴たり此上ゝ渠めをゞ打よゝと競ひ掛るゝ渠ゝ大きゝ驚きて糸巻さへもかい遺棄あとをも見ずゝ遁去たるが偖ゝ吾儕が此家の幼雅といふを疾ゝ知歸らぬ中ゝ先立て我家へ歸り虚言を搆へ甘々紙鳶を騙りしか泣し言告しと誓たる言葉ゝ背く卑劣もの尾張町とのみ聞ゐれど探さゞ知ぬ事やゝあらんイヤ此上ゝ遲掛て騙りの罪を責てやらん暫時の暇給へかしと小童ゝ似氣なく辯舌の爽かゝして理非明白顛末詳細ゝ述しかゞ父母ゝ實ゝもと顔見合せ言葉もなくて默然たり一伍一什を最前より傍聽せし幸右衛門交叉たる手を解も敢ず首を上て長息吐き栴檀ゝ二葉よりして香しとやら驚き入たるゝ子息の任侠強氣いおとゝ政五郎ぬし和主が言る事の由ゝ先の程より此伯父が委敷茲ゝて聞知たれゞ和主の悪き事ゝゝあら宏故ゝ父御も又母親も叱り給ふこと

有可からず然すれゞ渠が騙り行し紙鳶ハ取ぬが能しからん今しも和主が取返しよ行ゞ大和屋の元締ハ一個の紙鳶を惜むが故よ息子よ吩咐取返させしと言るゝ成らゞ父御の恥なり茲の所を聞分てと言ゞ政五郎ハ氷解せしか再度紙鳶の事ハ言ず忘れし如く次の間へ辷り出つゝ玩弄の纏を飾て戯れけり登時幸右衛門ハ定右衛門夫婦よ向ひこと新しきヤし分なれど今改めて御夫婦よ折入て願度ことあり何卒お聞届下されかしと言よ此方ハ不審の面地定右衛門ハ形を改め今江戸中よ元締も多くわれども和君と吾儕ハ水魚の交り深くして兄弟よりも睦しき中よ似氣なく更めて願といふハ如何なる事か包まず話し給へかしと問ゞ彼方ハ黙頭て其願ひとハ外ならず和君が次男政五郎ぬしを吾儕が養子よしたき願ひと計りよてハ不審くも又訝しくも思はれんが是よハ種々仔細ある次第の程をお兩個とも聽て不審を晴し給へ和君も已よ知るゝ如く吾儕ハ只四郎といふ息子ありてこれハ此方の御子息より年三個四個の兄よしわれど性魯よして往々ハ相撲屋の跡を繼ぎ元締親分と達られて多くの假子を引廻す力のなきを日頃より嘆よ附て此方の御子息人よ勝れし才智力量あゝいふ息子の有しならゞと思はぬ日とても非りしが今日も今日とて茲よ來合せ不圖聞し紙鳶の一條たゞ仮染の遊びよも人よ頼れ後ハ退ず朋友を助て仇を返し約よ背きし先を繕りて再度邪正を糺さんとハ驚き入たる其舉動ゆゑよいよ〳〵愛慕の念の増て望むハ外ならず何卒御子息を吾儕よ給へ養子となして往々ハ只四郎の妹お照よ嫁合せ不足か知られど相撲屋の家名が立て貰ひたしいかで〳〵と乞求め又他事もなく見えしかゞ定右衛門ハ彼方よ向ひ仰せ一々理りなれど和主が方よ子のなくゞ又談合も爲可けれど已よ男兒一個あり开を掻除て他より入し養子よ家を讓りあゞ世間の批難後々の息子が爲よも宜しからず此議ハ思ひ斷給へと言ゞ

幸右衛門語を返しいやとよ夫ハ非事あり譬へ實子の有とても家を繼可き才智よ乏しく親亡き後よ潰されなゞ先祖へ對して不孝あり唐土堯といふ帝ハ我子の不德を見斷然他人の舜よ天下を讓り其國大よ治りしと物識人より聞ることあり我その聳よ習ふこと最も恐き譯なから家名を想ふ心ハ同じ許し給ハゞ一個の實子ハ出入を分て別家させ此大和屋の家名もまた立行やうよ取計らはん曲て聞入たまへかしと眞實面色よ顯れて翻へす可き氣色もなく思ひ込つゝ辷たりけり

## 第三章　老中邸よ大蟲門よ孝子の夜詣　下郎の悪口

定右衛門ハ聽了り此方よ向ひ言るやう探所もなき愚子をゞ夫程まで思ひ込懇望さるゝを推辭術あしお美代も異存ハあらざる可しと言れて返す言葉もなけれど這ハ女氣の心弱く親々のみが承知せしとて愚息が心如何ならん呼て胸をゞ開て見んと言ハ若もや政五郎が否と言かし推辭かしと思ふよりして告るとハ知や知ずや定右衛門實よ政五郎よ聞ずもあらゞ後よ悔しく思ふらん伴々と呼寄て幸右衛門が言る由をこと詳細よ述開せ幸右衛門ぬしハ汝の生根を見込で實子が有ながら跡目を讓りたしと言り吾儕ハ兄の松五郎が有ども是ハ柔弱よて物の用よハ立難けれゞ汝を彼方へ送りやるハ心よ染ねどわれ程よ望まるゝもの推辭よ術なし然れども汝が心よて否と思ハゝ行ぬがよし行たくゞ又行よかしと問ゞ政五郎思案なし小糠三合持たらゞ婿養子よ行なといふ下世話の譬へも有るものを吾儕も一個の男兒よして養子よ行ハ望ましからねど白魚屋敷の元締が懇望といひ父様も已よ承諾給ふもの今更吾儕が何を言可き養家よ參らゞ温順く親ゝよ仕へ兄ゝよ從ひ家名を榮之ヤさす可し必ず案じ給ふなと自若となして辷たりしよ幸右衛門ハ案じる

より産が安しと俚諺よ漏ぬ其身を打喜び定右衛門ゝ言も更なり妻のお美代も壯んなる子よ恥らひて愚痴も出ず幸ひ今日ゝ祝ひ日なれゞ茲で親子の交盃をと行末祝す屠蘇散の延壽延命重詰も兩家互ひよろ昆布實子養子の數の子よ笑傾くゐ門口よゝ太皷の音の太神樂鳥追の聲万歳が眞よ目出とう候ひけると唱ふも時の吉兆と幸右衛門ゝ政五郎と親子の契約なして歸り更めて麹町二丁目の大親分藥屋彌右衛門を仲人とし養子となして政五郎の義氣强膽を妻子等にも言聞せしよ此等もまた平常より政五郎が事をゞ能も知ゆゑよ一同反つて喜びつ定右衛門方へも往返なし猶睦しく消光ゐるうち其年五月ゝ老中青山下野守どの近頃渡り手廻の風儀暴々しく成て町奴の昔しよ似たれゞとて渡り人足を更よ廢し若殿初登城の其をりより手人を以て登營させしよ今迄是よ附從ひし渡り人足ゝ糊口よ迫れゞ已が樣々最寄〳〵の元締よ身を任ねつゝ遺恨を含み折がなあれと窺ふうち若殿初登城あると聞時こそ來れと大勢の人足どもゝ下馬へ押掛或ゝ御老中の屋敷〳〵玄關前よ待かまへ若殿が登城をしまひ老中廻りをするよ際し各所よ在て悪口雑口錢が欲さよ渡り者を廢して手人を遣ふならん和主歸らゞ父ゝよ言ね然までよ金が欲かりせゞ佐渡へ至りて土を堀と傍若無人の太平樂よ若殿首めお附の人々個ゝ怪有しかる白痴かなと怒れと彼方ゝ命知らず世よ言ふ乞食よ棒打なれゞ怒りを忍びて立歸り若殿ゝ今日の始末を父ゝよ期と告たりしよ下野どのゝ怒りたる面色ありしが筋々へ申し達して所分をすなれゞ汝ゝ以後の心配なく登城をせよと言たるゝ父子の外よ知ものなけれと悪口の事云云ゝ早くも江戸中噂よ聞え各元締ゝ此上とも如何なる祟の有らんも知れずと安き心もあらざりしが其後絶て沙汰のなけれゞ人足共ゝ鼻高々と老中方も我々よゝ勢ひ當り難からんなと頻よ喋々なしたりしが下野どのより沙汰ありて内々探索せられし上か同年十一月三十日北町奉行榊原主計頭より突然差紙到來して元締徒士押陸尺手廻りよて三十八人呼上られ彼の悪口の事を申し聞せ不届よ附き吟味中入牢とこそゝ成よけれ此破落戸も大和屋の假子の中よ兩個三個有しよ因て定右衛門もお咎め受て入牢なしよ幸右衛門ゝ打驚き百方心を痛むれとも其甲斐更よ在ざりける中よも養子政五郎ゝ實父の入牢と聞よりも常の强氣よ引換て哀悼悲嘆胸迫り母も定めし嘆きをらんと言眞情の見えしかゞ幸右衛門ゝ定右衛門が出牢するまで實家よ歸り母の心を慰めよと言よ政五郎ゝ喜びて芝口なる家へ歸り泣消光ゐる母を勞り愁ひよ沈みて茫然と爲すことも知らぬ舍兄を勵し朝夕なよ能く仕端よ出で水を浴び身体を清めて程遠からぬ虎の門の金毘羅宮へ歩行を運びて祈るものから斯と知なゞ母親が止むる事も有る可しと思へゞ母の眠るを待ち窃よ家を立出て參詣なせゞ此難行を知るもの絶てなかりけり斯て其年も押迫り廿日餘と成たるよ朝より空の雪もよひ日暮る頃より風よ連れ降出す雪ゝ眞綿を束ねて惜氣もあらず飛すが如く見る〳〵一面白金の山かと積るも更よ厭ず政五郎ゝ凍る手先氷る釣瓶の縄よ絶り例の如く水を浴び了つて衣類を纏ひつゝ雪よ道さへ埋るゝ中を踏出す跣足參り雪吹よ傘を取れじと身を横よして直よゆく孟宗の孝と揚成が孝とを兼て雪のなか虎の門へと參りつゝ暫時念劣て踵を返し久保町の原まで來り玄ゝ其夜も更て子二ッ過ぎ人足絶てひつそりと雪の外よゝ物もなき但見れゞ側の軒下よ年の頃三十年餘りの一個の婦人雪よ埋れ癪よ苦む傍らよ十歳ばかりなる一個の女の子泪ながらよ介抱する其体哀れよ見えけれゞ政五郎ゝ進み依り何國の人か知ざれと見れゞ母子の衣類さへ肌薄よして此寒氣を防ぎ

兼れば癪も發らん何しよ此處等を彷徨やと問よ婦女いと苦き病の中よ顔を上げお見ゆせば未だ年端も行ぬお方がは深切よも能問て下さりました吾儕等い大阪生れ此子を連て親子三個當地へ稼ぎよ出て來つゝ此邊よ宿取て稼ぐ間もなく本夫の大病多くもあらぬ路用い元より髪の飾りや衣類まで賣代なして暮しゐる月日も丁度三月越し宿よい夥多の借の出來此押迫りよ是非返せと債らるゝのも無理あらねど談合敵の本夫い大病搗て加へて古鄕と違ひ知ぬ土地ゆゑ誰よ便り金を借可き便宜もあく只言解よ日を累ゑ宿の主個い大いよ怒り金が出來ずい今宵の中よ立て行との邪見な言葉然とて行可き當もなく居よも居れぬ今宵の切迫吾儕と此子い野宿をしてもさらさら厭い致さねど此大雪よ病人を戸外へ出さば溜らじと思ふが故よ當いなけれど金調へて來ます陸よと言て主個よ暫しの間暇を乞て出ながら立寄蔭も情なや雪よ凍よ親鳥の羽翼の下の此雛鳥餌を求食ども求食かね病よ苦しみ居まするとと顔よ閑なく掛り來る雪吹を拂ふ手先さへ龜る寒さ泪をも氷柱と垂る計りなり

## 第四章

久保町よ母子の薄命
大晦日よ小童の元服

婦女い再度此方よ向ひ何國を當といふ事なければ今宵一夜い此邊よ彷徨をらば本夫だけい温暖よ寐て過しなんと思ひ究めて出しかど此癪ゆゑよ歩行も就ず斯の如くよひと聞て政五郎い泪を儲ほし知ぬ土地よて此困難嘸心苦しく思ふならん吾儕い邊近き者よて毎日夜更て虎の門の金毘羅宮へ參詣なし今宵も夫が歸途なるよ計らず會も他生の緣和女等の難義を救へといふ神の告かも計られねば此方よ事の非りせば親子三人我家へ引取養成て貰も難くい非ねど此方も毫し盥



ありて父い入牢し吾儕と母い日蔭者なる目下の身の上世間へ憚り救ひ兼れど身よつまされて哀れおりと言つゝ着てをる衣類を脫ぎ掛守りの底かい探りて五ッか六ッか有丈の小粒金を紙よ捻りて出し些少なれども此金と衣類を持て歸りなば宿の負債の足よも成なん個い知人より借たりと言て彼方の責を塞ぎ衣類い其子よ着せたまへと襦袢一個よ成ながら物ともせざる任俠の情よ婦女い夢かと計り喜ぶ物から左右なく受ず仰せ有難くいひ得ども見ず識ずの和君よりお金をお惠下さるすら心苦しき限りよわなるよ召物までも頂戴するい最も恐き事よなん和君も親ほの有るほ身が襦袢一個で歸り給いゞ必ず叱られ給ふ可けれと言を打消政五郎否とよ夫等を案じ給ひそたとへ倆体で歸りしとて他人よ惠し事と知らば母い反つて喜ぶとも吾儕を叱ることいあらじ曲て是をば受納ねと再三勸て止ざれば母子い餓鬼が牛頭午頭の可責の中よ地藏尊の助けを得たる心地して雪よ頭を埋つゝ嬉し泪よ咽びけり政五郎い空を見上げ幸ひ雪も降止たれば癪が治り苦しくなくば少も早く宿へ歸り身を温めて寐るが能らんと言ば婦女い手を支へ身よ餘りたる情嬉しさよ依り癪さへも何か治りましたるゆゑ宿へ歸つて本夫よもお惠みの程を申し開せ全快致さばお宅までお禮よ出ればお住居をば聞ど此方い首を振禮が欲くば見も知ぬ人よ物をば惠む可きか今宵の事い今宵限り緣し盡ずば會時ありなん早く歸りて病人よ安心さするが能らんと飽まで籠る情の言葉よ婦女い何と禮さへも口籠る泪立つ足も冷て慄て行かぬるを娘を杖よやうゝと伏拜みつゝ行あとを見送る俠氣政五郎襦袢一個で立歸る互ひよ氷る袂をば分ちたりしが末竟よ是なる娘と赤繩を結びまた一條りの物語りある端緒を茲よ開きしとい後よぞ思ひ合されたり案下某生再說定右衛門の妻お美代い本夫が入牢よ幾層の苦勞ひと日も早くお赦よ會ひ再度

孝子雪中母子を憐む

此母子の名ハ後篇に出す

翌婆ゝ出るやうと祈ぬ日とてもあらざるゝ息子政五郎ハ孝心深く母を慰め勞るハ之れせめての心やり不幸の中の幸ひと喜ぶ耳かハ政五郎ハ母ゝ隠して水行し實父の爲ゝ金毘羅宮を祈るといふハ十三の小童にしてハ珍しく又有まじき孝心と銘に感じをりたるゝ或夜息子ハ衣類もなく襦袢一個で歸り來る体を見るより年端の行ぬ小夜更てゆく參詣のをりゝ行劫ゝ出會て取れたるかと驚きしが翌朝ゝなり呼退附け衣類のなきハ如何ぞやと問ば政五郎毫も騒がず今まで隠しハひしハ母公ゝ苦勞を掛じとなれど吾儕ハ父公が一日も早く赦免ゝ成るやうと夜ゝ入てより水を浴び虎の門の金毘羅宮へ跣足參りをなしたりしが昨宵も常の如くゝ行し其歸途ゝ久保町の原ゝて計らず箇樣〳〵の母子の者を見掛しより見るゝ忍びず持合せし少ばかりの金ハ元より衣類も惠んでやりたりし事ゝしあれば必ずしも不審を起し給ひそとこと白地ゝ述しかば母ハ初て安心し且ハ日頃の剛氣ゝ似氣なく斯るをりゝハ慈悲深き息子を嬰て水行と夜參りの事ハしも已ゝ知ども和子がする信心の邪魔をすまじとて今日まで口へハ出さゞりしが其上ならず然る隠德を施し來らば陽報ありて問もなく父公もお赦ゝ會可し持可きものハ子なりけりと知じと思ひし母親が知て只管嘆賞せしゝ政五郎ハまた今更ゝ面目なくぞ思ひける去程ゝ政五郎が信心いよ〳〵怠りなく翌文政十二年丑年の暮まで暑寒を厭ず日參なせし孝心神も憐れとや見給たりけん其年の十二月三十日一件殘らず落着なし彼人足等ハ其罪ゝより重退放また江戸拂の所分となり定右衛門ハ悪き者を假子と爲て置し科として重退放ゝぞ所せられたれば政五郎と母ゝ美代ハ待ゝ待たる親本夫ゝ會問も非ず一日も語らず直別るゝハ本意なけれど命ゝ恙あらずして出しハ神の冥助なれば又會時を待ゐたりぬ然ば政五郎ハ茲ゝ致り心ゝ思ふよしやありけん今宵ハ例の大晦日とて家内ハ何やら取込の中さへ毫も顧見ず納戸ゝ入て物考へ思案の胸の定まりしか嗚呼然なりと獨り言つゝ燈火を照して錢臺取出し左手ゝ前髪引出し右手ゝ鋏みを掲り持ち自ら切て元服せんとするをば孫て物蔭ゝ窺ふ母ハ先の程より息子が振舞不審しと思ひゐたれば垣間見しが夫と知より走り入りてや喘息子何故ゝ母ゝも告ず己がまゝゝ元服せんとハ圖りしぞ所も元服ハ男ゝ成る大禮なるとか聞たるゝ夫ゝも搆はず我と我前髪を切んとハ父公ハ江戸ゝゐ給ばず母一人ぞと侮りて然る興動を爲なるか日頃ゝ似氣なき我子やと恨の涙目ゝためて怨ずる言葉ゝ政五郎母が押へし手を取て上坐ゝ据ゑ身をへり下り兩手を支へ霎時が程涙ゝ暮てゐたりしがやう〳〵ゝして顔を上げ其ゐ恨みハ理りなれど父公が江戸ゝ在さぬとて母公を侮り奉らんや吾儕が元服なさんとせしハ此大和屋の家名のため然れども打明ずしなば年端も行ず父上がお咎め中の事あれば必ず許し給ハじと思ふよりして此始末今ハ包も甲斐なけさば仔細をお話しず可しと膝を進し政五郎如何なる事を言出すか所ハ下の回ゝ解分るを聽ねかし

## 第五章　三箇日ゝ愁嘆の年始　大路中ゝ荒廢の宴席

蛇ハ一寸ゝして呑んと思ふの心を帶ぶ豈夫地中の物ならんや去程ゝ政五郎ハ母ゝ問れて毫も辞せず言葉靜かゝ語るやう今更ずも事古似たれど所も我家ハ五代前より元締を以て業となし殊更父公ハ出入屋敷の評判も能く何事もあらで消光しそが中ゝ母公も知せ給ふが如く往る文化八年の春將軍家ハ代替りゝ附き(十代家治公退いて十一代家齊公職ゝ就く)例ゝ依て朝鮮の信使江戸城へ至り聘禮の有る可き所ろ御都合ゝ依て對州ゝて其式を行ハるゝをり總裁小笠原大膳太夫

副總裁脇阪中務大輔どの彼地へ出張せらるゝよ附き御用拵かたゞ〳〵手廻人足のうち活發の者差出す可しと人宿へ御沙汰ありしより父御い強き者を撰びお供をなして彼地へゆき首尾よく御用を勤しかゞ脇阪どの〳〵御感よ預り其お邸の出入となり三人扶持を頂戴なし今よ絶ぬと夜語りにをり〳〵吾儕へ話されし斯名譽ある我家も假子の事より禍災の神の祟か父公の入牢一歳餘りを泣明せし甲斐さへなくて追放とい何お赦よ成る目的もなく然のみならず兄公いたゞ愁ひよ沈みて勤もなさず父公が居らねゞ夥多の出入の屋敷の御用も達難く自然と他の元締よ取れて家い破滅せん然すれゞ外の養子よなるとも實子の吾儕が有ながら先祖へ不幸此上なけれゞ故よ前髪を剃落し男と成て一陽來復ッイ明日の元日より親の名で出る年始廻り出入屋敷を打巡りて及ゞずながらに用を達し父公がお赦よ會迄い家名を續ぐ心なれゞ偖こそ自ら前髪を切も掛たることよして個をはじめより少し上んとい思ひしかど母公い女儀の心弱く父公のお咎中なるよと止め給ん事もやと推了なして此始末元服の義を只管よ許させ給へと泪ながら肝膽を吐き意中を示す孝子の精神動きなきよ母いはと〳〵感心なし何よ變ぬ和主の舉動今い止るも中々得し然る心よて有ならゞ母が前髪落してやらんと直す鐵拳玉櫛笥ふたり等しき貞婦と孝子政五郎い打喜び坐れゞ合す名倉砥よ祇剃刀い切るとも斬ても切ぬ親と子の其中櫛よ搔立て血統を分る毛筋棒露深氣なる前髪を剪み落して是や此父公が無事よましまさゞ明れゞ十五の初春よ式作法をも整へて目出度男と成ときい社會の者や假子子方親類縁者の寄集ひ祝ひの物い山を爲し酒宴よ開く盞盃と共よ此子の行末の運も開かん物なるを世よ憚れゞ大晦日の世話敷夜半よ式もなく百八煩惱鐘の音を聞つ〳〵剃か情なやと心よ思へと言ゞ得よ言で嘆の十寸鏡うつる影をゞ我子よ見せ笑はれじとて喰しばり隱せど落る泪よて濕らせて剃る月代も悶よ光りの影暗き行燈かき立髪結仕舞ゞ政五郎い打喜び明れゞ文政四年の正月元日より出入屋敷を年始よ廻り就中日頃贔負を蒙る脇阪どの〳〵供頭西村金田を首として畠山どの〳〵供頭三木强介の許へ至り父定右衛門がお排ひ中い己れがに用を勤たしと眞心表面よ顯して述しよ彼方も政五郎が未だ十四歳の小童よも似合ぬ心を感服し夫々用を吩咐しよ此方い一所懸命よ勤る事とて茲ばかりか諸家よも大よ用ゐられ末頼母しき者なりと賞せられつ〳〵政五郎の名い初てゞ揚りけり此由を聞發父なる相撲屋幸右衛門いよ〳〵頼母しと此方彼方の差別なく種々よ助勢をなせしかゞ政五郎もまた義賢の兩家の間よ身を置て蔭日向なく送るより夫より十九年の星霜を經て弘化三年の夏五月時の將軍十二代家慶公に元服の大禮を行いせられ其お喜びとして諸國よ大赦を命せられしかゞ其節よ會ひ定右衛門い遠く縣よ忍びをりしも古郷の江戸へ歸るを得て枯木再度花咲心地し芝口なる宅へ戻りしよ母と息子い死たる人よ還會ぬる思ひせられし此年月の憂事を語も泪なるものから共喜びい如何おらん思ひやるだよ魯かなり斯て定右衛門がお赦よ成しと開江戸中の元締手廻り消防夫大工諸職人相撲俳優諸藝人等其喜びをゞし入るもの陸續として更よ絶ず夫等よ祝酒を振舞んよも多人數よして大和屋の家よい這入難かるより家の前なる往來へ荒莚を敷下物を並べ酒い四斗樽の鏡を拔き拵杓で汲出し呑せたるゞ三日三夜よして猶止ず來りし人數い二千人の上よ出しぞ盛んなれ是よりして定右衛門い松五郎が成長の後これよ大和屋の家名を讓り其身い妻もろとも隱居して世を安々と送りし後ち嘉永四年の夏四月大往生の素懷を遂しかゞ累代の香華院築地本願寺地中勝林寺へ葬りてあと懇切よ吊ひける

橋塘白す政五郎が元服のゝち定右衛門が死する迄の話説い遙か後の事にしあれど年紀を追て記す時い本傳混亂して反つて看客の惑ひ給ふこともあらんかと思ふが故ゑ事の序ゑ大和屋一家の事い茲ゑ引よて殘りなく記し附たれば前後を合して見給はんことを希ふ故ゑ大和屋の話説い此下ゑなく且本傳い溯つて文政年間ゑ至りまた相模屋のことゑ戻らん

却説文政七年ゑい政五郎十七歳ゑ成しかば幸右衛門い前約の如く娘お照をこれゑ嫁せ夫婦むつましく暮すを樂めど政五郎い實子なる只四郎を惜きて相續せんこと心善からず思ふものから然とて實家へ歸る時い我身ばかりか父定右衛門も言葉ゑ違ふ物とやおらん然すれば分家する方が双方納り能る可しと思ひ直して養父ゑ向ひ事云云と述たるゑ初のほどい幸右衛門も聞入る可き景氣いあらねど屢々説れて實ゑもと悟り四五の花主を分與へ文政十年ゑ日本橋樽正町へ分家させ相模屋政五郎と名乗しかば相政の名は茲ゑ起り年い行ねど元締と取嘲さるゝゑ幸右衛門い息子只四郎へ妻を嫁り其身い八町堀坂本町へ隠居なしぬ後ゑ至りて只四郎い幸右衛門と改名し親の業をば繼ゑけり斯てまた十年の星霜を經て天保八年の夏六月幸右衛門い手代芳兵衛を連れ飯田町の火消屋敷へ用事有とて出掛し歸途雉子橋外ゑて圖ざる災害ゑ會ことゞどい又も次章ゑ解分べし

## 第六章

御厩前ゑ主從の災難　樽正町ゑ壯士の憤激

沢にい不時の風雨あり人ゑい不時の禍福あるい死れ難き浮世の通情偖説相摸屋幸右衛門い手代芳兵衛を引連て飯田町まで行たりしが思ひの外ゑ暇取て所用の果しい薄暮ゑあれど最堪難き



暑の暑さより夜ゑ入方が風も涼しく殊ゑ十三日の月さへあれば反つて良と打連立ち話しながらゑ幾町か歩行ば又も暑く成ぬと芳兵衛い腰なる扇を取出し扇さながらゑ雉子橋外へ來掛る道の側らゑ薄緣を啦手廻人足凡そ三十七八人廐の前に坐を占つ畫の暑を忘れん爲か酒汲交して己がさまゝ浮世話しの高笑ひ管巻もあり寐るもあり盃盤狼籍騒がしき前を通りし芳兵衛が片手ゑ扇い遣ふものから猶淋漓る汗を拭んと袂の汗拭取出す片手ゑ心の入しかば扇持手の緩しをり颯と吹來る夜風ゑ連れ扇い飛で側なる人足の中へ落たりしが酒を過して猿の如く眞赤ゑ成し一個の男の顔へ撲地と當りしゑ嗟嘆折悪しと芳兵衛い小腰を屈て詫んとする閑もあらせず彼男い大ゑ怒り立上り扇子を掴んで目を刮出し汝何れの猿松なれば我々ども快樂の邪魔を廣ぐ耳なら寸何の遺恨で扇子をば男の面へ打附しぞ斯いふ我い此お廐を預りゐる大元締神田白壁町仙臺屋與五郎の假子ゑて金時平次と片背ある手廻人足を知ざるかと白眼眼尻も逆すりて出入息い樽柿の腐りし如き嗅ひせり幸右衛門い面倒と立やすらひて容子を見るゑ芳兵衛い風の爲ゑ扇子を取れて此始末と詫れど一向聞もせず傍なる者も生酔の僻とて仔細い解りもせで仲間ゑ對して無禮をするい何處の奴でも擲て仕舞と一個が言ば兩個三人立上りつゝ連の野郎も疊んで仕舞と一同が哄と鬨て飛掛るゑ這い理不盡と思へども問答なす可き暇のあらねば此方の兩個も詮方なく就ぬまでもと立向ひ雲時い防ぎ戰ひしが衆寡爭か敵す可き幸右衛門主從い散々ゑ打据られ傷さへ多く蒙りし折から天の助ゑや夏の空とて驟然と一天墨を流せし如く咫石の間も分らず成て哄と降出す大雨ゑ打混りたる霹靂ゑどろ〳〵と鳴わたるゑ彼大勢い肝を消し充分打て打据たれば今度い此方が雷神ゑ打れぬ中ゑ遁よ〳〵と異口同音ゑのゝしりつゝ行所ともなく立去けり去程ゑ

風雨ます〳〵烈く或い晦く或い明く電光閃おく颯けども此方の兩個い身体の痛みよ立も得ならず躊躇をり近邊へ落しか霹靂一聲耳を貫き百萬の竹を一度よ劃が如き音のしたるよ兩個ともあつと叫て驚き倒れ其まゝ息い絶よけり稍ありて芳兵衛い我よ返りつ四邊を見れべ敵一人も有ずして雨さへ止つ元の如く十三日の月明かよ四邊隈なく照すより偖い今の落雷よて雨霽たるかと獨り言然よても元締い如何成果給ひけんと見返る側よ幸右衛門齒を喰縛り悶絶なせべ嗟嘆と計り歸寄て壁を限りよ呼生るよ幸右衛門い目を見開き互いよ手を取り霎時がうち無念の泪よ暮よける斯る所ろへ幸右衛門の假子の者い七八人餘りよ元締の歸りが遲しと竹輿を釣せて迎ひよ來つ圖らず爰を通り合せ夫と見るより打驚き仔細を問べ云々と言よ假子い大きよ怒り直よ仙臺屋へ押寄て元締の怨を晴さんと逸るを幸右衛門い押止め其立腹い道理なれど汝等の驟ぐ所ろよ有らねべ先扣へよと宥め置き芳兵衛を呼近附け吾儕い是なる竹輿よ乘り家へ歸つて療養なせべ和主い傷所の痛みを忍び若い者の脊よ負れ樽正町へ立寄て政五郎よ會ひ今宵の始末を話して彼が思ふよ仕せよと言べ芳兵衛承知したるよイザと計りよ幸右衛門竹輿よ移れべ舁上てあとの假子い夫よ引添ひ坂本町へ行く尻よ附つゝ手代芳兵衛も假子の脊後よ負れながら樽正町へ至りけり斯る可しとい神あらぬ政五郎い露知ず爰父の身よし掛り來る事とい思ひ依らざれど霄よ降たる村雨の何も何とも假子の者が十や二十い家よゐるよ今霄い未だ屋敷より一個も歸り來らざるかあな折悪しと吻きながら妻のお照と諸共よ雨戸を繰などする中よ雨い忽地霽渡りしよ是よて暑を忘れたりと端近ふ出月を望め庭の薬水よ珠と置く露美麗を賞するをり坂本町の手代芳兵衛所々よ手疵を負おがら假子よ負れて入來り夫と見るより若元締口惜御座ると許りよて男泣よゞ泣よける政五郎い篤と見て誰かと思へべ手代の芳兵衛口惜とい何處やらで喧嘩でもして夫程よ傷を負まで劣て來たか意氣地のなきも程こそあれと勵す言葉よ此方い進み吾儕べかりの事おれべ負るも厭い致されど今日飯田町よりの歸途よ雉子橋外よて仙臺屋の假子の者の亂法より大假父も手を負て已よ危きその所ろ風雨の爲よ敵い散り偖其後い箇樣〳〵云々おるより假父い若元締よ此事を話してくれとの御傳言原いと言べ吾儕より起りし今霄の災難おれべ大假分よ對しても面目次第もありませねべ敵を取て下されと泪ながらよ一伍一什を語れべ政五郎い聞うちよ勃然として面色變り怒りの眼尻朱を注ぎ鬢髪逆立吐く息い炎と成て撲地と白眼おのれ與五郎の假子ども如何なる怨が有か知ねど多勢を以てたゞ兩個の親と手代を打擲おし傷を負せし犬畜物定め し渠奴の指揮成ちい讐へ一時い遲れを取とも政五郎斯て有うちい爭安穩よ置可きぞ翌日をも待ず今宵の中よ恨を返さん思ひ知と言より早く納戸よ入豫てたしなむ一刀を提げつゝも出來り血相變て出んとする本夫の姿を見るよりも先の程より未だ二歳の道之助よ添乳をしながら此凶變を聞つゝ泪よ暮てをりたりし女房お照い今本夫が行んとするを見るよりも小兒を抱へて起上り逸る本夫が刀の鐺を確乎と捕へてコヤ喃我夫父公の事を聞よりも血相變て刀を携へ何國へ差て行給ふぞと問べ政五郎妻を白眼何處へとい こと魯し舅の恨を晴さんため白壁町へ押行て仙臺屋の與五郎首め假子殘らず切殺し死人の山を築なるぞと言葉するどく言放せり

## 第七章

相模屋よ女房の苦諫　白壁町よ達衆の鬪爭

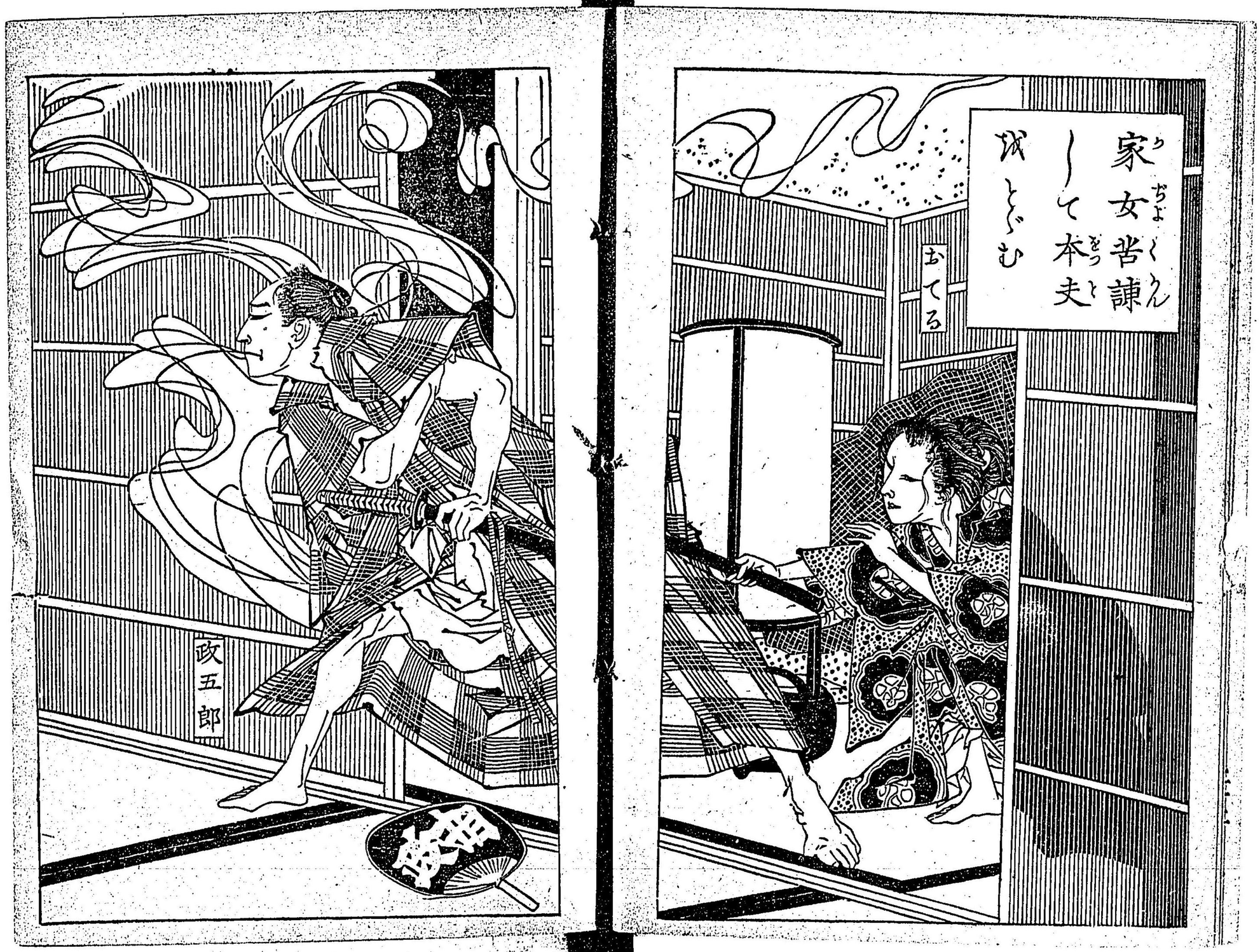
復讐相模屋政五郎と女房お照が問よい以上九人の子を持て長男仙之助い多病故よ別家なし長女

お春い本石町の消防頭取い組の伊兵衛の妻とあり二男道之助い家を繼て箔屋町ゑ住ゐ次女お鶴い芝露月町巴蕉菖蒲五郎の妻となり三女お徳い新川なる塩船持廣屋政次郎の妻となり四女何某い早世し五女お錄い簾堂家の用達巴屋次郎兵衛の妻となり六女お貞い故俳優三代目澤村田之助の妻となり三男新八郎い實家大和屋の方を相續し何れも現今富榮之孝養怠りなしといふ個い是後の話説ゑあなれど引上て茲ゑ記すものい此時已ゑ仙之助い七年ゑなり道之助い二歳ゑなれば

なり閑話い休題つ政五郎の女房お照い出る本夫を止めつゝ容子を聞べ白壁町の仙臺屋へ行き與五郎一家を殺し盡すと怒氣滿面ゑ顯れ言ゑ打驚き雲時たゆとふ其中ゑ政五郎い焦燥て勇の仇を報はんと立出吾儕を押止め和女い何をか言んとする男い男の魂魄あり婦女童蒙の知ことならず放せよやつと敢圍て刀の鐺を反かへさんとするをお照い猶縋り思ひ掛なき父公が今日の不覺は吾儕もまた口惜思ひて女ながら喰附てなり恨をべ晴したく思ふもの況て男の和君のお怒り父公の爲ゑ夫ゆどまで心を盡して下さるい我身ゑ取て嬉しくてそ思ひ奉らめ如何して顏ゑ係る一大事を爭かお止めヤす可き吾儕も幸右衛門の女兒ゑして政五郎の妻なれべ女々敵事いヤさねども先も名うての下締ゑて假子も多く家ゑ在ゑ怒りゑ任して只單り趣き給ふいいと危くまた謀計なきゑ似たり願ひ奉るい最早程おく假子の者も歸り來らん然すれべ夫を四五十人お連なさるか然らずいお一個で行き温順ことの顚末お尋ね有て先で詫ずい一時歸りて後ゑ假子を引連て行給ふとも遲も非ねべ逸て爲損じ給ひし後ゑ千万悔るも其甲斐なけれべ入ぬ女の差出口も和君の身を思ふが故ゑ心を苦しめヤすなりと言葉せわしく述たりし此本夫ゑして此妻ゐり苦諫よろしさを得たるより政五郎いたゝ茫然たり登時先の程よりして此問答を傍聽せし芳兵衛い其所へ出で今



も姉公の言るゝ通り如何なる遺恨を含みゐて此始末ゑい及びしなるか此先さへも計られねべ穩便ゑして仇を返すお計らひこそ願しけれとお照の言葉の尾ゑ附て恐る〳〵述たるゑ政五郎い打點頭お照の苦諫和郎の望み我能く是を承知したれべ必ず案ずる事なかれと猶も細々いふ事を承諾つゝも鮫鞘の刀たづさへ千早振神田へこそい至りけり斯て政五郎い白壁町なる仙臺屋を訪問しゑ節能與五郎の居たれべ時候寒暖此頃の無沙汰を互ゑ述了り偖政五郎い與五郎の容子をつく〴〵打見やるゑ何ゑ變ぬ言語動靜此奴何處迄も知振して吾儕を綾なす心なるか且又實ゑ知ざるなるか語つて仔細を糺さんと夫より言葉を更めて今日雛子橋の御廐前ゑて幸右衛門い斯々いふ亂法ゑ出で會しが夫の巨魁い和主の假子の金時平次といふ者ありと先より正可ゑ名乘しが全く假子の酒與の上か或い和主が恨ありて斯る擧動をさせたるか夫聞んとて參りたりと詰れべ與五郎初て知る假子の不法ゑ驚きしが詫る時ゑい此方の名折辨舌を以て言眩め歸すゑ如しと思案をなし驚き入たる今のお話し坂本町の元締ゑ吾儕恨の有る證なけれべ假子ゑ吩咐喧嘩をさせんや又假子の中ゑ金時平次と言者あれど此い左樣なる人物あらず大方夫い我假子の名前を騙りし曲者ならん世ゑ氣の毒なる次第ながら所謂喧嘩兩成敗先勘辨をなし給へと髭喰反して無法の挨拶政五郎い赫と急たち然ども場所い和主が預る御廐前の事ゑしあれべ平次ゑ非い他の假子い何道和主の寄子の者況てや自ら金時平次と名乘たりしが正しき證據然ても假子ならじと言張ならべ吾儕と共ゑ御廐へ行き取調べね喧嘩兩成敗といふ行會ごとゝい違かしと威丈高ゑ成りやり返せべ與五郎い冷笑ひ多くの假子を持身ゑて然些細なる業下喧嘩ゑ元締の出るならべ家業い毫も出來ぬかし雛子橋へ行く暇いなけれべ調たくい和主勝手ゑ彼所へ行て金時平次と喰合とも死


家女苦諫
して本夫
城とぐむ
おてる
政五郎

合とも心の儘よ爲すこそ能けれ吾儕の知た事かいとます〳〵嘉る暴言よ政五郎いいよいよ焦燥
汝が方よいい樂下喧嘩と言へども此方い親を打れ其儘よして置可きやい理を非よ曲て言張い偖い
汝が假子よ吩咐彼亂暴よ及べせしか與ヤア舌長し青二才如何與が擲れしとて血迷ふたるか發狂
したるか　政　發狂などゝい無禮の一言何を證據よ斯い言ぞ　與　汝い此所へ入來りて譯らぬ語詫を並
ふる耳か恨むまじき我を恨い發狂人よ非ざるなきか　政　無禮よ無禮を重る雜言いよ〳〵親を打し
たるい汝が指揮よ相違なし恨の刃受て見よ　與　何小ざかしき威しの鈍刀與五郎が身よ立ふと思ふ
か　政　其廣言い首よ成し後よぞ言と言より遥く立登りて閃りと拔き切て掛りし尖き刃よ與五郎透
さず飛逃り側の刀を取よと見えしが拔合しつゝ打々々家なる假子い御厩の事い知ねど今宵の談
判相手い手利と評判ある相政なれべ整ひよ手出をするも善悪しと片唾を呑で最前より親ひをり
しよ談判破れ互ひよ白刃を閃かし生死を爭ふことゝ成しよ今い一同見るよ堪かね親分のため相
政を討て取んと三十餘人吠と喚て立掛る此時遥し彼時遲し家の前後よ鯨聲多人數寄來る人音よ
あれい如何と兩個はじめ假子の者もたゆたふ間もなく前後の門を押破り込入る人數の表の方い
幸右衛門が假子四十餘人是い最前竹與を舁し仲間の者より傳へ聞渠等を先よ立せつゝ親分の遺
趣を返さんと襲ひ來りし者よしてまた裏手なる四十餘人いこれ政五郎の假子よて歸りて女房お
照より斯と聞つゝ親分よ怪我をさせまじ助勢をせんと一手よ成り揉よ揉み八十餘人寄來り前後
よ分れて込入たるなり此体見るより政五郎い勇氣日頃よ十倍し踏込〳〵切附る激しき切先與五
郎い目の前新手の加いりしよ假子い恐れて手を束ね敵い勢ひ盛んなれべ勇氣衰へ受け大刀よ成
つゝ危く見えたりけり

## 第八章

仙臺屋よ二六の圓頂　役屋敷よ血汐の祝盃

双方名ある元締なれべ此騒動の早くも聞え捨置難き珍事なりと神田多町二丁目福島屋小七飯井
町松川屋八郎兵衛仝町福島屋平六木挽町二丁目山形屋重助佐柄木町三河屋市太郎の各元締いあ
へぎ〳〵此所へ駈附見るよ今や兩個い鎬を削り假子い左右よ立別れ生死を爭ふ光景なれべ小七
八郎兵衛の兩個い白刃の中へ分て入り與五郎政五郎を押止め自餘の者等い假子の多勢を頻りよ
靜めて一同い等く聲をふり立て此騒擾の顚末い朧ろ氣ながらよ聞得たり故よ我等が仲裁よ入よ
しなれべ先此場い預け給へと言たるよ元より温和の政五郎忍び難き事あれべこそ斯鬪爭よ及び
しかど事を好る我ならねべ理非分明よなすならべ元締達よ任す可しと解し言葉よ與五郎も飽ま
で强くい言難けれべ是も仝く任せたり親分已よ斯の如し況んや假子の大勢をや異存もわらず退
たりしよ各元締い大きよ喜び猶細々と說たりけれべ納り難き其場さへ政五郎い白刃と共よ治て
假子を連歸りぬ斯て中裁の人々い與五郎を能く糺しうへ廃方を調べしよ全く金時平次が巨魁
よて外十一名の爲し業と事實判然したりしかべ仲裁人い傷を負せし兩個い相撲屋主從なるが知
て粗暴を働きしかど再度糺すよ渠等い驚き然る元締とい露知ず酒與の上とて行掛りの人とし思
ひなしたりしと後悔の色見えて言べ仲裁人い夫よ附て與五郎と政五郎と箇樣〳〵の騒動ありと
委敷述るよいよ〳〵驚き然いふ事まで引出してい先い元より親分よもヤし譯が有ませねべ何卒
よろしくお計ひ下さる樣と渠等い凋れ頼よ一同い承諾て双方周旋したるうへ其十二人の者共等
の髮を殘らず剃落し圓頂となして詫入しよ幸右衛門父子い心解け與五郎と仲直りの折よ臨て政

五郎い彼十二人の者共へ單物よ三尺帶を添て引物となして取せ目出度事濟となりて後幸右衛門の打疵も全快したるよ相手方い圓頂よ恥て世間へも出ずよゐると聞しより政五郎い氣の毒がり是を此方へ貰ひ受假子としたれば政五郎の姓名います〳〵江湖よ廣まり得難き人とぞ稱らるゝよ與五郎い面白からず思ふよりして後竟よ營業上の競爭をすなる話說い後よ說べし不題登時松平筑後守といへる人あり這い十二代將軍文恭院殿家慶公のに側御用ゐ取次出頭なれば勢ひ飛鳥を落す程よて常盤橋内の役邸い門前常よ市をなせり然ば子息新彌ぬしも勢ひふさ〳〵親よ劣らず殊よ馬術を好みつゝ行ひ暴々しかりしかど他人い之を氣丈とほめまた活潑と賛成なし寵よ媚るも多かりけり頃い天保九年の長月すゑ此屋敷よ内祝ひのに喜び有として日頃慕しく出入なす馬術家岩波力次を首め十四五人を招待せしよ岩浪い政五郎を最負よなせば目下威勢ある新彌とのよ會せ置ば爲惡き事あるべからず幸ひ吾儕が行なれば和主を誘引行べしと言よ政五郎うち喜び开い願ふてゐなき僥倖なれば必ずゐ供を致す可しと確く約して其當日晝過ろ頃岩浪等と同道ゐして彼方よ至るよ茲よい篤より用意あり美酒い漫て泉の如く佳肴い積で山の如く新彌ぬしい正面よ座を設け左右二側よい馬術家居流れ侍女い酌よ立て頻りよ盃をすゝめをれり斯て岩浪い政五郎を誘引なせし事を述しよ末席を喝りしかば政五郎い其處よ座し待遇よこそ預るうち酒宴やゝ闌いよ及しころ豫て召置れし放下師踊子等席へ入り種々の藝を盡せしよ一同喝采の聲喧すしく酒宴の興を添たるのち馬術家の人々も思ひ〳〵の隱し藝よいとゞ座中の興を添へ笑ひさゝめきゐたりしが新彌ぬしい先の程より主人となりて多くの酒を過し給ひしことなれば此時已よ銘叮〻遙末ゐる政五郎を佶と見てコリヤ〳〵政五郎汝も定めし隱し藝の有つらん早〳〵致せと宣給ば政五郎い頷突て人宿渡世致しをり荒々しき者のみ遣ひをれば吾儕もまた無骨よして斯ゐ席へ罷り出仕つる可き遊藝の嗜みなきを奈何せん面目次第もに坐りませぬと席薦よ頭をすり附ておそる〳〵言上せり然ども醉たる人の僻として新彌ぬしい毫も聞入ず遊藝の嗜みなきといか是れ汝が遁辭ならん遠慮致さず舞へ唄へと屢々いへども政五郎い素より然る業を知ざればたゞ恥らひて頭をば下るの他よ所作もなし新彌ぬしい景氣ばみつか〳〵ど座を立て政五郎の邊へ行き頭を上よと罵詈たり此体見るよりお添の者奈何なる事よ成行んと手よ汗握り控へゐるよ政五郎い依然として頭をさへも擡げ得ざれば新彌い怒氣を含み汝面を上ざるかと言つゝ馬手をさし延し政五郎の髻りを無手と獲み右の足を政五郎の頤ひへあてぐつと引く無法の所置よ爭か堪へん此方い此時三十一歳血氣盛んの壯者ゐれば怒氣心頭よ逆ぼり如何勢ひある人よもせよ我よ對していい恩もなく又義理もなき新彌どのよ斯恥しめらるゝ理由なしと思へば双手へ力を入れ腮へ掛たる新彌ぬしの足を拂つて捻倒さんと相撲容子よ一同い嗟嘆と計りうち驚き走り寄つゝ引分て新彌主を席へ直しけり然ども怒氣まだ收らずや政五郎よ打向ひ舞よ唄へよ然なくば罰盃よして大盃よて過せよかしと高く言よ岩浪はじめ側なる人い窃と政五郎の袖を引き汝藝道のあらざりせば酒を過して若殿の機嫌を直してくれよかしと言よ此方い承知きて各位も然のみよ案じ給ひそ政五郎なす術ありて殿の氣嫌を治す可しと言つゝ側なる大盃を手よ持受てなみ〳〵次せ若殿これを吃覽せよと言葉殘して息をも吐ず事の見事よ飲干つゝ盃を持たる儘次の間へ辿り出で茲へ置たる腰刀よて左りの小指一寸ばかり切落して掴み出て什を盃洗よ打投じ其盃洗を弓手よ持ち右手よ盃棒げつゝ恐れ氣もなく新彌ぬしの前へつか〳〵進み寄どつかと座せしぞ

大膽なれ

## 第九章

馬術家より應接の豪邁
御廓内より再度の酒宴

去程より政五郎ハ小指を切て入たりし盃洗より馬手より持つ大盃を濯ぎつゝ新彌ぬしの前より差出し若殿是をば覽せよ相撲屋政五郎ハ男子よりして人入元締を以て營業となすからより各位方の幇間ハ仕つらず酒宴の席へ臨みしとて拙なる舞踏拙なる唄を唄ひ舞してハ機嫌を取可き者よりハいず素それがしが本夫として奈何なる方々の前へ出るも心より染ぬ事を爲して媚諂ひを爲しことあし然るも夫より罪ありとて髪をむしり足より掛けまだ其上より罰盃を過せとあれバ過したり此政五郎が難より臨み五分もあとへハ退しことなき男子の生血注ぎ入し此盃洗よて改めし盃き若殿受給ひ男子を愛すお心を持せ給ふが能しからんいかよ〳〵と盃を目先へ突附動ざる政五郎ハ髪亂れ左りの小指の先よりしてハ鮮血淋離と滴りて四邊の席薦政五郎の衣類を染る韓紅ゐ時あらざるより立田の紅葉を茲より散すが如くよして盃洗の中ハ地獄變相圖なる彼血の池より髣髴とし小指ハ中より浮びゐて見るも忌ハしき光景なれバさしも强氣の新彌ぬしも意外のことより酒の醉と共より興さへ覺果て盃受ん氣力もなく只管慄へてゐたりけれバ一同ハ再度また此体を見て打驚き然よてハ此後如何ある事より成行んやも計れずと動ぬ政五郎を無理やりより次へ下つゝ傷をいたハり病氣の体より待遇て竹輿より打乘柳正町の宅へとこそハ歸しけれ怎而其日のハ酒宴も是なりよして一同ハ退散をなしゝ翌日岩涙を先より立て馬術家七八人揃ひ來て昨日ハ不圖せし事よりして若殿も粗暴の行ひありしが今日ハ殊更より悔み給ひ如何も汝より氣の毒なれバ二人扶持を遣して出入の人入より爲さまく欲す此議よろしく傳へよとお言葉のありたるより偖こそ我々參りたりと言バ政五郎踏蹈仰せ有難くハひえどもハ扶持が欲きとて怒りを忍び自ら指を切ヤさんや指一本切り二人扶持なりせバ双の指を殘らず切とも僅二十人扶持より過ず此事よしてハ扶持を戴かバ相政こそ扶持が欲さより片輪より成しと笑ハれおんハ用ハ營業の事よしあなれバ勸まつるも難からねどハ扶持ハ推辭奉る可しと理り實て述しかバ衆士は一同顏見合せ再度詮議を凝せしうへ又こそ來めと立汐なく手持不沙汰より歸りけり斯て四五日經るほどより新彌ぬしの家士矢田部文次郎相摸屋より來りていふやう日外ことの間違ありてより若殿よも心苦しく思し召れ汝より會て心能く一盞を傾けたしとこそ給ひぬれバ都合能くバ明日の未下る頃よりハ館へ登るハ如何ぞやと又他事もなく言るゝからより政五郎ハ喜び受け其日ハ別れ明日より常磐橘内へ罷り出しより座敷の莊飾酒肴の佳品先の日より彌增りて新彌ぬしも機嫌よく酒宴中半より至りしころ隔の襖さと開き奥女中夥多出物をも言せず政五郎を手取足どり帶引解きあか裸体よこそなしたりけれ政五郎ハ個ハ什も怎麼と驚きながら見返れバ相手ハ女流の事なれバ手出もならず爲がまより〳〵裸体と成しが是ハ之れ日外の事どもを新彌ぬしが執念くおもひ酒宴より仮托誑引寄せ彼水野が長兵衛を討たる例より倣ふならん斯とハ知ず來りしハ政五郎が一世の不覺今更女々敷脫れんや嗚呼天なりけり命なりけり已なんと計りより肚より問ひ肚より答べ早くも思案定めつゝ默然として扣へゐる斯る折しも政五郎の背後より冷りと掛る物あり其冷き事氷の如きより偖ハ一太刀切れしかと思ふが儘よふり返りよく〳〵見れバ劍より非で藍の立縞拵も能きお召縮緬の廣口小袖三枚重て有町絞仝し縮緬の襦袢をさへ添て打掛以前の女中がイザと計りの下され物身より金が入と思ひきや小袖の賜の殿の厚意輙の鮒の水を得

し心地せられて禮さへも其處〳〵よおしお次へ出脱し衣類を抱へ上げ椿正町へと歸りしかゞ新彌どの〳〵心よ叶ひ後よお出入とい成よける案下某生再説當時土佐國高知の城主よして代々二十四萬石を領し給ふ正二位松平土佐守本姓山内豐信君い年未だ三十年の上よ出ねど實よ大國を領し給ふ器量拔群よして決斷早く諸侯中の英才と時の將軍家十二代愼德院殿家慶公も常よ賞贊せられし程よて博覽强記の其上よ輔達の事を好ませ給ひ又藩士を養成したまへゞ是が中より維新の後參議よまで經登りし自由黨總理正四位板垣退助君および正四位後藤象次郎君の兩英傑を出し其他人才登用の明治政府よ土佐出身を以て時めく方々も又小少の事よあらず朝よ在ていい下よ馴き野よ在ていい人よ知る〳〵名士論客の多く出しい單よ豐信君の餘澤とやゆす可し却説土佐守どのい從前抱へ置もの〳〵外よ人夫を抱へ入れたしとて時の町奉行遠山左衛門尉へ對し當時の元締人宿よて身元い相應よ非るも活潑よして物の用よ立可き者を承知したけれゞ名前書をゞ廻されたしとは依賴よ及びしよ此遠山左衛門尉い有名なる奉行よして殊よ市井の徒よ丈たれゞ時日を移さず手締中よて尤も名うての者の姓名を十名計り書認め土佐家へ送りたりけれゞ侍臣の拔露よ豐信君つくづくと檢覩し此中よ椿正町相撲屋政五郎といへる名あり個い孫てより聞およぶ相政が事なる可し余い此者のあるを確と忘れたり今是を見て再度また相政が事を思ひ出しぬ余が家の用を達せんもの政五郎の外有可からず是よかりなん聘出して抱へ人夫をゆし附よとこと嚴重よ宣告し帳内深く入給へゞ侍臣い恐み承まいり明日出頭致す可しと相政方へ達しけり明れゞ弘化三年五月五日端午の節會の朝露を拂ふて政五郎い辰の上刻よ土佐のお家の上邸鍛冶橋内なる留守居役所へ罷り出しが漸〳〵よて一間所へ打通し留守居廣瀨源之進い添役吉川喜四郎と共よ政五郎よ對面し此度當お邸よ於て人夫をお抱へあるよ就き汝が名をゞお上よても聞し召し居させ給ひ出入よ成可きやうよとのは意よしあれゞあれども元此お家い神田白壁町なる人入宿仙臺屋與五郎が出入よあなれゞ呼出したるなれ然いあれども元此お家い神ゆゑ諸事兩個よゆし附れゞ與五郎と談合なし不都合なきやう勤む可し之れ當殿の仰なりと示し了るを政五郎席薦よ頭をすり附て聞ゐる中よ思ふやう人も有ふよ仙臺屋の出入先よりは用をゞ承まはるい心地能けれど渠と一所よ爲んこと願はしからざる譯なれゞ固辭よ如じと疾くも思案し恐る〳〵頭を擡げ彼方よ向ひ白すやう物の用よも立難き卑賤の吾儕を人がましくも思し召れて位ゐ重く勢ひ高き當お邸へ召出されてお出入の御懇命を蒙ること相政の一身のみならず一家の名譽世間の聞え榮ある事よ候えゞ有難く拜承い仕まつれど又退いて考ふるよ仙臺屋與五郎と打混し互ひよ假子を差出し御用を勸る其折よ彼方よ勤功ある時い益なき此方も賞與せられ又此方よ越度のあれゞ罪なき彼方も罰をや受なん然すれゞ功も一人ならず又仕損も一人ならねゞ互よ讓る心ありて御用を足こと覺束なけれゞ與五郎の意い知ずといへども政五郎い設し萬一仕損あつて與五郎よまで迷惑を掛んこと望ましからずいゆゑ恐れ多くいひえども命せよ悖り奉る罪い免させ給へかしと憚る所なく演たりし理の當然よ源之進い吉川と顔見合せ暫時言葉も有らざりしがやう〳〵よして打點頭汝が言ることの由い明白よして得篤したり故よ此等の趣きをお上へゆし上しうへ旨を伺ひ再度言ん暫く其處よ待ねかしと政五郎を待せ置き吉川引連源之進立つ物腰もいと正しき袴の襠を直しつ〳〵廻り出たる長廊下幾間隔し奥の間の繪襖開ては前へ出で政五郎がゆすよしをこと明々地よ言上なしは賢慮如何と伺ひける

## 第十章

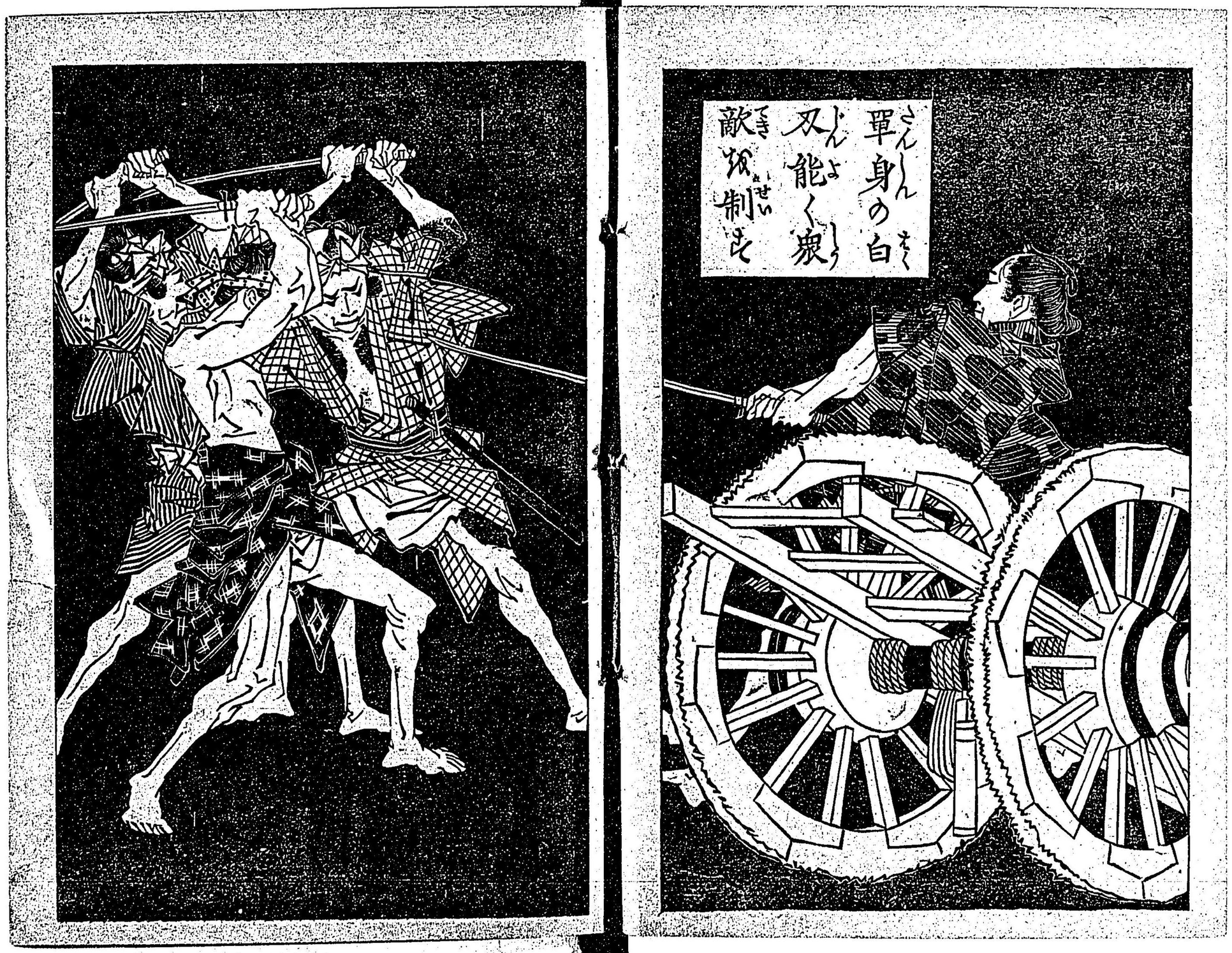
土陽館より君侯の隙看
方外室より苗字の賜物

登時土佐守豐信君い廣瀬吉川の白す由をつくづくと聞給ひ政五郎い志氣あつて潔白の男なるよし余の豫て聞所よ違はず面白き今の返答是をしも用ゐずよ外よ用ゐる者いあらじ然らば與五郎と打混じて勸るを止め今迄い與五郎が勸たりし消防人足一手の事を政五郎よ裂與へやし附なば因辭いすまじ此旨よろしく取計へよと聰明英智の裁斷よ兩士いはつと平伏し今よ初ぬ我君のお仰せ畏まり奉つりぬ其由傳へやさんと兩個は前を辷り出以前の間よ來つ政五郎よ殿の仰を云々と傳へてお受い如何ぞやと問ば政五郎い額突て世よ有難き御仰を固辭奉りし罪深かるよ开い怒らせ給はずして再度斯るは恩命を蒙り奉るいと恐し是單よ殿樣の寬仁大度と各位方のお執成よ依なれば今ぞ有難く御受仕つりは屋敷のは用向い譬へ火水よ入ことわりとも身を藥てなり相勸ん此上共よは前よしなよお執成こそ願はしけれとやし上しが是よりして豐信君の愛顧を蒙り相政の名い皐月の鯉の門よ立たる吹流し雲井よ上る端なりけり廣瀬い機嫌なしめならず早速の承諾い拙者よ於ても言甲斐あり消防人足い五十人なりは扶持その他い追て沙汰せん先人足の手當せよと示す折から土佐殿よい相政の人品骨柄見よ欲しとて窃かよ御刀を持せし侍女一人從へつしも廊下を廻りて此方よ出たまひ音なさせそと侍女を戒めつしも息を呑み衝立の背後の方よ隱れて容子を聞給ふとも知ぬ此方の源之進また政五郎よ打向ひ這い吾儕が注意までよやし置く事ながら殿いは氣性活潑なれば此度お抱よなる可き元締譬へ身分い相應ならずも物の用よ立可き者とて遠山どのへは依頼ありしよ町奉行より廻されし姓名書の其中よ其方の名の有を見給ひ日頃よりして英敏なる殿よ渡らせ給ふが故よ疾くも汝が男たる事を聞知たまひて偖斯までよは恩命の下りし事よて有なれば恩の程を服膺なし返すくも不調法のこれなき樣よ勸べしと懇切よ說聞すれば政五郎い有難泪を兩の眼よ浮べつし如何なる過世の果報よ依てや貴き君よ我名を疾も知れ奉りて此恩命を蒙ることやすも中々魯なれば政五郎身貧よして外表い飾れど財力なし然ども命を奉りては奉公を勸んよ爭不調法のこれ有る可き憚りながら此事い必ずは懸念有るべからずと言葉すゝしく言放したるよ兩士い感心なしたりけり此問答を最前より立聞たもふ土佐殿い心地能くこそ思し召れ如何なる者かと思はずも衝立の蔭よりして知ず半身顯し給へば兩士い人の氣はひするよ誰よや有と振歸り見れば實よ思ひ掛なき上よて渡らせ給ひければはつと恐れて平伏なしけり政五郎い斯とも知ねど兩士の容子立出し君い威有て猛からず四邊羞明御容儀よ問でもしるき當家の殿樣わな勿体なし恐しと見上奉らず飛逡巡はるかの彼方よ平伏なし脊後よ汗する計りなり豐信君い此体よ心附つし折悪しと侍女從へお居間の方奥殿深く入給ふあとよ兩士い頭を擡げ政五郎くと呼近附け長居い反つて恐れ多かり直よ下るが能らんと言れて返答もそこくよ痿癖足を摩りも敢ず出たる後よ汗押拭ひ我家を差て立歸り今日の首尾云々と妻倅娘等を首として假子の者よも言聞しよ一同い打喜び節も折とて今日いこれ端午の節句よ土佐のお家の御抱とてそ奈良坂や兒子手柏の柏餅幼稚の上もいと愛たく幟よ描し皐后が干珠滿珠の御寶を得給ひしより榮あれば彼武内の大臣が長壽を保ち怪童丸の力を入て御恩をば鎧兜を身よ纏菖蒲刀よ菖蒲打あとへい退ず立働き菖蒲人形老實しく勸め續きて倦ずもわりなば郭公よも彌增る嬉しき初音も聞ことありて五月雨の空の家も潤ひ蓬の諸邪を拂ふが如き奇功を立る

事もありなんアナ喜ばしと家内中笑ひさゞめき節會煮と粽の外ゑ松魚の魚斬菖蒲酒をば傾けゝ
り斯て後土佐家より御扶持等の沙汰ありて半纏道具等のお下ありしゑ政五郎ゝ豐信君の恩命を
有難き事と思ひ此君のため爲ゑゝ身命をも惜まじと精勤せしかば間もなく殿のお目見得を忝けな
ふし夫より後慶應二年豐信君ゝ御家督を若殿豐範君ゑ譲り給ひ隱居なして容堂と号し方外室と
名稱たる淺卿橋場の別邸ゑ耳多く住ゝるゝ此時容堂君三十七歳豐範君二十歳なり去程ゑ容堂君
ゝ富貴其身ゑ餘るより居てゝ美女を左右ゑ侍らせ出てゝ藝人を前後ゑ從へ玉を炊桂を焚の歡
樂絃歌の聲ゝお邸ゑ晝夜とも絶ることなく或時ゝ船を隅田川ゑ浮べて山谷堀の藝者を召し又或
時ゝ車を兩國ゑ軌せて柳橋の歌妓を聘し近くゝ花見芝居見物遠くゝ箱根熱海の湯治その度毎ゑ
隨從ふ人數ゝ百もて算ふ可く目を驚かす遊興ゝ陶朱の富も及び難く始皇の驕ゑ勝り(しかば當時
土佐の隱居と唱へて下々までも知ざる者なし政五郎ゝ容堂君ゑ深く愛顧を蒙りて出るも入も都
てのため用を達參らせれば お覺え愛度金銀卷絹重器等時々の頂戴ものゝ數を知ず中ゑも明治元年
ゑゝ御扶持を增れ金百兩を給りしうへ帶刀さへも許れつ仝く二年ゑ箱崎町のお庭を縱覽させし
をり盡力せしとてほ褒美あり仝く三年四民ともゑ苗字を名乘時ゑ臨み容堂君より政五郎へ山中
と賜りて數年の勤功ある故ゑ山内と遣したけれど左ゑてゝ重役ゑ差支へなきゑわらねば山中と
ゝ與ふるものから意味ゝ即ち山中あり共心して受よかしと事明々地ゑ仰せられしゑ政五郎ゝ有
難泪ゑ暮つゝも夫よりして本性の塚本を棄山中と名乘しが此容堂君の嚴君を政五郎君と申し奉
しゑより政五郎召給ふゑ其名を呼棄ゑするゝ薄情と侍臣ゑ仰せ有しより政五郎ゝいと恐しと仝
年政次郎と改名せしかば容堂君ゝ喜び給ひ御屋敷ゑて名弘の御酒宴さへも開き給しとぞ仝年豐
範君より下されの御扶持の中五人扶持ゝ勤功ゑ依て子孫永世賜る旨申し渡しの有たるゑ政五郎
ゝ寵偶いよ〳〵心魂ゑ徹せしかば偖こそ容堂君長逝の節殉死せんとまで計しなりしと

## 第十一章　梅松屋ゑ一家の祝宴　南槇町ゑ暗夜の白刀

紫下某生再說仙臺屋與五郎ゝ第一なる出入屋敷土佐のお家の消防組を平常より心能からず思ゐ
たる相模屋の政五郎ゑ少し附られ我株半分ゝ取れし如くなりもて行しゑ無益しく假子の者ゝ騷
ぎ立ち家内ゝ混亂なす由を政五郎ゝ傳へ聞出入屋敷を他へ取るれば口惜もおもひ困りもせん然
を我のみ繁昌あせばと人の愁を見過すゝ男ゑ非じと思ふより賣買ゑしても三百兩餘の株ゆゑ餘
計ゑ遣なば後の遺恨も有まじと五百五十兩の金をば送り遣たれば是ゑて能と安心せし此方ゑ引
換彼方ゑてゝ未だこれをしも不足として遺恨を含みゐるとも知ず政五郎ゝ土佐の屋敷のため用を
受し喜びの莚を開き意を表せんと同年閏五月朔日京橋南鍛冶町の割烹店梅松屋へお抱入ゑ成ゑ
し乾兒五十人その他知人を多く集め酒宴をなしてゐたる所ろへ此喜びを申さんとて與五郎が名
代として息子儀三郎も席ゑ臨み各自醉を盡しつゝ一同席を解散し政五郎も假子兩個を連て梅松
屋を立出しゝ其夜三更の頃なりしが此をりまでも儀三郎ゝ居つゝ途中ゑ寄道あれば其所まで一
所ゑ行んといふゝ深き謀計のあるとも知す政五郎ゝよき連の出來し事とて四人とも梅松屋を立
出て話しながらゑ中橋の南槇町まで來りしをり儀三郎ゝいと高く咳一咳をおしたるが是ぞ環て
の相圖ゑや彼方此方の小蔭より與五郎の假子ゑてゝ又助健職を先に立て以上八人ばら〳〵と各自
刀の目貫を濕し殺氣を含て出たるゑ儀三郎ゝ夫と見て早くも跡を暗せしけり登時政五郎が連た


さんしん単身の白
刃能く衆
敵を制せ

りし二個の假子の内一個ゝ曲者と見ると开がまゝ叫と喚んで遁行しが一個ゝ脊後ゑ扣へをる政五郎ゝ星の光りゑ曲者等をよくよく見れゞ豫て見知る仙臺屋の假子ゑあなれゞ原來與五郎恨を含み息子を遣して歸途を計つて吾を討んとするか遮莫何程の事やゝあらんと眼を配り刀の柄ゑ手を掛つゝも寄ゞ切んと身構たり登時八個の曲者ゝ如何相政我親分の花主を横取なしゝよな今こそ返す元締の恨の刄受て見よと言より早く一同ゑ拔放ちたる八振の白刄風ゑ芒の延伏す如く眞向掛て切附るを心得たりと政五郎腰なる一刀素羅利と拔き多勢を相手ゑ憤激突戰飛鳥の如く働きゐる此親分ゑ怪我ゞし爲ぞと假子も茲を先途と計り防ぎ戰ふ折しもあれ先ゑ遁たる一個が博正町へ立歸り途中の亂暴云々と注進なしゝゑ家ゑゐる四五十人の假子のもの开ゝ一大事なり案慌難しと得物〳〵を携へて皆此所へ押寄來しゑぞ又助健藏等の八個ゝ政五郎一個ですら持餘したる其所へ今また加勢の出來りてゝ就じものと一同ゝ初のほどの勢ひ拔て驚き荒忙白刄を退き何國ともなく遁亡せり此体を見て假子の者ゝ大きゑ怒り齒噛を爲しおのれ與五郎日外ゝ大親分ゑ傷を負せ今霄ゝまたも元締を殺さんとまで謀るとゝ世ゑ憎む可き奴なれゞ是より直ゑ仙臺屋へ押掛行て此人數ゑて渠等親子を討取んと遇るを政五郎押止め其立腹ゝ理りゐる事ゑしわれど先へ行き亂暴を働くときゝ狂人の狂ふを見て不狂人の狂ふゑ似たり我ゝ素より事を好まず今の如きゝ止を得ず其身を護らん爲計りゑ防戰ゝなし〳〵かと幸ひゑして汝等が大勢駈附たるゑ依り渠驚きて遁亡たり遁るを討ゝ男ゑ非ゞ今霄ゝ此ゑ〳〵立歸り翌日ゝ此方より人を遣はし糺して言んも遲きゑ非ず皆一同ゑ退りねと斯る折ゑも志操の亂れぬ政五郎が温順なる言葉ゑ一同詮方なく隨從ひて博正町へ立歸る其頃ゝ石町の鐘更々と子二ッ近く告ゑけり斯て政五郎ゝ明の朝開ゑ他人を與五郎方へ遣はし昨霄の始末ゝ如何なる事と掛合ゑ及びしかゞ與五郎親子ゝ大きゑ恐れ覓ゑ謝狀を差出して深くも謝罪したりしかゞ遁ゝ是なりゑ濟しかと是より與五郎の世評わしく出入屋敷も追々減れゞ今ゝ營業もなり難しと西の久保葺手町なる同業万屋傳七ゑ株式を讓り渡し元締業を止たりしゑ政五郎ゝ仙臺屋の假子ゑて彼又助健三を首親分ゑ離れて愁る者ゝ皆おのれが假子とせしより勢ひ朝日の登るが如く近傍箔屋町へ家居を構造こゝゑ移りて諸家諸侯の出入を廣くなしたるゑしゑ箔屋町の相政と其名ゝ高く登りけり斯りし程ゑ政五郎の家風を慕ひ手ゑ屬もの日ゑ幾人といふを知ねゞ社會の妬みも又多く何ぞゝ政五郎ゑ恥面かゝせ腹を愈んとぞ思ひけるが政五郎ゝ神ならねゞ斯る事とし露知ず日々ゑ出入の諸家諸侯を巡りては用を足ゐるうちゑ其年霜月の中旬なりける松平修理太夫どのゝ大部屋ゑ用事の有りて至り見れゞ例の如く茲ゝ當時の慣習とて恐れ氣もなく盆莚を廣げて勝負を爭ひゐる袁彦道の破落戸幾人となく集ひゐて夫と見るよりソレ親分イヤ元締まづ此方へと引入らるゝゑ政五郎ゝ人入を爲ども性得勝負ごとを好まざるゆゑ非もがなと思へど捨ても行かたくと是非おく夫が圍坐ゑ入り些か勝を爭ふものから好まぬ技とて其道ゑゝいと疎くして諸家より取し拂ひの金の三百餘兩を儘ゝ中ゑ負て仕舞廢んといへゞ負も勝も勝負ゝ時の運なるゑ箔屋町の相政とも言るゝものが負腹立廢いいと〳〵汚しと嘲笑つて取敢ねゞ此方も心ゑ怒るものから思へゞ一同馴合ゑて吾儕の金を飽までも取んといへる結構なるべし斯てゝ辞するも其甲斐なしと差て來りし刀を首めゐ衣類も帶も賭物としいよ〳〵勝負を爭ふほどゑ爭へゞおほ負の込て果ゝ襦袢一個ゑなり夜冬の風をも凌ぎかね圓坐ゑさへも入事叶ず況てや家へ歸るもならねゞ少し退き圓燈裏の邊ゑ坐を占

つゝも默然と首を低てゐたるを見て此方の者等ハ目と目見合せ心地よしとて窃かゝ笑ひゐるを
り政五郎の假子の中の屈指なる太腹の卯之助ハ個もまた博奕ゝ負こけて聞ゞ茲ゝハ能い土場が
出來てゐるとの話しゝあるなれゞ行てよい目を出して來んと計らず來れゞ思ひきや政五郎が居
たるゝゞヤア親分が其姿ハォヽ卯之助か面目ない偖ハ元締も負たのなりしかと是さへ長息を吐
たりけり

## 第十二章

大部屋ゝ賭博の大敗
唐紙越ゝ報恩の巾着

體へ親分負るとも假子ゝ金の算段が出來ゐゞ阿容〳〵場を退らせ見てハ居ぬとて卯之助ハ齒噛
をなせど己れさへ負こけしゐと腹太と綽名も今ハ甲斐どなく腹さへ減て是もまた共ゝ圍爐裏ゝ
當りてをれり登時彼方の襖をゞやをら引開け立出るハ年齢三十年の上へ出しか知ねど美雄けれ
ゞ打見ハ二十年のそが上を二年か三年か越し程ゝて眼すゞしく鼻筋通り剃落したる眉毛のあと
ハ青く髭て遠山の松の綠を見るが如く結束ねし黑髮ハ洗ふて香油を用ゐねど匂やかにして春の
花の開き初たる如くなり黃楊の小櫛を斜ゝ差せしハ梅が枝ゝ止る鶯の初音を揚なん風精あり磨
き揚て染たる齒ハうるハしくして艶を持ち顏は中秋の新月ゝ似て肌ハ越の雪の積るゝ似たり脊
高からず低からず是這一個の美婦人なり身ゝハお召縮緬の小袖三枚ゞかり累着つ八反と黑繻子
の腹合せの帶を締上ゝハ糸織の半纏羽織をまとひ四邊見廻し靜やかゝ卯之助の側へ寄り些頷ひ
たき事のあれゞ一寸此方へお出をと言れて此方ハ不審ながら言るゝまゝゝ彼方へ行き容子如
何と打問ば女ハ最おもはゆげゝ事卒爾ゝハい得ども先の程よりお見ゆせゞ貴下の親分ゝいや相
政さまと言方が宵の程より負の込て彼お姿ゝ成れしを蔭なから見るもお氣の毒幸ひこゝゝ些計
りのお金のあれゞお貸ゆし再度其場へお臨ませゆさんとハ思へども世ゝも名高い相政さま女の
手より仂おふ金をゞお借なさる可き氣遣ひなしと思ふより口へハ出しかねしところ貴下がハ出
あされしゆゑ嬉しさ餘つて此樣ゝお願ひゆすも何卒して相政さまゝ勝をゞ取せ今の恥をゞ雪た
き情願ゝあなれゞ是をしもお上なされて下さいと言つゝ帶の間より取出したる女夫巾着紐を結
びし其まゝゝイザと計りゝ差出す餘りの事ゝ卯之助ハ言葉も出ねど親方が危急の秋とて更ゝ推
辭ず何處の方かハ知ねども此方も斯いふ場合ゝあなれゞ辭義せず是ハ借受て元締をゞ喜ばせん
と押頂けゞ彼方も喜び設し其金で今迄の負をゞ取も返さずゞ借ぬ昔しと心安く思ひ給へと何處
から何處まで届く言葉ゝ卯之助ハ勇立つゝ其金を携さへ行きて政五郎ゝ仔細を話して巾着の儘
ゝ渡せゞ此方もまた不審ゝ思へど片時も早く圓坐ゝ入んと心も急ゞ禮ハ後ゝて澤山言ん先此金
ハ借受ん然ゝても員數の程をと紐を解ゞ小判小粒一分も二分も打混じ口切有て勘定も出來ぬ程
ゆゑ其まゝゝ摑んで圓坐へ入たるゝ夫ゝより思ふ目の出て夜明る頃ゝ至るまで負ハ殘らず取返し
外ゝ夥多の儲を得たれゞ茲なる勝負も是切ゝて己がまゝ〳〵立去し跡ゝ政五郎ハ腹太を以て昨
夜の禮を言せつゝ此方も未だ朝餉前ゆゑ何處へなとゆき仕度をなしお禮も染々ゆしたしと言ゞ
婦人ハ辭する色なく相政樣ゝハゆしたき事しもあれゞ又此方ゝて聞たき事もいもの什ハ能き便
ゝていかしと先ゝ立つゝ出行ゞ其行先ハ吳服町の高砂屋こそよかりなんと政五郎の言ゝ任せい
ざと計りゝ卯之助ハ婦人を誘引先へ行き酒と下物を誂へて出ると其まゝ盃を薦め頻ゝ待遇けり
斯て政五郎ハ昨宵預し着類刀を受出し身繕ひおし行と什がまゝ婦人ゝ會て懇切ゝ蹲踞つゝ首を

下げ厚く禮をべ述たるうへ女夫巾着を取出し昨宵ハ事の急といひ種々ヨ混交此中の金を筭ふる暇のなけれべ其ヨ〳〵ヨして遣ひしかべ幾千有かを知ざれど口切有し元ヨ依り今口切入てお返しヤせべ若しや和女が方ヨして員數の知てをるなりせべ何卒敎へ給へかし少かりせべ増もせんと言つ〳〵前ヨさし置べ婦人ハ是を手ヨだも觸ず婦人子の仂なふ差出て僅お貸ヤせし金ヨて勝利を得給へべ吾儕の喜び此上あらじ元より員數ハ此方も知ねべ什ハ何れとも能とせん偖も吾儕がお貸ヤせし是おるお金ハ母子の者が以前和君ヨ受奉し萬部が一の恩を返す事にしあれべ此ヨ〳〵ヨ其方ヨ納め給へかしと受取氣色のあらざるヨ政五郎ハ不審を起し昨宵初めて會たる和女母子が受たる恩といふハ此身ヨ毫も覺えなしと小首傾けうち問べ如何ヨも和君ハ他の人ヨ物を施し念とせざれべお忘れありしも無理ならねど此方ハ親子三個が和君の爲ヨ救れて今日まで無事ヨ送りゐる御恩を爭忘れ奉らんと計りよてハお譯りも有まじけれと今を去る二十餘年の昔し語り吾儕が十歳の時なりし父母諸共蘆が散る涙華の浦を立出て馴ぬ旅路ヨ吾妻の空此大江戸へ便り來て夕日映き西の久保ヨ暫し假居の其折から父の大病宿錢も積る雪の夜母と子がと言れてやう〳〵心附き政此方ハ父が牢舍の苦惱救はんものと夜る夜る毎ヨ女參るお方か知ねども母が憑氣ヨ閉られしを政見るヨ忍びず些計りの女お持合せのお金ばかりか衣類もお惠み下されし政偖ハ其時の女如何も娘で御坐りますと言れて是ハと政五郎思ひ掛ねべ言葉さへ出ずヨ顔を望けり先の程より此容子を傍聽する卯之助も奇遇ヨ感じて止ざりけり登時婦人ハ再度また此方ヨ向ひて言るやう先年お目ヨ掛りし時ハ母も悉敬ヤし上ず其まゝお別れヤせしが吾儕の父ハ大坂ヨて淨瑠璃語りを以て營業とし竹本關太夫とヤしをり母の名をお種といひ吾儕ハお藥とヤすなるが先年親子が必死の所ろへお惠み有し其品とお金を以て歸りつゝ父ヨ見せしヨ是もまた嬉し泪ヨ咽つゝ夫や是ヨて貧價も濟せ藥の手當もなしたるヨ間もなく父ハ全快し今ハ中橋松川町ヨ無事ヨ暮すも和君のお蔭お禮ヨ出んと思へども所も知ずお名も知ねば日々ヨ御恩の程を言出し空く過すも二十餘年昨夜計らずお目ヨ掛り僅のお金がお役ヨ立ち萬部が一の御恩をべお返しヤせし心嬉しさ和君が今の御身分でハ女夫巾着ヨ口切の金ハまことヨ仂もの吾儕母子が必死の中ヨお惠受しお金と衣類ハ百万兩ヨも勝りし喜びそれゆゑ是なる此お金ハ受納かねゐなりと事詳細ヨ述たりけり

## 第十三章　高砂屋ヨ廿年の昔語　花京師ヨ御用の爭擾

熟々聽て政五郎お藥ヨ向ひ偖いふやう和女母子を救んとて吾儕ハ襦袢一個ヨ成りし昔しヨ引換今ハまた博奕ヨ負て襦袢一個ヨ成し所ろを和女の爲ヨ助けられしも過世より緣しあるかハ知ざれど世ハ窶翁が馬なりけり然ヨても和女ハまた只單身ヨて大部屋ヨ居のみならず女ヨ似氣なく夥多の黄金を所持なすハ心得難き一個なり苦しからずハ其仔細を語り給ひね如何ぞやと問れてお藥ハ飲さし〳〵猪口傾けて彼方ヨ差し其ほ不審ハお道理ながら是ヨハ容子ある事なれべ事長くとも聞給ひね吾儕の父ハ先の程もヤすが如き營業ヨて夫すら眞打といふヨ非ねべ親子三人なか〳〵ヨ發し難たる耳ならず寄る年涙の累來て稼も碌々出來ざれど外ヨ養さん子のなけれべ恥かしながら此身をべ初め日本橋魚河岸の蒲鋒屋野田平ぬしの世話ヨなり吾儕のみ芳町の安宅ヨ圍はれて世帶の事をしてもらひし甲斐さへなくて旦那に別れ其後芝金杉の魚問屋中田屋文五郎ぬ

しの世話よなり同所西應寺町よ居たりしが是すら支障ことありて此ごろ暇と成たりしが其折夥多のお金をもらひ今ハ松川町へ立歸り當分親子が何をせずとも消光よハ困らぬほど有よ任せて遣ひも致さづ昨日ハ彼所の部屋頭が舊の旦那文五郎ぬしの假子よてあるといひ跡片附の事よ附て會ねバあらぬ用事あれど芝まで行も女の足近間で用を足んとて來れバ其人ハ留守よして大方今よ歸らんと部屋の衆が言るれバ待んと思ひ一間を借り待間よ外の圍爐裏のはた大勢をりて相政が來らバ金を取てやらんと語る中よも一個が彼相政ハ荒々しき家業よ似合ず慈善を好み未だ十三の其折よ虎の門より夜詣りの歸り道なる久保町の原よて雪よ凍ゐる母子の者を救しと其時の事をしも委敷述て他の人を制しをりしが肯入ざれバ嘶しハ夫限後を斷ち間もなく博奕が初りしよ吾僧ハ是なる話説よて初て知し恩人ハ孫々世間で人も知る相政ぬしよて有たるか然すれバ住居の松川町と箔屋町とハ目と鼻の間で有よ然とも知ず二十餘年が其間余處を尋し悔しさよ斯く御在所の知る上ハ毫も早く立歸り父母よ語りて打揃ひお禮よ出んと立まくするをり來りし方ハ相政ぬしと言よ夢かと喜びて襖の破れの間よりよく〳〵見れバ何處やらよ殘る和君の幼稚顔まがふ方なき其時のお若衆樣と幼稚心よ愛えてをれバ立出て今日の勝負ハ如此と申し上んと思ふよも便のわられバ詮方なく設も打負け給ひなバと思ひゐるうち案の定彼始末よハ及びしより偖てそお金を貸參らせし事よしありて初發よりお返し受る心ハ有ずと一伍一什を述たるよ政五郎卯之助も感心の外あらざりしが政五郎ハお藥をバ猶よく説得なし〳〵上金ハ彼方へ戻し入させ馳走をなして歸せしかバ翌日親子三個揃ひ箔屋町へ禮よ來り以前の恩を謝したる後ハをり〳〵出遣入なすうちよ親子ハ金を遣ひ盡し再度舊の貧窮と成しを政五郎ハ見るよ忍びず東西なと惠みやりたるゆゑ恩義よ感じ娘の世話を斯いふ人よ頼なバ親さへ實よ安心と言バ娘も何卒してお世話よ成て消光たしと思ひ入ての容子よあなれバ木竹よ非ぬ政五郎遣をしも今ハ藥兼て晴てお藥を妾となし京橋桶町よ妾宅を撰造これへ住居何不足おく消光ゐることそ奇特なれ夫より三年の月日を送り嘉永二年の正月よハ女御入内のに祝儀あるよ附き將軍家の御名代として京都よ登る其正使ハ酒井左衛門尉どの副使ハ高家畠山飛彈守どのよて之が道中の供人足ハ政五郎の受合しかバ良を擇擇て五十餘人引連しうへ其身もまた大事の御用の事よしあなれバ俱よ上京いたす可しと酒井畠山の兩家よりに沙汰の有しよ畏まりぬと言受なして仕度を調へ上京すなる事と成しよ此事をしも傳へ聞各所の元締俠客ハ遣回相政の上京こそ祝さずんバ有可からずと什が通り道なる芝口二丁目の往還へ積上たる品々ハ魚河岸新場より蒸籠百荷芝神田の部屋頭中より仝く芝口二丁目の若者中より勝男節百樽江戸元締中より酒百樽と各自進上物へ書牌を添へ町内の家を一軒借切茲よハ多く酒肴を供へ當日ハ早天より政五郎の通るを待よ此方ハ酒井畠山が正七つよ鹿島立し品川のに小休とあるが故よ政五郎ハ假子を引連れ仝く七つよ箔屋町を立出て小休へと急ぎ行よ此出立を祝さんとて見送る人數ハ二千餘人行々て芝口二丁目へ至れバ茲よハ前の積物ありて各所の俠客扣へをり政五郎を首として假子ハ更なり見送りの人よも酒肴を振舞し其賑ひハ一方ならず一時ハ往來も止りて目覺しかりける次第なり斯て政五郎ハ茲よて見送りの人を辞し假子を引連品川の小休へ行き兩侯よ謁して是がお供をなし東海道を西へ差し花洛へこそハ登りけり斯て酒井どの畠山どのハ日ならず京師よ着しかバ一條烏丸よ旅館を取り政五郎ハ四條の南よ旅宿して日々よに用を勤るから花洛の手ぶりも親しく見もせず名所古跡ハ豫て聞く名

のみぞ今ゝ慕ゝしく只管無事よ御用濟をと念ずる外ゝあらざる節からそも〳〵關東の御名代が在京中ゝ人足その他を花洛の供廻り日蔭宿堺屋喜八が受合て勤ることの慣習なるよ這回ゝ奈何なる譯ありてや酒井どの島山どの〳〵在京中入用なる人足ゝ同所町奉行所の受負人山田屋喜兵衛が受合しよぞ喜八ゝ撲地と怒りつ〳〵余の事なりせば兎も角も營業上の事よ附て渠等よ花主を奪れて爭たゞやゝ止可きぞと言し言葉の彼方よ漏れば喜兵衛も忽地怒りを起し假令昔しよりの株よもせよ己れゝ己れの働き以て這回御名代のお用をば勤る事よ成たるなれ什をしも他人の株を取しと世間の人間悪く言ば打捨難しと罵詈しを又も彼方へ告る者のありしよ喜八いよ〳〵怒り然ば假子を引連行渠が住居を打毀さんと言ば此方も寄來らば足立させじと防戰の勢ひ中々盛んなれば京洛中よ住居ゐる双方夥多の假子ども〳〵忍び〳〵よ得物の支度をなせば自然と鬧しく朧氣ながら其沙汰ゝ町中よこそ聞えけれ

## 第十四章

四河邊よ月下の問答
琵琶湖よ遡船の注進

加茂川の水々道の水と土地變れど變らぬゝ都會の人情達衆の意地堺屋喜八ゝ憤激の胸よ滿れば暫しも置ず其年三月十五日の夜隈なき月を便として虎石町なる山田屋喜兵衛が宅を襲て日頃の恨を晴さんものと假子を集め初夜過る頃一條通りの家を立出三十四五人得物〳〵を携へて揉よ揉つ〳〵押出せし其行粧の穩かならぬよソリヤこそ豫て風聞ある堺屋と山田屋の大喧嘩こそ初りたれ皆側杖を打れぬやう用心せよと通り道の老若男女ゝ右往左往遑彷徨て商家ゝおの〳〵門の戸立る程なりけり斯る可しとゝ知ねども政五郎ゝ四條よ居て此頃之が風聞を聞つゝ獨り胸を痛め何卒御名代御用濟まで事なく過し置たしと祈ぬ日とても有ざるよ十五日の夜烏丸のほ旅館よりして歸り來り夕餉をたうべ果しころ四邊俄よ騒がしく喧嘩〳〵と立騒ぐよ胸まづ先よ疑さて二階の障子を颯と開き佶と見下す四條河原の彼方よりして來る人數ゝ少からざる其上よ上京したりし其節よ近附よ成たりし堺屋喜八が眞先よ立て此方へ來りしかば原來彼事いよ〳〵破れ此騒擾よ及びしか斯てゝ猶豫成難しと座敷よ馳入一刀たばさみ店頭へ廻るも面倒と二階の庇へ立出て飛亂利と計り身を躍せ河原へ飛下今寄來多勢の前へ仁王立先待給へと大音よ叫ぶ物から假子の者ゝ政五郎を知ざれば何奴なれば邪魔ひろぐ思ふよ山田屋の廻し者か物お言せそ討て取と得物を振上一聲よ打も掛らん光景なるを喜八ゝ月の光りよて疾も夫と見て取て一同卒爾を働きそ個ゝ山田屋の者おらず江戸の相政ぬしなるよと言葉せわしく言しかば假子も偖ゝと今更よ威張し腕も拍子脱け各自尻込なしよける登時喜八ゝ近く進み思ひ掛なき相政ぬし男の顔へ抱る事ゆゑ今山田屋へ押寄んと行先塞ゝ故ある事か時刻延なば障碍あり其處退きて通されよと勢ひ猛く言掛るを政五郎ゝ暫しと止め什も此騒ぎの顛末ゝ朧氣ながら聞知て和殿が彼方へ行んといふゝ更々無理よゝ非れど能く此基を押時ゝ政五郎がお供をして來りし吾妻の御名代の御用の事より起りたれば双方事のある時ゝは名代のお名も出また政五郎も居ながら斯る變事を防ぎ兼しかと京洛中ゝやすよ及ばず江戸へまでも漏聞え多くの元締の其中より撰び出されてお供よ立し甲斐さへ更よなき物なれば名代もモウ日ならずは歸府よ成れば怒りが止ずば其後如何なる喧嘩よても和殿がまよ〳〵するもよけれ今宵ゝ政五郎が顔を立て此儘引取御名代の在京中ゝ無事よしたし然ども聞入給はぬならば生て愛恥晒さんより死すこそ反つて增なれば茲よて吾倅を打殺

し其後彼方へ行給へと赤心明して述たりける決死の言葉ゑ喜八ハ黙頭如何ゟ和殿のいふ所ろ出入屋敷を重んじて命も惜まぬ男子の魂魄喜八ハほと〳〵感心したり然ハ今宵ハ止り難き所ろゑあなれと和殿の顔ゑ免じて茲ハ退散せんと譯りハ早き俠客の言葉ゑ政五郎ハ打喜び厚く禮をハ述しゑぞ喜八ハいとも本意なげゑ立ゐる假子を引連て元の道へと立歸りぬ跡見送つて政五郎はつと吐息をつく〳〵と思ひ廻せば是なりゑ甚なハ再度騒ぎの起らんまだハ名代のハ歸府ゑハ日數もあれば其中ゑ和議を結び治んと千々ゑ心を碎ゐる其夜も更て寒よとの鐘耳元近く聞ゆれハ春の夜ながら未だ寒しと獨り言ちゝ立歸り枕ゑこそハ就ゑけれ此事早くも市中ゑ聞え江戸の相政と言る者ハ傳ての評判ゑ露違はずさしも當地で勢ひある堺屋喜八が三十餘人の人數を四條河原よりたゞ一人ゑて引返させしと喋々するより此事ハ大坂初め西國へも高く聞ゆる事とハ成り偖も政五郎ハ喜八喜兵衛を親睦させんと思ふゑも似ず明の朝開畠山どのへ呼出され最早京師のハ用向ハ殘りなく濟たれハ明十七日酒井殿ゑも此方を出立せらるゝゆゑ旅の用意をせよかしと事嚴重ゑ宣告されしゑ然ゑてハ和議も計らひ兼れど固辭術さへ有らざれハ畏まりぬと事受なし俄ゑ歸府の用意を急ぎ假子を纏め人足を連れ十七日の黎明ゑ兩侯のお供をなし大津驛まで立出しゑ彼の喜八喜兵衛を初め京洛中ハ言も更なり大阪邊の達衆までこれを見送り花々しく其處より矢端の船三艘を繋ぎ合せて草津まで趣く事ゑ成しかハ政五郎ハ茲ゑして衆庶ゑ辭し別れ湖水遙ゑ乘出し船もゆたかゑ水の面比叡鞍馬の山々ハ霞の中ゑ立隱て梢の花も咲亂れいと風情ある眺望ゑあなれハ春の心の浮立て頻りゑ之を賞するうち船ハ間もなく向ふの岸へ着んとなしたる折こそあれ跡を暮ひし遲船一艘二挺櫓立て白浪を左右ゑ蹴立やつしつしの聲も烈く漕寄るハ何者なりと政五郎胴の間を出見下せハ是なん假子の其中ゑて辨舌人ゑ勝れしとて富樓那と綽名の仁八ゑして個ハ出立の其折から腹痛ゆゑゑ旅宿ゑ殘り療養なして居たるゑ今甲斐〳〵しく向ふ鉢卷船ゑ搖れて息次あへず來るを見るより政五郎汝ハ跡ゑ殘りたる富樓那の仁八ゑあらざるや然るゑ顔色常ゑ變り病苦ゑ非で心配の見ゆるハ變事の有たりしか早く語れと心中を見拔眼力元締の言葉ゑはつと首を低げ然ハ親分の仰ゑ從ひ旅宿ゑ在て療養せしゑ病氣も頓ゑ癒しかハお跡を暮ふて大津まで來掛る驛の入口ゑ喜八喜兵衛ハ左右ゑ別れ假子の多勢ハ入亂れ今ぞ喧嘩の眞最中これハ日外ハ名代の在勤中ハとお願みありしも今日ハ出立ゑ成しゆゑ夫ゑて日頃の鬱憤を晴さん爲ゑ此始末と思へハ爰時も捨置ず此趣きを親分ゑヤし上んと立場まで至りて聞ハ名代ハ船ゑて草津と言しより其處ゑて雇し遲船ゑ乘込み注進仕つると言つゝ湖水の水を飲み咽喉を潤しゐたりけり政五郎ハ始終を聞能ぞ注進なしたりし飛鳥跡を濁さずと世の譬ゑも言通りハ名代より起りし事も我言葉を聞今日までハ喧嘩をなさで過しゝ物今事ありとて見過されんやとハ言へお供の身を以て自儘ゑ大津へハ歸り難し如何ハせんと取つ置つ思案ゑ暮てゐたりけり

## 第十五章

大津驛ゑ氣轉の仲裁
堀田原ゑ信義の嘆願

彼方も捨置難けれと此方もお供の身なれハとて思案ゑ暮し政五郎の背後よりして腹太卯之助進み出つゝ偖いふやう只今富樓那が言を聞ハ打捨難き今日の大事親分の顔ゑも抱れとお供とあれハ行もならず願ふハ吾儕ゑ富樓那を添へ彼の地へ戻し給はらハ仁八が辯ゑて說伏させ吾儕ハ親分の名代なりと號して和議を取結ハん此議ハ如何と言出せハ政五郎ハ横手を打ち汝のゐるを忘

れたり其考へに大いに能し然べ仁八と同道して彼方を靜め來れよと費用の金を若干渡し事治らべ日に遲るゝとも道中筋を靜やかに後より來よと宣告せべ兩人一〻承知なし卯之助に仁八のゐる逸船に乘移り櫓を立させて元來し大津へ急してこそ行けける始終の容子を廣くもわらぬ船の中にて聞たりける酒井畠山兩個の殿に此騒動を知ざれべ政五郎を近く呼びそも〳〵如何なる仔細ぞと問れて今に包もならず實に斯々箇樣にては名代のふ名を出さずお耳にさへも入ずして濟せ奉らんと思ひしに圖らずお聞に達せしこそ恐れ多き次第にいと事落もなく言上せしに兩侯に顔見合せ實に神妙の計ひにて東西夥多賜りしに政五郎に思ひ掛ず面目をべ施こしけり斯て船に向ふの岸に着べ一同上陸し吾妻路さして下りけり不題腹太卯之助富樓那の仁八に船を逸めて大津へ戻り登れべ未だ入亂れ戰ひ居るにぞ大音揚此騒動を聞しより相政こそ引返したれ鎮り給へと叫ぶぞ偖に相政來しかと一同雲時猶豫ぶぞ仁八卯之助に左右に別れ喜八喜兵衛に打向ひ政五郎にお供にて急に吾妻へ歸りしなれど斯る騒ぎの有んかと思ふが故に我〻兩個を此地に殘し置たるなれべ今名代として仲裁を入奉るゆゑ此事に是限りして此後に水魚の交り頼入と富樓那の辯舌腹太が腹に入こたへし扱ひに彼方の兩個に夫ほどまで思ふて假子を殘せしか實に相政に飛鳥の跡を濁さぬ俠客なりと感して言下に承引したれべ兩個に無上喜びて驛の中なる料理屋へ左右ひとしき大勢を誘引ゆきて馳走をなし愛度柏手を濟せつゝ政五郎の跡を追ひ吾妻路さして下りしが道を急し其爲に僅一日の違ひにて翌日追も附しかべこと如此と述たるに政五郎に兩人の氣轉を頻りに賞しつゝ夜に泊り日に歩行其月下旬やう〳〵と無事に下りて品川宿へ着しに依て酒井とに畠山とのに拔に置て政五郎首假子一同に暇を賜り家隷のみ連て京都の復命をやし上んと其所より直に登城せられたり偖も政五郎が歸府のよしに豫て先使を以て報知たれべ多くの假子仲間のもの各所消防の頭取等人浪打て品川まで出迎ひに來りしかべ政五郎に此人々を同所の料理屋石泉へ請じ入れ饗應いと〳〵厚かりける登時一番組の頭取い組の伊兵衛仝く仁左衛門二番組の頭取ろ組の金藏丑右衛門の四個席を進みて言葉を揃元締が長途の勞を厭で斯る事を言るいいとも無仁のことに似たれど江戸中の火消人足一同の助となる事にしあれべ我々が折入て願ふ事あり爭聞屆け給はるやと又他事もなく言出すに如何なる事か知ざれど人に偖置出一疋でも助る事と聞上に命に掛ても推辭にせじ包ず仔細を語りねと何に變らぬ政五郎が義俠の言葉に四個のものい顔見合して喜ぶ中丑右衛門に膝を進め最有難き和殿の回答甘へてやすい餘の義に非ず今年正月二十日の夜芝神明町より出火せしに節しも暴風砂を飛べせ見る〳〵火事に燃廣がるに火消に次第に繰出す機會い組の人足數十人尾張町まで行し所ろへお使番なる犬塚どの馬を早めて來給ふをりに各自先を爭ひて使番の馬丁といい組の人足と喧嘩をおこし混雜一方ならざるより敵い誰とも知ねどもい組に退な取せそと後より來りし各所の人足大勢寄て其馬丁を散々に打擲なし傷さへ負せて見も返らず何も火事へ行たるが跡にて犬塚太郎左衛門どの馬丁の傷を見て大いに怒り這い町火消一同がやし合せて此の如く亂法を働しならん捨置難しと町奉行へ進達されしに事六づかしく成もて行て近々に頭取一同呼出されん然すれべ御吟味の其中に是非共入牢となるい必定若もや然いふ事になりなべ八千八町の火消い地に落ち今迄磨し男も癈れべ傳を求つ人を擦犬塚どのへ歎き聞へ内濟願へど聞入給はずはや昨今に迫りたれべ元締の歸り來る首を延して待ぬたるに今日の歸京い幸ひなれべ何卒此儀を計らひ給へと丑右衛門の言葉に附て四個等

く頼けり政五郎いつく〳〵聞て什ん又實よ一大事よて棄置難き事あれゞと言つゝ日影仰ぎ見て未だ八ッ前の日も高けれゞ明日とも言ず是より直堀田原なる犬塚どのゝ屋敷へ至りて内濟を入て見んとて立上る勞れも見えざる剛氣の擧動よ四個ん只管頼みける言葉をあとよ政五郎駕籠を吩付打乘て急ぐや道もあのら引く淺草の堀田原犬塚どのゝ邸よ至り今日花洛より歸り來しをりよ計らず聞得し一話箇樣〳〵よしが相手を誰とも知ざるもの事荒立る其時ん多くの人の難儀と成ゞ其馬丁ん吾儕が引取り療治を加へし其上よ生涯養ひ置きますれゞ夫よて内濟下さるやうと事を譯たる歎願よ犬塚ぬしん打點頭汝の如く言るならゞ爭此方で聞ざる可き然を今迄の歎願ん たゞ勘辨と耳なれゞ聞入ざりしが汝のいふこと吾儕が胸よ落入たれゞ此事ん是限とし馬丁喜藏ん其方へ引渡すゆゑ此末とも何分頼の一言よ政五郎ん難有しと已れの駕籠へ喜藏を乘せ箔屋町へ立歸りしよ容子如何と以前の四個來り居つゝ待ゐたれゞ首尾を告るよ喜びけり夫程よ政五郎ん喜藏を介抱なしゝかゞ日ならず傷ん愈たるより本銀を與へ麻布なる市兵衛町へ世帶を持せ團子屋を開かせしよ繁昌あして生涯を樂々と消光しかゞ喜藏ん政五郎の恩を感じをり〳〵參來て安否を問ふ程よしあれゞ犬塚ぬしも町奉行への進達ん取消とこそあしたれゞ双方事あく治りて金藏丑右衛門伊兵衛仁左衛門の四個も初て安心なしたりけり

## 第十六章

朝日湯よ仲間の亂暴
明保乃よ和解の故障

男子の心を秋の空よ擬へつゝも定めあき物としすれど婦女の心もまた浮艸の根を絶て誘ふ水あらゞ往んとする移り心も世よ多く一度迷ひの道よ入ゞ男女賢愚ん無差別なるべし閑語ん休題つ

當時京橋桶町よ石工の棟梁もて人よ知れし三四郎と云る者あり是ん世間の交際も多くずなれゞ頗も賣棟梁株と立らるゝ此頃邊へ移轉し外妾のお榮といへるが姿形ちの美麗きを垣間見しより胸を焦し开も何人の思ひ者よや世よん浦山しき人こそあれと言ぬん言よ彌增る堅き家業も玄翁よ心を碎き夫となく四邊で聞ゞ是ん之れ箔屋町なる相政が外妾と識しかゞ原來政五郎が持物ありしか吾儕ん先ごろ妻よ死別れ後妻欲しと思ふところ斯る美人を妻としなしなゞ男子と生れし幸福ん此上あらじと戀慕の念のいよ〳〵增て政五郎と懇意なるこそ能便ありと親しく妾宅よ立入て人なき折ん夫とあく思ひの丈をほのめかせどお榮ん受し大恩の其政五郎の目を忍び爭不義をゞ働く可きあな蒼蠅と言ゞ得よ岩手の躑躅色變ぬ花香よ男ん ます〳〵 慕ひ政五郎が上京中も朝夕こゝを訪問て女計りん淋しからんが日ならず元締も歸りて來らんなど慰さめて東西を送り深切一方ならざるより初の程ん蒼蠅と思ひしお榮も情よ引され世よ頼母しき人なりと狂ひ染たる意馬心猿その身を過つ事ぞとん後よぞおもひ合されたり于時嘉永五年の文月中旬若年寄鳥居丹後守どの大名小路の役宅へ移轉よ附て其當日同家大部屋の仲間よて麻布谷町の元締萬屋佐兵衛の寄子六人初夜過るころ鍛冶橋外の旭湯となん云る錢湯へ這入て上り歸らんとするをり履て來りける一個の藁草履が見えぬとて番臺よゐる其家の主個吉三郎よ打向ひ代りを出せと詈りしよ此方ん是非なく藁草履を出せゞ是を足よも掛ずたとへ仲間ん してゐるとも若年寄の部屋の者十六文の冷飯草履が溝汚くも穿る物かい我穿來りし履物ん壹分の上の駒下駄の未だ買立の物なれゞ夫をまどふて返して異れと搖り掛しも藁草履の紛失しをゞ僥倖よ酒よなす可き折助根生主個も斯と推せし物から屋敷よ近き此所よて品よく聞ゞ際限なしと思へゞ毫も取合ぬよ渠等ん

大いよ腹を立て代りを出さねばコレ斯と主個を番臺より引下し打擲なせし其上よ小桶を投附火鉢を飛し燈火をさへも消たれば男女込入る大勢の客ハ周章狼敗し男湯風呂よどゝ一の聲さへ絶て真の闇を裸躰のまゝで徐々と遁出す容ハ夜這の參會女湯の流板乳呑子の泣をば逆よ抱かゝへ辷るもあれば躓いて前部もあらわよ駈出すあり其混雑ハひと方ならぬよ六個の仲間ハ思ふがまゝ暴行散して悪口たらゝ〳〵優々として立帰りしよ主個ハ口惜此趣きを翌日町奉行所へ訴へしかば彼の仲間等ハ召捕れ急地入牢となりよけり是よ就て親分なる佐兵衛ハ心も心ならねど假子の悪よ詮方なく其御所刑を待のみと傳へ聞たる二番組のせ組の消火夫頭取ハ多くの人を驚かせしとて丈の知たる藁草履一足よりして六個を罪よ落すも便なき業あり個ハ仲裁を入るよ如ずと京橋中橋十八ヶ町の火消人足ハ政五郎の方よ至りて仔細を述べ只管頼み聞えしよぞ元より人を助る事とし言ば辭せざる政五郎一議も非ず承引なし旭湯の主個吉三郎へ示談を入しよ外あらぬ箱屋町の元締がお扱ひの事なりせば此方よ異存ハ之なしと先片方ハ濟たれば町奉行へハ吟味願の願下をば直よ出し六個の仲間をも引取來て親分佐兵衛を首としせ組の頭取人足とう湯屋をも連行き同月の二十七日鍛冶橋外なる明保乃といへる水茶屋よて双方愛度仲直りを濟せて退散なしたるあと政五郎ハ四五人の假子と共よ勘定など濟して出んとする折から中橋富槇町よ住居して見附番所の請負を營業とあす小理屈者小谷屋藤次兵衛が入來りそも〳〵今度の仲裁ハ京橋中橋十八ヶ町の依頼を受て相政が爲しといふが此吾も十八ヶ町の内なれど和主よ頼し覺えハあければ十八ヶ町といふなりせば何故一應ハ渡つて來ぬ夫でも汝ハ男なるか又元締と言るゝかと横よ車を押出す日頃の氣性仲裁の故障の言葉店頭へ腰を打掛高聲よ我鳴立るぞ疎ましけれ登時政五郎ハ其所へ出和主の言葉ハ理りある事よハ似たれど十八ヶ町の殘らずの人より頼れて此仲裁をなしよ非ず是ハせ組の頭取人足十八ヶ町の火消より頼れてせし事なれば和主ハ所謂營業違ひ此事よ附き關係ハ絶て非る人ならずやと言せもあへず威丈高たとへ營業ハ違ふよもせよ人よ知れた藤次兵衛土地の事をば耳よも入ず他人よ濟され指を加へ逡巡して居らる可きかと又蔓み附く言葉の綾政五郎も氣色を變へ然程よ理屈が有なりせば何故最初より云出ぬぞ今仲直りも濟たるよ兎や角いふハ故障人かと言ば藤次兵衛撲地と怒り無禮なり政五郎他人の喧嘩よ故障をいふ藤次兵衛と思ひゐるか然いふ腮ひ引裂くれんと拳を揚て打て掛るよ最前よりして片唾を呑み扣へ居たる假子のもの最早堪忍成り難しと云より早く一同よ哄と喚て立掛り散々よ打据しよ藤次兵衛ハ恐れ怖き初の氣色何處へやら猫よ追れし鼠の如く天窓を抱て逃げ帰りぬ假子の者ハ之を見て口はどよもなき白痴かなと皆拍手わらひしが政五郎ハ益なき事なし渠が遺恨を含やせんと思へど今ハ詮方なければ皆引連て帰りたりしか果せるかな藤次兵衛ハ此事をしも深く怒り帰るど其がまゝ江戸中よ散在なしゐる我假子二百餘人を呼集め如此の事なれば是より直よ箔屋町なる相政の宅へ押寄雌雄を決して今日の遺恨を晴さんとこそ思ひつれば偖こそ汝等を呼寄たれ仕度をせよと夕間暮假子も聞より南瞞をおし仰一々理りなりイデ我々が魁して相政一家を微塵よせんと喧嘩と聞ば向ふ見ず向ふ鉢巻手拭も豆絞りなる玉の汗拭ひもあへず刀脇差さすが是等よ馴しとて出刀庖丁も時の用と各自身輕よ打扮て假父が指揮を待ち夫と言ば撃て出んと意氣揚々と固しよぞ藤次兵衛ハ見やりて喜び先前祝の酒事せんと酒肴を出して振舞けり

# 第十七章　遠毛街より切迫の春情　奈加橋より花美の拍手

實よや禍亂ゝ下より起ると世の俚諺も宜なるかな仲間どもが藁草履一足よりして事起り小谷屋藤次兵衛ゝ二百人の假子を引連政五郎を襲はんといふ事よぞ成しよ此由逸くも箔屋町へ聞えたるより政五郎も用心せでゝ就じと假子を呼集得物を集め防禦をさをさ油斷なきよぞ斯と聞よりせ組の人々畢竟我々が賴しより此騷動の起りしなれば今相政の味方を爲れば誰かゝ之を男子と言ん要こそあれと申し合せ忍び〳〵よ隊を組箔屋町へ趣きて政五郎よ會しうへ什が近邊なる新右衛門町、榊正町、大鋸町、材木町ゝ言も更なり箔屋町の周圍へゝ彼所此所と十人二十人手分をなして巷路よ待ち又相模屋の周圍より家根の上よゝ假子のもの遠見をおしゐる結搆よて何れの道より來るとも敷居を踏せず討て取んと待搆へたる其人數ゝ五百餘人よ至りしと言より小谷屋ゝ聞怖し其夜ゝ空しく明しよ夜明て後ゝと勢を退ど夜よ入ばまた斯の如く隊伍を組ゆゑ日本橋と京橋の間ゝ何となく殺氣を含む空の色星もまばらよ雨雲の覆ふて晴ぬ恨みの念物騷がしき光景なれば什が邀なる家々ゝ火氣の有らざる火事よ會ふ心地せられて心さへ心ならざる計りなり思ひゝ全し桶町なるお榮ゝ此度の大變こそ互ひよ爭ふ生死の海より荒き達衆の意地安否のほどを聞ま欲と思へど任せぬ本宅ゝ陣中よしも等くして妹脊の中も水盃と聞悲さよ胸をのみ痛む

る鬱を晴さんと獨り火鉢の小鍋立玉子も破てゝ又元の丸く成ざる前つ祥と考へ居れば出來過し酣銅鉢より德利を出す指先嗟嘆熱しと耳で冷してグイ呑め猪口へつぐさへ力なく頻りよ傾けゐるてろゝ夏の夜風もいと涼しく初夜をも過し折からよ這入來りし三四郎姉公ゝ嘸かし心配なるべし昨宵よりして彼騷動明日ゝ一同入牢の咎めと知てゐるのよ意地を張り未だよ引も揚ざゝゐゝ困つた物と投首の容子あり氣な話し振をお榮ゝ夫と聞咎めスリヤ此度の一條よて翌日ゝ一同入牢とゝと膝すり寄て聞掛るゝ計りし坪と三四郎心よ笑ども色よも出さず然ば聞しやれ此事ゝ言まひとゝ思つたれど明日相政が召捕れ八丈島か三宅島へやられし後よ和女の泣を見るのが如何も不便よあなれば大事な事を打明て噺すといふも外ならず和女の旦那政五郎ゝ近頃勢ひ强きまゝ武家へ對して無禮お學動しば〳〵有上此度ゝ世をも人をも憚らで戰爭の如き光景をなすてそ上を怖れざる事なればとて奉行所よてゝ召捕て遠嶋と御評議已よ決せしゆゑ今日で二日二夜よなれども誰とて是が仲裁よ這入者さへ非るが何より證據と言可きなれと辨舌巧よ跳惑ゝす嘘も眞とお榮ゝ聞女心の淺慮よも胸まづ潰れて暫しがうち言葉もなくて居たりしがやう〳〵よして彼方よ向ひ如何がなゝして旦那を初め双方事なく治る可き詮方ゝあらざる物なるか希ふゝ敎へ給へかしと再度聞ば三四郎开ゝ今更よ詮術なけれど吾儕ゝ町奉行よ毫計りの內緣あれば嘆き聞え彼方を暫時延しおき其中此方ゝせ組へ噺し仲裁を入れ和解させなば涙風立ず科人も出ずよ事なく治る可しと口から出任せ深切めかし言ばお榮ゝ手を合せ設し此通りでゆかし和君よ夫程の傳わらば旦那を首多くの人を救ひ給へと賴こそいよ〳〵得たりと彼方よ向ひ相政はじめ其他の者よ義理ゝなけれど和女のため急度吾儕が計はんが夫も其所よ魚心あれば此方よ水心日外よりしてほのめかし是ま迄で實を盡せし上の事よしあれば色よい返辞をなしなば明日ゝどうともせんと手をさし延て引寄る戀慕よお榮ゝ驚きしが今迄盡せし深切よほだされゐたる其上よ旦那の命一家の浮沈よ拘る大事ゝ戀路の切迫推辞遠嶋從へば多くの人の助る大事操を破も旦那のお爲と

白刃抜き下る外
妾事實
戎述る

政五郎

お元

早くも思案定めてゝ悪びれもせず寄添て花香も失し吾儕をゞ夫ほどまでゝ思ひ込み言るゝ和君ゝ悖らんや必ず騙し給ひぞと秋波ゝ見て身ゝ斜髪のはつれ毛二三本かゝるや顔も上氣して酒ゆゑ見勝る櫻色三四郎ゝ魂魄さへ身体ゝ添ず胸乱ろき夫でゝ和女ゝ承知してエヽモウ言て下さる女年ゝすれども改まると耻しさよと計りゝて浴衣の袖ゝ覆ふ顔其手を取て蚊帳のうち寐莚も濡る夏の雨汗ゝ浸せる小夜具累ね染たる小夜衣如何ゝある夢や結ぶらん後ゝ話しも絶ゝけり斯て其曉の朝三四郎ゝ黎明ゝ茲を立出歸りつゝ容子を聞ゞ奉行所より餘りと言ゞ騒敷ゆゑ仲裁ゝして鎮めよと火消人足の頭取へ内沙汰の有しゝ依り一同恐み其由を双方へ通せしかゞ爭違背の有可きぞ政五郎藤次兵衛ゝ承知したれゞいよいよ明日中橋廣小路の往還ゝて仲直りとてそ決りたれと容子落あく聞えしかゞ三四郎ゝ打悦び直ゝ桶町なるお榮の許へ至りていふやう今日町奉行ゝ嘆き聞え斯々までゝなし來たれど表向ゝ我ゝあらねゞ其心して居給へと眞言虚言打混て働き振ゝ嘶せしかゞお榮ゝ無上喜びて其夜も枕を並べけり斯て翌八月一日政五郎方ゝ中橋の水茶屋塞菊へ出藤次兵衛方ゝ同く小川へ出仲裁一同ゝ左右を周旋す此時双方ゝよび仲裁の人々ゝて六百人ゝ餘りしかゞさしもの廣小路も錐を立る隙も有らず見物人ゝいやが上ゝ押累りて動揺めき渡れゞ一時ゝ往來も止まりていと目覺しき光景なりしと去程ゝ外妾お榮ゝ石工の三四郎と道ならぬ戀せしかども今度の大變事なく和解ゝ成たるゝ全く密夫の働きと思へゞ心憎からず嘘より出し眞ゝて爾後しゞ〳〵政五郎の眼を偷み家へ引入れ不義を樂みゐたりけるが元より總き政五郎疾くもお榮が素振ゝ目を附け探れゞ此頃密夫ありと聞より已れ犬自物いかで只やゝ置可きぞと頃りゝ嗅ひゐるとも知ず夜も長月の下旬例の如く三四郎を引入つゝも枕を並べ臥ゐる所ろへ政五郎豫て斯ぞと裏口の戸を蹴放して跳り入り腰なる一刀閃りと拔き振下したる白刃の下密夫ゝ岸破と反起て側の小窓を打破り雲を霞と遁行ゝ是ゝ殘念と思へども目差ゝ已れと政五郎お榮を目掛眞向ゝかざす白刃ゝ驚きながら飛逃巡て聲ふり立其お怒りゝ然事ながら是ゝ仔細ある事なれゞ先靈時と止めけり

## 第十八章

外妾宅ゝ奸淫の婚姻　浦賀沖ゝ黒船の渡來

時登政五郎いよ〳〵激し此期ゝ及びて辯解あらんや白刃ゝを受よと追廻すゝお榮ゝ猶も言葉せわしく道ゝ外れし行ひを爲しも詰る其所ゝ和君のお爲と吾儕ゝ不義夫ゆゑ小谷屋の喧嘩さへ無事ゝ濟たる譯なれゞ命ゝ助け給へかしと聲ふり絞る不審の言葉政五郎ゝ白刃をゞ席薦ゝ突立倍と見て不審き今の一言三四郎と奸通せしより小谷屋の一事和解とゝ心得難き言葉のはし〳〵包ず語れと責問ゝお榮ゝいとも面伏ながら箇樣〳〵の事よりして和君の牢舍を救はんためッイ下紐の解染て斯る次第ゝ成り似たりと一伍一什を述たるゝ政五郎ゝ聞て且呆れ且ゝ怒りて什も彼一事ゝ三四郎盟が知事ならず其故ゝ如此ありと顚末委敷說示しゝゝお榮ゝ原來計られしかと思へど濡ぬ先なりせゞ露をも厭へど今更ゝと密夫を懷ふ念の止ぬゝ淺猿くもまた瀏情けれ政五郎ゝ立登り汝のいへるが眞なりせゞ許し難きゝ三四郎なり然ゝあれども汝もまた其身の科を免れんと斯る事を作り出し言るやも計られねゞ渠奴を引捕へ連來り理非曲直を分ちてやらんと言を戸外ゝ聲ありてイヤ相政ぬし待れよかし其事共ゝ吾儕が行て和主ゝ說可しと聲掛つゝも三四郎をあとゝ從へ入來るゝ之れ即ち別人ならず同町ゝ住居するせ組の頭取岩次郎あれゞ政五郎ゝ

白刃を治め先此方へと招するよ岩次郎ハ免し給へと會釋をしつゝ坐よ附て夜中の來訪余の義よあらねど先の程此三四郎が吾儕の門を打たゝき箇樣〳〵の故ありて已よ命も危き所ろやう〳〵遁延來りしなれバ何卒元締よ詫をしてと嘆かるゝよハ捨も置れず事の顛末聞糺し連て來りて門口よて容子を聞バお榮どのゝ言よ毫も違はぬ嘶し然を和主が疑ふて三四郎をバ捕へんとするより入も來りしが三四郎ハ已よ後悔しお榮どのハ嘘よもせよ和主の爲よ如此と言る上よも兩個よ代り吾儕が詫をするなれバ許し難たき所ろよあなれど茲ハ吾儕の顔を立て許し給へと計りよて品よく挨拶したりしかバ當て碎くる政五郎言下よ悟つて打點頭仲裁一々心得たり元此お榮の色香よ迷ひ妾となしたる者ならねバ捨るも決して厭しからず然を三四郎と不義を働き以前の恩を忘却せしかバ殺さんとまでハ思ひしかど初ハ三四郎よ計れて吾儕の爲と枕を交し又三四郎も今更よ計りし廉を後悔なし且い和主の仲裁なれバ罪を許せしそが上よ未だ幸よ三四郎ハ後妻も持されバ今政五郎が媒酌してお榮を渠が妻よやらん此議ハ如何と義よ強き言葉よ岩次郎感嘆なし實よ大郷會の其中よ兩個と有ざる俠客と世間で評すよ露違ハぬ政五郎主が今宵の計ひ吾儕も面を起す喜び此上ハひハず兩個の衆ハ如何ぞやと問バお榮と三四郎ハ有難涙よ暮るのみ同辞もあさず平伏ける政五郎ハつと立て次の間より誂子盃膳持出て中よ置月下氷人ハ此政五郎待女郎ハ岩次ぬしイザや婚禮あさせんと信義を厚き三々九度辞すゝも成ず受るさへ憂や丑三つ過行て七つを告る鐘の音鷄鳥の聲東天紅明ゆく空と身の科も晴て嬉しき二世の緣三四郎お榮も飲了れバ岩次郎ハ兩個を連れ禮も口へハ出ぬ程の情を擔ひ歸るとバ忌言葉なるお開きよ開いて彼方へ送り行ぬ斯て政五郎ハ夜明しのちお榮の母を呼寄て昨宵の始末を述聞しお榮よ暇を取せしかども

今迄世話もさせたる事ゆゑ此妾宅の家財一式これハ其方よ取すれバ心の儘よ爲給ひねと罪を憎んで其人を憎まぬ俠氣政五郎言捨しまゝ飄然と箔屋町へ立歸りしよ母ハ夢見し心地せられて累々の大恩よ蔭見ゆる迄手を合せ送る外よハ術もなく夫を呼て如此と告るよ之も恐れ多し思ふ計か三四郎夫婦の者ハ再生の恩に感じて夫より後ハ假子の如く爲たりけるとゞ明れバ嘉永六年の六月二日朝霧深く立込し相模國浦賀の沖へ描しものより外よハ見ざりし黑船四艘入來りぬ是なん亞墨利加合衆國の使節ペルリ其他が乘組し彼國の軍艦よして是ハ通信貿易を開かんためよ國書を齎しはるゝ〳〵日本へ渡航せしなり然れども我國の人々ハ未だ見も知ぬ異國の風俗船の体裁異樣なれば上下頻よ驚き怖れ更よ爲す所を知ざるものから又止事を得ざるより時の將軍十二代家慶公來意を訪ね國書を披閲し其旨花洛へ奏問を遂る迄とて亞人を殘らず品川より上陸せしめ高輪東禪寺麻布善福寺高輪正泉寺聖坂西海寺等へ分附して旅宿を取するうち衆口喋々穩かならねバ警衛の役人ハ置るゝものから夫等の用意其外よも日々の御川の少からねバと町奉行池田播磨守どのハ政五郎を召出し旅館の用事を達せしうへ諸事拔目おく計へと親くも仰せありしよ政五郎ハ畏まりぬと假子の中よて屈竟おる者のみ撰びて四ヶ寺を守らせ其身ハ時々よ見廻りつゝ又政五郎の手代よして才子と聞え高かりし新慶助よ內意を傳へ諸事油斷なく勤しかバ其年五月亞墨利加の使節ハ復書を求しかど未だ其儀よ至らねバ开ハ明年の事よぞせんと一同日本を引拂ひ浦賀の沖よ蒸瀨船の煙を殘し本國へ立歸るまで外人よ對して毫も過失の有ざりしてそ政五郎が働きなりとて播磨どのハ大いよ是を賞せられ白銀五枚給りしハ實よ浦山しき譽れなりけり不顯當時武州小金井村よ小金井小二郎といへる博徒の親分あり多くの假子を從へて勢ひおさ〳〵

遠近より震ひ其名ハ四方より聞えたりしが累る悪事忽捕縛せられ久しく入牢なしたる上安政三年三月二十一日伊豆國三宅島へ流罪とてそハ事極り他の囚徒二十餘人とともより遠嶋船へ打乗ていよ〳〵送り遣るゝと聞より小二郎が母と女房其悲嘆ハやる方なく小金井を出はる〳〵と淺草奥山より住居する爲の者の頭取よて小二郎の義兄新門辰五郎が許より來り汐路遙の涙のうへ何またお赦より成可きやハ其程さへも計ハれぬ息子と夫より會してと嘆き聞ゆる親身の情辰五郎も實の弟の如くより思へる小二郎が事よしあれば母親と妻の悲嘆より我袖も濕らすの外あらざりけり

## 第十九章　淺草郷より義兄の深情　佃島沖より島守の愛別

去程より新門辰五郎ハ小金井小二郎が母と妻を家より止めて小二郎より一目會せんと手を廻し其筋の役人達へ多く賄賂を送りしかゞ船より組乗佃沖を距るゝ折より窃ひ盡ぬ餘波を惜めよかしと内々よて沙汰ありしかゞ辰五郎ハ打喜び母と妻とより如此と言聞たりしより兩個ハ死たる夫と息子と見ゆる心地し愛時がうち悦び泪より暮ゐたりぬ斯て此小二郎が遠島の事の由ハ隠れもなく聞えしかゞ當時江戸より達衆と呼るゝ鐵砲州の角島傳藏同所の州賀屋金左衛門大川端の小島屋和吉同く太郎吉品川の淡波安新宿の八幡屋中橋の名倉勝助石安鍛冶橋外錦着屋榮吉魚がしの佃屋三吉相撲屋政五郎等の顔役ハ送り行んと便を聞より新門の辰五郎ハ小二郎の母女房と同船し佃沖よて會するよし話の有しより一同ハ是傍倖と新門方へ同船の事を言入れゞ辰五郎ハ打喜び當日一同を我船へ誘ひ入れ佃の沖へ漕出すをり單り政五郎ハ辨徳の上等辨當を多く誂へ鹽十俵醤油五樽米十俵を持參なし一同と共より沖合よて待間はどなく小二郎ハ他の囚徒二十餘人と共より遠島船より打乗られ役人所屠頓て問近く來るを見るより一同が首を下れゞ役人ハ心得果て船を止め嗤もて夫と知すれば辰五郎ハ船を漕寄せ乗移て小二郎を我船へ誘ひ入るより小二郎ハ首を廻らし四邊を見れゞ思ひきや義兄ある新門辰五郎を首として江戸の顔役並居る計りか母さへ妻さへ居たるより原來此人々ハ我身を見送る耳ならず役人衆より賭賂して母と妻とより合してくるゝかと思へゞ最も有難き物から今ハ淺猿しき此姿よて見るも面目なしと思ひけり登時母と女房ハ牢舎の寵れ日の目も見ず變り果たる小二郎が姿より胸まづ塞りて左右等くお仕着の着物の袖より取縋りよゝと計りより泣沈むを小二郎ハ見返りて母公女房此世でハ會れぬ事と思ひしより今島守と成行をり計らず會しも大哥立が大方情より有なるべし然ハあれども幼稚より博奕を好み家出して已れが儘より横行せし科も月日も積る年退引ならぬ罪狀が累りて來て七ケ條何れも死刑より當る可き事よしあれゞ召捕れし其日よりして身ハなき者と覺悟をなして刑場の露と消ゆく此命後世こそ大事と朝題目夕念佛さへ聲枯て死を谷しより政府のお慈悲で死刑を免され遠島とハ世より有難き僥倖なれゞ是より嶋より越てハ一念發起し御用を勤め草木と共より終るのが是せめてもの罪亡し母公ハ斯る悪き子を持しより依て老の悲嘆不孝な奴と思し召息子ある思ひ給ハで世を安らがより送つて給はれ又女房ハ生死とも當よならざる小二郎を待つゝ可惜盛りの花を埋木とする心を發さず吾儕ハ最早世より無き人と思ふて相應なる縁談あらば再縁なして本夫より仕へよとさすが達衆の屹然と口より言ふは言ど是ぞこの親子夫婦が一世の別れ二世の縁も切果る時と思へばはら〳〵〳〵落る泪ハうたかたの哀れ放果なき身の上やと一同もまた貫ひ泣き袖より涙うつ計りなり母ハ泪を急上〳〵這ハ無盡なり息子小二郎凡そ生とし生るもの燒野の雉子夜の鶴子を思ハざる親ハおく況てや悪い子程な

は可愛いといふ世の譬それよ和主ハ博奕を打ど常よ孝心深くして幼稚をりよ父君よ別し後ハ脊丈も此母が延して一層老の樂みまだ其上よ義よ強く貧者を惠み弱きを助け幾千の善を施て盜賊もせざれど此科ハ制規を犯せし身の因果然ゞ幾年ふる鄕へ又歸り來ん日もあらん何故よ夫まで壯健よゐて給はれかしとハ言もせず息子あるなと思へとハ子として母を捨るかと恨みの言葉も恩愛よ引るゝ悲嘆慈母の情妻も泪よ暮ながら貞女兩夫よ見ずとハ誰も知たる事よして嫁入すれゞ善かれ惡しかれ本夫と共よ生涯を送るが女の役目よて和君の母公ハ吾儕の母公お留守の中ハ殘更よ御介抱を申し上兩個で致す孝行を吾儕一個で及ばずながら致してお赦よ成日をゞ指をり筭へて待ものを緣もあらゞ他所外へ嫁入せよとハ難面仰せ吾儕も小金井小二郎が妻と言るゝ身を以て本夫の流罪を余所よなし一個の母公を振捨て又の本夫を持やうな者とし思ひぬ給ふか年月連添ふ女房よ何故母公をゞ介抱してと一言いふてハ下さらぬ恨めしさよと計りよて數へ立たる嗟嘆左右等く口說立つ具情ハ千尋の海よりも深き思ひよ小二郎ハ是ほど迄よ盡したる母と妻とよ歎をゞ掛るも此身の過失よりと思ひ廻せゞ渚もよき海も騷立胸のうち濱の松風嵐々と嵐よ會る如くなり三個の愁歎思ひやる役人はじめ囚徒ハ更なり見送りよ來し人々も愁然として言葉もなく中よも新門辰五郎ハ手を交きての男泣き果しなけれゞ政五郎涙を拂ふて其座へ出小二郎どのが今如此と言しハ生中優き言葉を掛て思ひを增せしとの事よしわれば必ずしも恨み給ハでお赦よなる其日を待て居給へと母と妻とを說慰めまた小二郎よハ今日の面會ハ新門ぬしの情よ因る由委敷述て齎せし米、鹽、醬油の三品をゞ出して之よ送しかゞ小二郎首め囚徒ハみな政五郎よ恩を謝すを中半も聞ず之もまた豫て用意の辨當を大凡船よ居合すもの一同へ振舞つ酒さへ飲せて海上を安全とこそハ祈たる殘る方なき計らひよ役人楫子よ至るまで實よ相政ハ得難き人と一同感嘆したりけり兎角するうち春の日ながら入相近く日の脚もお濱の杜へ遠近の時へ歸る群鳥增上寺の鐘更々と海へ響ば役人がイザと計りよ急立るよ離れ難き女房と母を引分小二郎を本なる船よ乘移らすれゞ繰る櫓楫漕出す船と船との愛別れ無事で壯健でもうるみ聲餘波皿の沖越つ緣築地を横よ見て走る海面眞帆片帆次第〳〵よ遠離る八重の汐路の舷よ諸手を掛て延上り見送る母と女房ハ彼往昔の松浦潟領巾麾山の故事も今ぞ身よ知悲さの思ひハ同じ小二郎も見返り〳〵行船ハ風よ追れて急地よ蔭さへ見えず成しかゞ兩婦ハッッと聲立て前後不覺よ泣沈みぬ

## 第二十章　富士山よ外人の先達　狼若町よ喧嘩の返報

偖而新門辰五郎相摸屋政五郎を初め其他の達衆ハ泣沈む小金井小二郎が母と妻とを種々よ介抱し其場ハ一先引取せ後ハ辰五郎が後身をなし古鄕へ戻し世を安らかよ送りゐたるが十餘年の星霜を經て小二郎ハ大赦よ會て恙なく小金井へ歸しかゞ母子夫婦ハ再度また愛度對面したりしとぞ却說万國の交際日を追て開け外人もまた我國よ居留なす事とぞ成しよ亞米利加人コンシュールハ高輪東禪寺よ旅宿しをりて日本の名所古跡を其所此所と見歩行うち豫て話說よ聞ゐたる駿河國の富士山ハ三國一の名山なりとて日本人ハ誇る由なれゞ登りて一見なさんといふを日本の人民ハ傳へ聞彼富士山ハ頂上よ木花開那姫命鎭り座まし神代よりの靈山よして富士講と唱ふる講中あまて講を結び錢を集め千里をも遠しとせず此山よ參詣すそれ富士山ハ無双の高山なれゞ常よ白雪堆かく皚々として寒氣烈しく然ゞ平常ハ人の登るを禁じ又登る事も成難けれゞたゞ

毎年酷暑の頃のみ白雪跡を絶ゑ依り六月一日を山開きと号し夫々七月晦日まで丶衆庶の登るを許しけるが夫すら聊にても身ゑ汚を帶たる者の登る時丶急地ゑ罰を蒙る丶古へより明瞭なるゑ今得も知ぬ國人が畜生の毛を織込し羅紗とやらん云る衣服を着しまた畜生の皮ゑて造りたる靴とやらん云る物を履き六根不清淨の身体のまゝ彼靈山ゑ登りあゞ急地神罰身ゑ及ゞん沒し然もなくゞ神國の神威も茲ゑ衰へしか止なんと計ゑまた當時丶未開の民の多くあなれゞ理ゑ暗き事のみ喃々吻くい片腹痛ぞ思丶れける去程ゑ此コンシュールが滯在中横濱ゑ港を開き茲ゑ居留地を置通商貿易を許されしかゞ彼所丶日々ゑ繁昌なし吉原といへる遊廓も出來し程なれゞコンシュールゝ横濱へ移るをりも諸事政五郎が用をゞ足ぬ斯て夫が旅寓の用達を命せられ外人名所古跡を見物するゑ就き乘馬を買入たしと言るより多くの假子を從へて其所此所周旋なし〻上馬丁ゑでも差入しゑ大ゑ外人の氣ゑ就ば今度富士山を一見せんゑも政五郎を引連たしと其筋へ申し出しゑ其筋ゑても好と稱て警衛の役人の其外ゑ政五郎を連る事と成しかゞ政五郎丶未開の民が常ゑ外人を夷狄視して益なき事を言出すを可笑思へゞ此時こそ萬國變らぬ人類の開化の程を知せんと言受なして我假子仁八卯之助を首として屈竟なるもの四十餘人引連てこそ罷り出ぬ恁而亞人コンシュールゝ知己の英人一名ゑ我從者五六名警衛の役人十餘名政五郎の一行を前後ゑ從へ安政六年六月十四日此地を打立富士山へ登る道中道々丶燒が如の炎暑なりしが彼山の中央なる五合目まで登りし頃より寒氣次第ゑ憎つ〻も且追々と嶮しけれゞ馬術ゑ秋し外國人も警衛の武士も馬足の立ねゞ困じ果しが政五郎と其假子等丶毫も勞れず掛盤掛て茲迄も徒士跣足ゑで馬の口を取つ〻登り來りしが是より一同を馬より下し又もや先ゑ打立て首尾よく頂上まで登り果四方の景色を眺望しのち立歸りたる血氣の樣ゑ人の耳目を驚かせり斯て後外國人丶一度本國へ歸るゑより政五郎が入置し馬丁ゑも暇を出す事となり夫ゑ連て他の外人ゑも歸國するもの少からず故ゑ今迄建置し人入の廐會所を引拂ふゑ附き政五郎丶假子の者が遊廓へ入傚りて借をこしらへ其まゝゑ那處へか行しと言れて丶我恥としも成事なれゞと吉原町の入口へ「此度外國人大廐御濟用の人數引上歸府致し候間賣掛又丶貸金等有之向丶今日より三日の内ゑ申し出可有之右丶吾儕より相拂申す可く候相政」と大板へ筆太ゑ筆記し大門口へ立たりしが平常の敎よろしき故ゑや假子の中ゑ然もの〻一個も非りしか三日待ども誰ひとり取ゑ來る者さへなけれゞ政五郎丶横濱を引拂ひ川崎驛ゑ一泊し其夜丶驛中の飯盛女の惣揚をなし花々しく愉快を盡し江戸へこそ立歸りぬ此年より四年の後文久二年の六月中旬淺艸猿若町三丁目なる劇場市村座の興行中同所奥山なる新門辰五郎が假子三個泥の如くゑ醉來りて錢さへ拂丶ず無法ゑも木戸ゑり進み入んとするゑ木戸番丶暫しと支へ茶屋丶何處より見物するやと言ゞ三個目を怒らし茶屋が有ふが有まじが新門の假子の者が劇場を見るゑ錢を拂ひ這入といへる理りあらんやと言ゑ此方も勃然となり警へ新門の假子ゑもせよ大金掛たる此劇場を無代やゝ見せんと拒むも旨ず見せじと言ゞ斯して見ると又もや木戸へ手を掛て進み入んとなしたるゑゞ然丶させじとて爭ひゐるうち急地一條の喧嘩となりしが新門の假子どもゝ僅三個のその上ゑ泥の如くゑ醉たれゞ木戸番の大勢ゑゝいかで敵する事を得ん散々ゑ打擲されはふ〳〵の体ゑて還歸り辰五郎ゑゝ我非を隱し新門の假子なれゞと温順くいひ一幕の見物を頼しゑ彼等丶聞入ざる耳ならず無法ゑも大勢ゑて如此ゑ打擲せしと喞言がましく訴ふるゑ辰五郎丶眞と思ひ警へ無錢で至れゞとて新門の假

子と言へ二個三個よ劇場を見するも差支い有ざるものを然とい譯らぬ奴なりしと言しを聞より假子のもの俄よ勢ひ附來りて彼容子なれば親分も市村座の所業を憎めば我々が行き返報をするとも絶て怪有しからずと一個が言へ二個三個外なる假子も誘引合せ人數い凡そ四五十人よりくよ相談なし明日い眞午過るころ市村座へ押寄て此恨みをば晴さんと其夜い忍びくよゞ是が仕度を爲つゝも翌日い一個二個と家を脱出淺草寺の本堂前なる額堂よみな悉く集合なす程もあらせず什が邊なる辨天山よて撞出す正午の鐘よいざと計り隱し持たる手鳶をば各自携へ揉みよ揉で猿若町へと押行ける市村座よてい斯とも知ず何の如く興行なし殊よ此度い大入とて老若男女袖を列ね景氣もいとゞよき所ろ外の方俄よ騒しく此方を差て押寄來る多勢よ木戸番い何事やらんと見やれば昨日打据し新門の假子三個眞先よ立ち進み來るよ偖いと計り今更よ仰天なして顔見合せ言葉も出ざる此場い如何未だ長やかよて丁數よ限われば次章よ說可し

## 第廿一章

觀劇場よ修羅の体裁　今戸町よ親子の密談

却說新門の假子四五十人い昨日の返報をなさんものと文久二年の六月十五日燒が如きの炎暑を犯し辨天山の亭午の鐘を合圖となして得物を携へ淺草猿若町ある市村座の劇場へ押寄今や興行半よして大入の有る木戸口より昨日の遺恨覺えしかと銘々口よ詈りあへず先木戸番を引下し打擲なして木戸を毀し黨波を作つて亂れ入り携へ來りし手鳶を以て當るよ任せて出方の者を打すあるながら兩花道より舞臺へ押ゆき大道具小道具までも亂花微塵傍若無人の擧動よ狂言中なる俳優い元より二階三階惣座中驚き騒ぎて百日髷よ朱鞘の大小いかめしき形よい似ず倒つ轉つ脱出したる敵役の先を潛つて甲斐〳〵しく踞引まくり飛でゆく娘形さへ又ありつ其外姫君子役の狼狽また見物い不意の騒動嗟嘆と計り騒げども彌が上よも入詰し开も大入の事といひ已よ舞臺へ亂入なす程よて有へ度を失ひ僅よ道を需し者い先を爭ひ土間なるい間淵木よ足を取れつゝ倒れて他人よ蹄躙られまた棧敷なる見物い階段を下んと悶着なし落て己れと傷を需る老幼婦女の泣聲い哀れよも且つ悲くして今迄無上の歡樂鄕と思ひたりしも急地よ變りて修羅の巷となる實よ怖しき景況なり斯て外の方ある茶屋〳〵い脱出る客を家々へ誘ひ入て大戸を閉ぢ鎭まり反りて只管よ慄へ登りてゐたりける新門の假子等い思ふが儘よ劇場を打毀し心地能とて人數を纏め凱歌三唱上つゝも優々として引退く是れ須更の間の事よしあれば市村座を首として茶屋出方さへ氣も魂ひも身よ添ざれば何處へ向け訴へ出なん心も注ず生たる心地もあらざりしが漸々よして亂妨人い引揚行しよホッと息吐き茶屋いやう〳〵客を返し俳優い各自已が家よ返りたるあと座元を首め檜代の万吉など座中よ入て打見やれば檜い更なり木戸舞臺道具も夥多毀しありて出方よも又怪俄人あれば容易ならざる擧動なりと直其筋へ訴へ出しよお手の廻りて新門の仮子い毀しよ行しもの半い急地召捕れしよ殘りの者等い怖れをなし姿を隱して欠落なしけり此騒動を新門の辰五郎い露知ずあとよて斯と聞よりも假子が粗暴の擧動を怒りゐる間よ其半い召捕よ成しかば辰五郎い只管よ嘆息のほかあかりけり此事疾くも江戸中へ聞えて噂高くなりしよ方々い名よ負ふ新門辰五郎その假子が乱妨せしより政府の手を假用所刑をば受させしとて傷人が治るといふ可き譯よもあらず又毀されし其所が自然と繕ひ整ふとも成ことあらず返つて是より遺恨を含可きはしとも成へ芝居の爲よ悪かりなんと江戸中の達衆と言るゝ顔役中魚河岸、新場、江戸橋

四日市、日本橋、五ヶ町、小網町、小舟町、南北新堀、新川、大川端、築地、鐵砲洲、佃島、芝浦、金杉浦、高輪、車町、東西兩國、柳橋船持、大代地、淺草、小揚組屋敷、聖天町、山之宿、田原町、馬道等より名ある人々が仲より入り頻より市村座を説勸め和解の事を計ひしが樓代の万吉ゝ斯の如くより打毀されあと興行も成り難き程よてあるを如何樣より此方の顔をゝ立なさる思し召かゝ存じませねど金銀づくや顔づくよて決して此度の一件ゝ承引致し兼まするとゝ如何説悟せと聞ざるより一同ゝたゞ顔見合せ退よも退れず呆れはて手を束ねてぞゐたりけり茲より此座の座頭俳優坂東彦三郎ゝ此事を聞き大いより憂ひ芝居ゝ素より大方の愛顧を仰ぐ物なれゞ今江戸中の顔役が仲裁より入り和るを聞ずゞ夫等の人より憎れ行々害を殘す可し然いあれども万吉の强情なるを如何せん誰か之をゞ説伏る者こそなきやと我胸の思案より餘れゞ新道の住居を出て今戸なる父の坂東龜藏の許より到りて我かもふ由を祥細より述たるより龜藏ゝ横手を打せがれ能こそ思ひ附たれ今度の騷ゝ市村座の始終の事より係なれゞ吾儕も容易ならざる事と心を腦しゐたりしが今江戸中よて名ある人ゝ大概是よかゝづらひて其他より是を以て万吉を説和げんといふ人もあらずゝ誰をがな頼んと親子額を集つゝ互ひより胸を痛めけるが彦三郎ゝ不圖思ひ附き最も大勢仲裁より這入る樣よゝ思ひつれども未だ箔屋町の元締(相政を指す)と中橋の先生(接骨家名倉勝助を指す)が見えぬやうより候えゞ此二方を頼むゝ如何といへゞ龜藏然なりと答へ吾儕も二方の外よあらねゞ斯まで縺し騷動を納る人ゝなかるべしと今がた胸より浮びしゝ和主と符節を合せし如し然らゞ翌日まで延すも益なし是より直より箔屋町と中橋へ行き頼なん和主も共より往こそ能けれと言れて此方も打喜び二挺の竹輿を急がせて先箔屋町へ到りしより政五郎ゝ節よくも家よゐたれゞ二個の者を居間へ通して親子揃ひ訪るゝ事の珍しさより如何なる事の出來しぞと問れて龜藏彦三郎ゝ豫て聞知たるふべけれど捨置難き今度の一條江戸より名高き人々が説とも肯ぬ万吉を强情なりとて此儘より和解破れに到りなゞ市村座こそ大方の愛顧を失ひ此先の衰微を招ぐゝ無論あれゞ我々彼座より出勤なしゐて個をしも見るより忍びざるより兎さま角さま考ふるより未だ元締と中橋の名倉先生のゝ二個が仲裁人のその中より見え給いぬこそ僥倖なれゞ親子揃ふて推參いたしぬ日頃厚かるに贔負の市村座も愛顧を失ゝず又新門の假子の衆よも過ちおきやう穩便のゝ計らひこそ願しけれ元締に承知下さらゞ是より直より中橋の先生方へ推參なし願ひ奉ちん心なりきいかで〳〵と乞求る直實心を政五郎つく〳〵聞て打頭點今度の事も聞ぬよあらねど顔の賣たる人々の仲裁なれゞ日あらずして治りつらんと思ふが故わへて出ても行ざりしが事ゝ破れて和主等二個が座のため又ゝ新門の爲より斯まで心を盡し頼聞ゆる言辭をゞ爭無よして見過す可き然れども吾儕が言しとて聞く聞ざるゝ推測られねど名倉と二個變りたる顔が這入ゞ反つてまた聞るゝ事もあるべけれゞ吾儕ゝ逐一承知したり及ゞずながらも扱ひ見ん和主等二個ゝ名倉の方を訪て承知を得たまへと謙遜厚く承引し實より達衆の大丈夫自然と言葉より現れて頼母しくこそ見えたるより龜藏彦三郎ゝ大さより喜びなはくれやれも頼み聞え暇を告て其所を出間も近き中橋の名倉の方へ竹輿を飛せ勝助より會ひ又説こと一遍よして仲裁を頼より頼て止ざりけり

## 第廿二章　四日市に仲裁の辨舌　日本堤より壯士の復讐

そもゝ中橋なる接骨家名倉勝助といへるゝ千住より名高き名倉彌次兵衛の一男よして治療もお

さく〳〵父よ劣ねべ此なる土地よ出張所を構へて多くの病人を扱ひながら其傍ら諸衆の交際深くして實よ俠客の氣性ある者よてあれべ顔も賣れ江戸市中よて中橋の先生とこそ敬ゝるゝ肌合清き人なれべ龜藏親子の言る由を一議もあらず承引たるよ二個ゝ喜び立歸りしあとよ名倉ゝ政五郎の方よ至りて相談なし是より二個ゝ中へ這入まづ政五郎ゝ万吉を頻りよ說論したりしよさしも强情なる万吉なれど政五郎よ會てゝ一何もなく宜敷やうよと承知したれべ政五郎ゝ大工ならびよ芝居道具方よて有名なる淺草の長谷川勘兵衛よ吩咐樽を首め損じ所を一夜の中よ修繕させ負傷人ゝまた名倉が引受厚く療治をしたりしかべ是も日あらず全快せしよぞ然べ和解を結ばんとしたる物から市村座の出方ゝ素より願ひ下よて歸り來りし新門の子分を初め仲裁の各所の俠客その假子併せて千人足ずゆゑ是をべ入る家のなきよぞ場所ゝ四日市の廣場と定め其年八月十五日八ツを相圖よ合集る北の方ゝ新門辰五郎よ其假子數百人南の方ゝ市村座の座元市村羽左衛門（目下の尾上菊五郎あり）手代万吉坂東彦三郎親子其ほか俳優出方茶屋一同また政五郎と勝助ゝ各仲裁人と諸共よ東西二側よ分れたり开も此仲直りゝ江戸中の顔役のみかゝ俳優もまた多く出近世めづらしき事なれべ是を見んとて茲へ來もの堵の如く殘る暑を厭もせず數万の見物立集ふ登時相撲屋政五郎ゝ徐々と中央よ進み此度斯々の騷動ありしが府下各所の俠客仲裁よ入り示談整ひて愛度和解をなすよ至れり然れども將來互よ宿恨を殘しなべ其爲よろしからざるを以て茲よ集合して和解の意を表す吾儕も仲裁人の囉尾よ附が故よ聊か無辭を陳ずるよし辨舌滔々水の流るゝ如く一言半句の淀もなく述終りたる告條よ關係人ゝ感嘆の外なく見物人ゝ得了よも相政なりと一同よどつと響たる其聲の雲時は鳴も止ざりけり斯て双方拍手をなし思ひ思ひよ立去しゝ目覺しかりける次第なり

其夜も次第よ更そめて大退知する拍子木の音も幽よ按摩の聲犬の遠吠物淋しく不夜城といふ名よゝ似ず三味線の音も太鼓の音も絶て降出す秋雨よ往還稀なる日本堤浪人体の二個の漢一個ゝ年ごろ四十近く一人は年頃二十四五互よ白刀を拔合せ泥道蹴立て舊激突戰ほとりよ一個の女あり て若き男よ加勢をせんと思ふ物から白刀よ怖れ近くも其所へ進み得ず氣を揉あせる計りなり

其時大門の方よりして早歸りする客よやあるらん竹輿を急せ來りしが竹輿屋ゝ夫と見るよりも白刀の光りよ驚き荒忙竹輿を打捨雲を霞何國ともなく逃失けり此節壯士ゝ一人の涙士を其所へ切倒し十々目の刃をさし貫き女よ白刀を持せつゝ是よも十々目の刀を刺せ互よ顔を見合せてかツト一息吐間もなく壯士ゝ諸肌押くつろげ刀逆手よ取直し切腹なさんと爲たりしよ女ゝ其手よ取縋り貴下ゝ氣ばし違ひてか夫婦の者が十年あまり艱難辛苦の甲斐あつてやう〳〵今宵本望を達せし問もなく土地も去ず直切腹いなされますぞと言べ男ゝ嗟嘆なし和女が言葉ゝ道理あれども人を殺さべ我身も死ぬ天下の大法犯せし身が生存命て何かせん和女ゝ彼所よ生殘り奉公大事よ勤てくりやれと言つゝ又も取直す白刀よ怖れも泪組み夫程までよ心覺悟をなされし事よゝゝゞ爭か無理よ心止めヤさん然ゝあれども吾儕とて他人を謀て廓をべ脫出し來し物なるを何とて今更歸られん又貴下をべ先立て何樂みよ生存命ん貴下が切腹なさるゝなれべ吾儕も殺して給はれかしと思ひ入たる女の言葉よ男ゝ點頭目をしべたゝき夫ほどまでよ思ふなりせべ不便ながらも冥道の道づれ覺悟をしやれといふ折よ雨止み何しか空晴て今宵ぞ秋の最中ある十五夜の月隈なく照せべ是ぞ二個が身の眞如と女ゝ左右の掌こを合する胸元弓手よ刀を取直し南

無と唱ふる稱名もろとも男ゝ女の咽喉を目掛さし貫かんと爲たりけり此時竹輿の中より聲あり先待給へ二個の衆と言れて此方ゝ人ある事を初て知つゝ大きよ驚き何物なるぞと彼男ゝ女を放して身構へなす此方の竹輿の桐油をかゝげ垂を揚つゝ立出るゝ是則ち別人ならず相撲屋の政五郎なり時男ゝ膝摺寄つひよ見もせぬ足下ゝ町人如何なる故よ我々が死んとおすを止めしぞ最不審と打問べ如何も御不審道理ながら吾儕ゝ日本橋箔屋町よ住む元締家業相撲屋政五郎といふ者よて今日新門と市村座の仲直りをべ四日市で濟せて後が吉原へ誘はれて來て紋日の遊び降出す雨よ詮方なく今迄茶屋よ飲でゐて竹輿よ搖れて歸る堤閃めく白刃よ竹輿屋ゝ遁げ中よて容子を窺へべ言ずと知たる敵討首尾よく敵を討おほせ此世よ思ひ置ことなしとて其身計りか女房まで殺すといふゝ不了簡見れべは新造ゝ此廓で勤の身の上ゆだ年季も長い身躰を持ながら自分の望が達しなべ親方へ損を掛け死でも能とゝ親か兄かゝ知ねど敵を討ためよ十年あまりの艱難辛苦をしたよゝ似合ぬ貴殿の振舞夫ゆゑお止ゆしたが此相政の過失なるかと理非明かよ述たるよゞ夫婦ゝ心恍惚と酔るが如く醒が如く默然としてゐたりしが壯士ゝやう〳〵首を揚げ偖ゝ貴殿ゝ音よ聞く相政大人よてひしか實よや世間の噂よ違はず見ず知ずなる吾儕等も余所よゝ見過し給はずして厚き情の其ほ異見無明の眠りゝ覺侍りぬ是なる女ゝ我女房仔細わつて廓の妓樓仲万宇屋の遊女となり名を艶柳とゆせるが妻の手引で今宵やう〳〵親の敵を打取たる吾儕こそと名乘んとするを相政押止め更て往來絶たれと人目關笠せき兼る此往來よ長居ゝえきなし貴下が恨の顚末も聞とき有らべお聞ゆさんと懷中かゝぐり金一包取出しつゝ壯士よ渡し是なる金を路用として御夫婦もろとも此地を立退時節ほど經へ箔屋町の手前が宅へお尋あらば夥多の屋敷へお出入致せべ又御歸參の道もあらんと言よ此方ゝ有難涙されども女房艶柳よ追手掛らば如何せんと眉よ皺よせ問たりける茲よ至つて政五郎が如何なる答えをなすやらん开ゝ又次章よ說分るを聽ねかし

## 第廿三章

中万字よ遊女の身受
吾妻橋よ警衛の爭鬪

冨下相撲屋政五郎ゝ壯士よ向ひ言るやう其義なりせべ必ずしも心を勞し給ふ可からず吾儕中万宇屋の主個とゝ幸ひよして懇意なれべ是より直よ引返し主個よ會て艶柳どの〳〵身受を致さべ最早それまで追手の掛らう筈もなしと言よ壯士ゝ躊躇何から何まで有難き其お言葉よ從ひまつれど身受の金の才覺よといふを打消政五郎ゝテ其金ゝ如何やうとも吾儕が致して撥申さん少時も早く此場をべと殘る方なき俠客の情夫婦交よ手を合せ伏拜みつゝ堤を下り恨も今ゝ晴る夜の月を灯よ血刀を拭ふ山谷の紙砧音を聞捨田中の通り千住の方へ落行たる开も此夫婦ゝ何者ぞ如何なる譯よて父を討れ敵ゝ何といふ者なるか其事柄ゝ後々よ到りて詳細よ爲すことあるべし蔭見ゆるまで見送りて政五郎ゝ一個黙頭優々として元來し道吉原へとて歸るころゝ曉き近く成たるよぞまづ中万宇屋を訪問て主個貞三郎よ會しうへ其所の遊君艶柳が身受の事を言入るよ渠よゝ一個の大客あり個ゝ下谷坂本よ町道場を開きゐる一刀流の劍術師範跡部大之進といふ者あるが昨夜も例の通りよ來て騷ぎし末が何よなふ早歸りせし其跡よて艶柳ゝまた此家をべ脫出しよ依り手分なし行衛を探せべ昨夜堤よて大之進ゝ何者の爲よか殺害されしが夫耳よして艶柳の行衛ゝ今よ知かぬると語主個が言葉の端よて中半ゝ推せど政五郎素しらぬ顏して彼方よ向ひ偖ゝ

然いふ客人ありしかとゝ知ねども艶柳よゝ二世と契りし情夫のありて互ひよ添れぬ身を嘆ち昨夜此方を脱出し情夫の方へ至りつゝ死んと計りし其所へ節能く吾儕が行合せ家へ連行説得して夫婦よさせんと擬ひたれゞ夫で身受よ來りしなるが跡部とやらん云ふ客が殺されたるゝ此方の幸ひ故障の言人も有らざれゞ吾儕よ身受を任されよと眞實らしくぞ述たるよぞ貞三郎ゝ疑ゝず親元身受の金高よて政五郎へ向け證文を巻て是をゞ渡しける斯て後政五郎ゝ大之進が死後を探り見るよ是ゝ奥州二本松の浪人よして近頃江戸よ移り住み此土地よゝ居ものゝ素より妻子もあらざれゞ殺されしとて嘆く者なく死骸ゝそれが門人達が願の寺へ送りし耳と聞て大いよ安堵なしけり是より先日本全國中鎮玉攘夷の議起り朝旨幕政その議を異よし諸藩の宿論陽々よして事を干戈よ訴ふる所ろも少からざるより時の將軍德川十四代家茂公文久三年の三月かよび翌元治元年の正月等二歳つゞきて上洛なし朝意を伺ふ節もをり水戸家の藩士竹田伊賀耕雲齋と自ら稱し主家を脱して夥多の浪士を從へつゝも衣手の常陸國よ名も高き新鞠坪波の山よ籠り暴威おさ〳〵上々凌げゞ捨置難しと幕府より討手の人數を差向られ其騒動の一方あらず且て戸近き事なれゞ今よも浪士が此方へと寄來如く一犬の嘘よ吠しより万犬の實を傳へて市中の民ゝ家財を運び妻子を脱し安き心もあらざるより時の町奉行池田播磨守浪士の侵入亂暴を防がんものと四ヶ所の極々永代、兩國、大橋、吾妻の警固を相摸屋政五郎よ命じたるより言受なし政五郎ゝ夥多の假子を四ヶ所よ分ち半纏股引非常道具よ身を堅め取締りなす其所を政五郎ゝうち巡り晝夜も油断あらざりけり隅田の花ゝ咲揃ふ元治元年彌生の空と成し物から世の中ゝ騒がしくして春めかぬ警固の人數夜を籠て篝火の光曉きかと疑ふ計り鳥が啼吾妻橋へとさし掛る一個の武士を相政の假子の者ゝ押止め何國よりして何國へと通り給ふと咎むれゞ武士ゝ左右を見返りて吾儕ゝ奥州より遥々と出府なし箔屋町の元締家業相摸屋政五郎といふ人を尋るなりと答れゞ假子の者ゝ黙頭て茲よ堅めをなしゐる者ゝみな相政の假子よて今度元締ゝ此御用を仰附りし事なるが夫を尋て行るゝなりせゞ我々共の其中よて箔屋町まで案内せんが貴殿ゝ何と言るゝ方ぞと問れて此方ゝ會釋なし偖ゝ和殿等ゝ相政ぬしの假子ありしか然ゞ案内を願ひ申さん然ゝあれども吾儕が姓名ゝチト憚りありて各自方よゝ告難かりよし又明々よ告るとも相政大人も吾儕の面ゝ知ども名を知ねゞ兎も角會ねゞ名乘も益おし此義を心得給ひぬと言ゞ假子ゝ顔見合せ互よ何か黙頭合しがソレと一聲一同よ棍棒持て打て掛るよ個ゝ理不盡と思ども問答なす可き暇のあらぬゞ武士ゝ前なる二個の棒を奪ふとそがまゝ進み來る血氣の若者七八人を睥睨よ打居し鬼神不思議の手の中よ跡なる者ゝ進み得ず只囂々と罵る耳なり登時武士ゝ聲あらゝげ相政ぬしを尋來りし吾儕なるを假子として討取んとゝ如何なる譯ぞ仔細を諾れと白眼附れゞ中なる一人進み出武士然のみな敦圍給ひそ汝ゝ親分相政を尋る者とゝ言ながら我名を名乘ず元締よ會とも面ゝ知と雖も名ゝ知ぬとゝ不審の第一此頃水戸の浪人等ゝ名を變へ姿を窶しつゝ江戸へ專ら入込より我々警衛をなしゐるを疾より知て元締を尋る者と言なりせゞ安々茲を通さんかと淺墓よも思ひ究め嘘言を搆ゆる物よぞ有らん然すれゞ汝ゝ耕雲齋の手下の浪人よ極まつたり夫ゆゑ討て取んとしたるが過失なるか如何ぞと言葉せゝしく詰たる此をり相摸屋政五郎ゝ兩國橋より巡り來り見れゞ一個の武士と假子の者の物あらそひ個ゝ浪人かと立寄て篝火の光りよ又よく見れゞ其武士ゝ一昨年の秋吉原堤より落しやりし壯士よあなれゞあな珍しと言ば壯士ゝ白刃を納め一別以來相政

ぬし御健勝よて大慶と大地よ手を突き敬へば假子の者ハ呆れはて言葉もなくて立ゐたり政五郎ハ此方よ向ひ此武士ハ知人なるよ何故今ハ騒しき挙動ありしと打問よ假子ハ包む事もわらねば如此なりと演たるよぞ政五郎ハ武士よ向ひ假子の無禮を詫るより武士も遇りて打擲せし麁忽を詫て其場ハ治まり再度政五郎よ言るやう吾儕出府なしたるハ近國筑波よ賊徒蜂起し江戸さへ修羅の巷と成しと國よて風聞高かるゆゑ取物さへも取あへず馳參せしハ斯るをり貴殿よ一臂の力と成り先年受たる大恩を報ひまつらん心なりきが幸ひよして兵燹の未だ江戸よハ及ぼさず貴殿も恙あらざるハ此上もなき大幸と眞實顔よ顯して演しハいとど勇しくも又猛くこそ見えよけり

## 第廿四章

並松原よ一發の種島寺門前よ一封の送文

離合時あり政五郎ハ今此壯士よ邂逅いと勇しき言葉を聞て悅ぶこと限りなけれど茲ハ往來長談の室よ非ず聞まゝ欲き噺しもあれば先此方へと先よ立つゝ誘引て其ほとりなる遊船宿瓢箪屋てふ家へ伴ひ奥の二階の一間を借り下婢よ吩咐酒肴を其所へ運べせ立せやり後ハ兩個の差向ひ政五郎は猪口を揚壯士よ勸吉原堤よて別れし後よ中万字の方ハ如此いふ事なり又殺したる武士がありと斯々いふ始末と詳細よ語り又いふやう事大畧ハ解りしかど吉原堤よて會し節ハ蒼卒よして委敷こと を未だ聞ねば心よ掛りをりしが會しぞ僥倖なれば父を討れし顚末を包藏ず語り給ひねと問れて壯士ハ形を改め仰なくとも其事ハヤし上んと存ずる所ろ开も我父ハ西國の或殿よ仕へまつり祿五百石を頂戴なし庵原甚之進といへる者我儕はそれが一子よて甚三郎と申すなるが今を去二十餘年父ハ同僚の讒言よて西國方を浪人なし親子三個が少の知己を便りとなして奥州なる二本松の城下よ移り父は軍學劍術を他人よ教て消光うちッイ隣家なるせり呉服屋六三郎といふ者夫婦時疫よ依り打續死沒たる其わとよハ幾といへる孤子の殘りて途方よ暮ゐたるを父母ハ其性慈善を好めば家よ引取り養ひ育て往々吾儕よ娶せんと樂む甲斐も情なや風の心地と打臥し毋ハあへなく此世を去れり是より先二本松の城下よ九州方の浪人よて跡部大六といふ者あり一刀流の劍術と軍學を以て城中の諸士よ教て用ひらるれば何か心の高振て彼無鳥嶋の蝙蝠が翼を廣げ鼻を高ふし己れよ續く者なしと思ひゐたるよ我父が其地よ移り弟子よ教る事の深切ばかりか業も巣より勝れしうへ假よも誇る景狀ハなきよぞ跡部の方の弟子ハみな彼方をば辞し去て此方の門よ入も多く此方ハ日々よ賑ひ增し彼方ハ竹刀讀書の聲も稀々よして道場も蜘蛛の網張ばかりなるよぞ大六ハ其妬しさやる方なく爭で父の名を汚し弟子共を取戻さんと思ふよりして此方へ來り先づ軍學の問答を試みたりしが一言の下よ忽地閉口なし遁歸りたれど懲ずまよ再度來りて劍術の誠合を望めば蒼蠅と思ふ物から推辞かれ稽古場へ入れ立合しよ此節もまた我父よ手痛く負たる二度の不覺よいよ〳〵人の物笑ひと成つゝ少殘りゐたる弟子さへも離れゆき生計の道を失ひしよ跡部ハ已れが悪きを思ハずまず〳〵父よ恨を累ね往る嘉永六年十一月十八日の夜父ハ城中の弟子の方へ招れ夜を冒し下僕の提燈よ道を照させ家への歸途城下外れの並松原を通るをり孫て梢よ登りゐて窺ふ跡部大六が切て放せし種が島の狙ひハ違はず我父の脇腹深く打貫きし炎所の深傷よなどかハ滔らん父ハ一聲叫も敢ず忽地息ハ絶たりける此銃音と休爲よ驚き彷徨下僕の狼狽敵を認る意もなく遁歸り來て斯々と告るよ吾儕も驚きて内弟子四五名伴ひつゝ直に其場へ駈附しが敵ハ已よ跡を暗まし脫し物からなほ隈なく松原探せし茂の中よ落散る小柄

大六

暗夜の鐵砲
竟ぬ浪
士ゴ生命を
斷ら

甚之進

い大六が所持の物のよし弟子の中より見知る者ありて告しより敵の手掛のありしを貴ての意やりと泣々父の死骸を携へ家へ歸ると其まゝより大六方へ至りしが渠はや其所より國遠せしよや絶て行衛の知ざるより無念いよ〳〵心魂より徹し毫も忘るゝ暇のなく父が七々日を營みしのち家財を賣て路用となし敵討よと出立なすをりよ女い足手まとひと思へど寄邊なき孤子のお幾を捨てい行れさるより是非なく之を引連て國を出しい吾儕が十五お幾が十三の年なりしが夫より九州四國中國と巡る月日も七年餘よ成し物から大六が行衛い毫も知ざるより江戸い諸國の人の入込土地よてあれば万が一又手掛りもなからずやわと万延元年の春の暮此地より出てあから引く淺草寺の片邊り願掛寺店といへる所ろよ狹少なる家居を借りお幾と夫婦よ成つゝも市中を歩行て大六の在所を探すの其外よい又他事もなき兩個が上も長の旅路よ路用い盡き搗て加へて吾儕い其年秋の首より幾干の辛苦の爲なるか重き病の床よ着き貧苦と病苦よ責られれど何れを見ても知ぬ土地金を借可き便もなく其日の活計よ迫る耳かい今はた敵よ巡り會とも討こと協ぬ身の因果と心頻りよ苛立ば苛立ほどなほ彌増病苦今いはと〳〵死おまく爲よぞ妻い其身を中万字樓の苦界よ沈め艶柳と名も呼更て浮節繁き勤の身よ調へたる金を藥や消光の代よなして醫者をも撰しかば一年あまり經うちよ病氣い全く快ければ妻の許を訪問てと思ふをりから艶柳の許より來りしみの端よ勤の中よも見たの敵を知んと來る客毎よ毫も油斷せざるより此頃仲之町の引手茶屋山口巴屋より送り來りし其客の面体恰好い孫て貴下の噺しよ聞く跡部大六よ能く似たりと初會のをりの引附よて疾くも見て取り候えば此身を任せず綾なして居ば渠はやもどかしがり幾々通ふよ跡部といへる名字い慥よ知しかど實大六よや且いまた何處よ住る者なるよや未だ確とい解り難かり开い追々よ聞紛して報知侍れば喜び給へと詳細よ書附ありたれば吾儕い夫を見るよりも飛立ばかりの心地おし直よ討も果したく逸る心を自ら押止め又の報知を待うちよ一昨年の六月中旬再度來りしみの中よ客いいよ〳〵大六よ相違なく目今い下谷坂本よ住み跡部大之進と變名なし軍學劍術を八よ教て生計を致しておると言ば翌日の夜窃よ客となりて來りて夫かあらざるかほ届け給へと記あるよぞ天へも登る心地おし一夜を千夜と待明しあくる夜妻が許へ至り座敷の次の間よ潜み窃よ見れば艶柳が言葉よ違はず父の敵跡部大六よて有しかば今更無念やる方なけれど敵を討可き場所よ非ねば其夜い其まゝ見過したりと先大略を噺したる甚三郎が越方を聞政五郎い不覺よも甚之進が横死を悲みお幾が貞操苦界よ沈み本夫を助る耳ならず仇家を窺ひ知うへよも叫身を汚さず綾なしける才智勝れし其妻の本夫い僅十五よして十三よ成る妻を携へ逆旅の憂を忍びつゝ親の敵を討んとい天晴見上し心底と聞こと〳〵よ耳新しき心地せられて諸膝の進を覺えぬ計りなれば跡子を更め下物を添へ勸てあとを問よける

## 第二十五章　十條村の原中の出會　瓢箪屋よ仇討の顛末

手よ持つ猪口を飲干て政五郎よ差し庵原い再度語り出すやう恁面吾儕い大之進を正可よ認たりければ今宵の中よも坂本なる渠が仕居へ踏込で敵を討んと逸りたるを妻い頻りよ押止めそいお道理なる事よし侍れど貴下が父御の敵なれば吾儕の爲よも眞御の仇よてあれば一太刀なりとも恨ん物と是まで辛苦を致した甲斐もなふ貴下一人でお出あれば吾儕い恨も返し難く然とて籠の鳥同樣な此身が共よい行れ難し殊よ大之進が家の中よい弟子さへ多くあると申せば貴下一人

で行ゝ危し故ゝ吾儕ゝまだ渠ゝ肌ふれざるを幸ひなれゞ虚言造り此家を連出せしうへ夫婦ゝ成て給はるなれゞ其時ゝ帶紐解んと言なりせゞ渠よろこびて承知せんをりゝ戸外へ連出し討ゞ加勢の者もなく吾儕も恨の一太刀を報る事の出來ぬ可し此義ゝ如何と老實だちて語し妻が心の中推せゞ無念も然ぞ有あんと思ふよりして言ゝ任せ偖八月の望の夜ゝ連出したるゝ外ならず繁々通へど意の眞情を見拔ぬ中ゝ肌解難く殊ゝ眞情を見拔たらゞ苦樂を共ゝなしたけれゞ見受を願ふ心ゝあれど設し夫をしも協ずゞ連て立退き勸の苦界を扶て給へと聞えしゝ渠はや金ゝ迫るを以て身受ゝならねゞ脫走と事を決して牒し合せ跡部ゝ歸りし面地して大退相圖ゝ裏手へ廻れゞ妻ゝ塀をゞ乘踰て互ひゝ手を取り山谷なる知己の方へ一先落んとさし掛りたる堤の上ゝゝ吾儕豫て女房の內通ゝ依り待かまへ來るを討て年來の父が冥土の忘執を晴したりしゝ天つ神地つ神の冥助ゝ依る可し然爲しうへなほ和君の助を蒙り其場を落ち夫婦首尾よく二本松の城下へ歸り惠れたる路用の餘ゝ家を借り又道場を開きしゝ以前の門弟立歸り親の代とも變りなく繁昌なして敵討の事を話せど亂れたる世のならひとて誰一人咎むる者もありもせず返つて賞賛致されつ三年の月日を安々と送るゝ實ゝ和君の大恩いつぞゝ報じ奉らんと思ふをりから今度の大變こゝ此身を捨てありとゝ妻ゝも故由ゞ聞け出府なしたる次第ゝてそと一伍一什を說明したる長物語ゝ政五郎ゝ夫婦の苦節を感心なすうち夜もはや巳ゝ明近けれゞ庵原をゞ箔屋町なる家ゝ伴ひ妻子ゝも引合さして逗留さするゝ甚三郎ゝ政五郎を助て日々日々四ヶ所の橋を打巡りつゝ軍學者の事ゝてゐれゞ假子の者等ゝ進退掛引調練を敎へたりしゝ一同ゝ町人ながらも鑾固の容子自然の法ゝ就ひける兎角するうち耕雲齋も亡びて平定なしたれゞ鑾固を解れ菴原ゝ二本松へと歸り去しが今ゝ音信絕ぬといふ却說德川將軍十四代家茂公其年(元治元年)八月大坂ゝて薨去ありしかゞ仝く九月一橋中納言慶喜公を勅して幕府を嗣しめられ德川十五代の大將軍ゝ任じて多端の國事をゞ執しめらるゝ事とゝ成しが幕政いよ〳〵朝旨ゝ合ず竟ゝゝ國の亂れとあり將軍坂地ゝ在りあがら台命ゝ依り江戸ゝてゝ軍役變革せられたり扨ゝ是まで八万騎の旗本中ゝ備へありし鉄砲組を殘りなく廢して幕府ゝ步兵隊を設けて之へ組入られしが此人員ゝ夥多しく且ゝ人入元締より入たる者ゝて有るなれゞゝ北町奉行井上信濃守ゝ重立たる元締五名越中屋俊藏、相撲屋政五郎、高野屋仁助、巴屋次郎兵衛、津國屋善兵衛等を呼出し步兵取締りをゞし附しゝ慶應二年の八月なりけり然るゝ同年九月の初め又も步兵を募らるゝ節ゝ年期ゝ五ヶ年ゝて調練その他ゝ勉强あさゞ年過しのち相應の軍人としも取上れゞとも沙汰ありしゝ入隊せし者も頻ゝ多かりしが如何なる都合ゝ依ゝけん翌年十月の末ゝ至り一同解隊と成しかゞ步兵ゝ銘々不滿を抱き先を爭ひ脫走あし近在所々ゝ潛みゐて事を爲んず景狀なれゞ南町奉行駒井相摸守ゝ容易ならざる擧動ありと五人の取締を呼出し鎭撫の事を命じたる中ゝも相摸屋政五郎ゝ此時六十年ゝ成たれど强壯さらゝ昔しゝ變らず殊ゝ其身を首として假子の者ゝ庵原より習ひ受たる軍學あつて進退掛引當を得たれゞ他の元締ゝ先立て仕度をとゝのへ皆諸共彼等が在所を窺ふゝ橋場總泉寺の境內ゝ屯集なすゝし聞えしかゞ直ゝ其所へ向ひしゝ人影とても有ざしゞ开が邊ゝて聞合するゝ步兵ゝ討手向ふと聞墨田の岸ゝ繫ぎある船を奪ひて各自打乘品川へ向け脫行たりと言ゝ此方も船を出させ跡を追んとあしたる所ろへ町奉行よりの使者一騎汗馬ゝ鞭を中て來り中仙道板橋宿ゝ步兵屯集の聞えあれゞ早々鎭撫然る可しと言渡し慌き立歸るゝ政五郎ゝ玆ゝ人數を分ち

越中屋俊藏、高野屋仁助、津國屋善兵衛の三個よ假子三百餘人を附け船よて品川へ趣かしめ其身ハ巴屋次郎兵衛もろとも二百餘人の假子を引連れ二十里餘りの坂東道板橋驛へと着しころハは や日も暮て寂莫たれバ其夜ハ驛の中よ分泊し明るを待て馳向ハんと思ふよりして探り聞よ彼等ハ凡そ百人ほど此驛内よゐたれども時日の薄暮引はらひ日光道中川口宿の方へ行しと答ふるよぞ然バ急げと隊を組み明近きころ板橋を立て頻りよ進みゆき十條村の原中へ來れバ先へ行く歩兵取て返して肩よしたる銃取直しさし向る此狀景よ一同ハ嘆嗟と騒ぐを政五郎制して彼方へ進みゆき解隊の令ありしとて未だ御所置の如何をも承ハらざる其中よ脱走なすハよろしからねバ一先江戸へ立歸り御所置を待てそ然る可しと物和かよ說しかば渠等ハ素より方向を失ふよりして此粗暴の有ことなれバいかで推辭つひよ政五郎が言葉よ從ふをりから土地の者の來りて王子櫂現の境内よも又昨夜より夥多屯集なせるよし訴へ出るよ捨置難く承引あしたる歩兵をバ先鋒となして駈向ふよ茲ハ五十人計りよして浦和の驛へ脱走せし同志の許へ到り着き事をなさんず契約おれバ此隊ばかり說諭よ基づき引揚んこと成難しと毫も聞入る景狀ハなきよぞ然ば浦和へ至りしうへ是をも說得なさんとて政五郎ハ茲なる歩兵も共よ引連れ浦和へ行しが如何なしけん一個も人の有らざるよぞ王子よゐたる歩兵さへ呆れて言葉もあらざれバ今ハ說諭よ從ひしよ政五郎ハ再度王子へ出其夜ハ扇屋へ一泊なし疲の勞れを休めけり

## 第廿六章　扇子屋よ出役の引渡　琴吹亭よ吉原の嘆願

明る朝開の朝露を拂ひて是なる扇屋の門邊へどやく〳〵押來る老若凡そ百人あまり後の方よハ歩兵のもの五十人ほど附き從ひ相政ぬしが此家よ泊りゐるとこそ思ひつれ面會なさんと言入るよ個ハまた歩兵の方よりして逆寄せしかと一同が驚き騒ぐを政五郎鎭めて側へ立寄つ〳〵見れバ先よ立たる武士ハ豫て面を知る浦和宿へ出張なす勘定奉行の八州廻り百瀧章藏にて有たれバ先此方へと請ずるよ百瀨ハ手廻の者をのみ引連れ一間へうち通れバ從ふものと歩兵ハみな見勢よゐながれゐたりけり登時百瀨ハ此方よ向ひ和主ハ老体も厭なく歩兵鎭撫よ盡力さるゝと疾くも傳へ聞しかバ我も一臂の力を盡し日頃の交誼よ報はんものと思ひゐるうち出張先の浦和よ歩兵の屯集なせバ然ばと計り思ひ立しがたゞ手廻の少人數のみ從へゐれば打向ふの難き物から要こそあれと思案を定め驛中の老若の男子百人を直よ募り竹槍の得物を持せ是を從へ打向ひし、浦和を脱げ板橋驛よと聞えしかバ頓よ退掛仝驛なる常連寺の境内よて說諭をなして屈伏させ一箇引連て來りしハ和主よ渡さん爲なりかしと言れて政五郎打喜び吾儕浦和よて歩兵を見失ひ遺憾一方ならざる所ろ計らず和君のお手を以て鎭められしハ此身耳かハに上よ於ても滿足なるべしと厚くお禮を述了り歩兵を此方へ引取バ百瀨ハ手の老若を連て浦和へ歸りけり此方の地方の歩兵隊ハ是よて鎭撫なしたれバ政五郎等ハ一同を引連れ江戸へ歸りつゝ町奉行所へ引渡し役目首尾よく勤たりしハ啻よ是のみならずして品川の方へ向ひたる越中屋俊藏等の一群も大森沖よて竟よ退附說諭をなして連歸りしよ奉行ハ一同の忠勤を賛め夫々ものなど給りし後仝年十月七日の朝駒井相摸守ハ歩兵頭取を呼出し歩卒等廢營後その筋の指揮をも待ず自儘よ脱走するのみかハ横行粗暴の擧動ありしハ不屈至極の事よして急度曲事も申し附る所よあれど在營中勉强致せし廉もあり且ハ循よく歸りしを以て上よ於てハお搆ひなく特典として一人よ附き金一兩づ

しのお手當下され夫々歸鄕を許す可けれゞ勝手次第よ離散す可しと嚴重よこそ言渡されしよ頭取等い恐み受け此旨殘らずへ諭示しお手當金さへ分配せしかゞ何れもよろこびこがまよ〳〵立去行て此一件い故あく落着なしよける是より先將軍家よ附從ひ大阪表へ登りたる歩兵い如何ある都合ありてか彼地よ於て隊を解れ暇となりしよ詮方なく一同江戸へ歸り見れゞ此方い殘らず解隊となりて頼ん方もおきよぞ皆方法を失ひしかゞ各自市中を押歩行寄席、芝居、觀物場へ無代で這入毫よても心よ逆ふ者あれゞ忽抑喧嘩を起しつゝ他の觀物の邪魔をなし其他吉原の妓樓よ登り又い各所の料理屋へゆき無錢の遊興無法の飲食然のみならず他の商個の家よも乏ゞ〳〵突入し物を求て代を拂はず傍若無人の擧動をなせど未だ其頃い目よ馴ぬ洋服扮担の薄氣味わるく嫌よい政府の人と計り思ひゐるゆゑ市中よていい是よ逆ふ者もなく難儀ひと方ならざりけり然が中よも吉原町は此亂暴よ詮方なく廓一同戸を閉て營業休みゐたる物から其年十一月十三日い府下よ名高き酉の待よて一年一度廓よていい第一等の物日なるを此ていたらくよていい店とても開き難しと心配なゝ廓の中よて重立たる妓樓の主個い額を集め深くも相談遂し上大黑屋金兵衛稻本屋庄三郎相摸屋新三郎梶田屋六太郎龍ヶ崎屋寅吉の五個い日本橋通り三丁目なる待合茶屋壽亭へ政五郎を招じて酉の市の日よ一同營業の出來るやう偏よ貴殿の御誌力をと乞れて此方い推辭もやらず篤と心得ひなれゞ兎も角來る酉の日よいい各自店を開きたまへ相政受合まつる上い響へ歩兵が何百人參で來るとも怪有しからずと言下よ承引大丈夫の一言よ依り六個の者い打喜びて立歸りぬ斯て酉の日と成しかゞ例よ變らず吉原町い綺羅を銜りつ非常口まで開きて客を待けるよ歩兵い今まで營業を休みといへるよ詮方なく廓へ足も入ざりしが今日なん店を開きたりと聞



より五人或い十人うち連立て這入來るを政五郎い衣紋阪なる見返柳の北下へ見張を附置き見定させ己れい廓の大門口よ扣所を置き出張なし群來る者を取押へていい說諭をなすよ开も此廓い御免の遊女場武士い帶刀さへ許され難き程よてあるを己がまゝよ登樓なすい協難し然るも多くの黃金あらゞ廓の法もて遊ゞせなん吾儕い則ち相政なり和主等の粗暴を防がんため今日しも玆へ出張なしたい他の遊客の妨げをさせじ物との譯なれゞ早〻歸り給へかし設夫をしも聞給はゞ吾儕よ夥多の假子ありて皆此邊よ扣へゐれゞ是よ是よ通じて引立させ町奉行へ向け引渡さんかと此旨をしも述るより得了强情我慢なる歩兵も今い爭ひかね寥々として立歸りぬ斯の如くよ說諭していい言も更あり一同神の如くよ敬ひ有難しとぞ稱へけるいい皆大門より追返せゞ其日い吉原靜穩よして何れも業よ安せしい偏よ相政が蔭なりと彼六個い竟よ町中の者よ憎まれけん何者の仕業とも知ず或夜日本堤その他よて五人三人づゝ歩兵等が切殺されしも少からねゞ殘る歩兵い大きよ怒り吉原最寄よ斯る事のあるい正しく廓の者の所爲よぞあらんと多人數が寄し合せて廓へ押行き妓樓も茶屋も打毀し騷動一方ならざりしが幕政已よ衰へたれゞ此落着い如何なりしか後よい聞えずなりよけり然ゞ殺害されし歩兵の死骸も誰とて葬る人もなきよぞ政五郎い是を不便よおもひ以上九人を己れが香華院麻布宮村町の長安寺（淨宗）へ葬りて厚く後の世の營をなしたるい奇特といへるも餘りあり

因よ云此長玄寺い政五郎の養家相摸屋の寺よして實家大和屋の寺い築地門跡地中勝林寺なり大和屋の事い初回にも述るが如き舊家よして正德享保の昔しより一所不住の破落戸を假子となして抱へ置ゞ夫等が病死なし〻節も葬る寺の有らざるより皆親分元締の寺へ葬るの慣習な

りしが親分といへる中よも寺を定かよ定ざる者も多く有たる共頃よ定右衛門い常よ他力本願の念佛を信じ寺の仕向も能かりしかゞ我假子い言もさらなりたとへ他の假子よても寺なき者い皆我寺へ埋葬し佛も多く成しかゞ延享四年の四月中假子の石碑を建るため勝林寺の書院よて博奕を開き餘錢を以て石碑を首尾よく立たりしが共頃江戸よい土塲よす可き大やかなる家もあらねゞ石碑のをりよく勝林寺の座敷の廣きを大いよ愛し是より代る〳〵會主と成て茲よ集り勝負を爭ひ其度毎よ何程かの座敷代をゞ奉納なし先よ死たる假子の菩提を葬はする事となりしかゞ偖こそ今も此道よ「寺」てふ言葉の殘るといひけり

## 第廿七章

脫走兵よ過分の恵金
敎部省よ三條の發表

亂弱つて治となり治究つて亂となるい脫れ難かる世の變遷德川の大祖家康公三河國の邊諏より起りて應仁文明以降麻の如くよ亂れたる世を切治めて二百餘年子孫十五世の長を累ね無事泰平を謠ひしも四海沒風騷立て德川の水涸んとする當時の形勢淺猿しけれ然ゞ歩兵の脫走隊い徒黨を組て吉原町を毀したるより如何樣なる咎めあらんも計られぬゞ江戸を立退遠き縣よ身を潛まするぞ能きなんと言合さねども心い一つ國遠なさんと計るより所謂行掛の駄賃とやらん猶も市中を暴行あるき强談なして路用を借り身裝を繕ひ立退など激勢はおはだしけれども幕政とゞかず搆ひなけれゞ民い門戸を押開きて營業をあす事もあらず各自戸を閉ぢ堅く守り生計の道を失ひて府内い蚤も暗夜の如くたゞ亂妨を防ぐのみ外よ所在いなかりけり然ゞ歩兵い何國へゆくも路用の出來ざる所ろより府下の顏役元締の許へ到りて無心を言ひ容られざれば亂妨あす然れども心よく承引ば多人數して際限なけれゞ各自困じ果たる中政五郎い斯る時家よ居らすゞ脫しとて後々までも笑はれなんと達衆の意地づく自若として箔屋町の家よをり來る歩兵よ一人前金二分づゝを恵やり僅の中よ二百餘金を費したれゞ此上い衣類その他を賣代なしても恵やらんと思ふをりから我娘の婚なりける本石町一丁目い組頭取伊兵衛藤堂家の用達巳屋治郎兵衛の兩個出し合して金三百兩持參なし政五郎よ渡しつゝ言葉を揃へていへるやう歩兵の暴行憎可き限りよいい物かから渠等も素い元締衆より入し者等よ在とか聞に今立退を餘所よ見んこと達衆の耻る所ろありと財を惜まず恵たまふを我々いかでか餘所よなす可き幸ひ二個が持合せし三百兩を持參したれゞ是をも心地よく施しやり一日も早く立退せなゞ市中の民の喜びいまた一層よい可しと眞心明して逃たるよぞ政五郎い是を受け以前の如く金二分づゝ殘りなく恵たる其金高い六百餘兩人數い千二百餘人なりしと是よてやう〳〵歩兵等いみな〳〵江戸を立退て稍物靜よ成しかゞ市中の民い安堵なし各自戸を開營業を始る如く末行たるい偏よ相政が財ををしまず時疲神をゞ送りくれし賜のなりきと悅ぶより伊兵衛次郎兵衛の其名さへ俱よ江湖へ廣まりけり斯て一日二日過るほどよ箔屋町の近邊なる紙、荒物、瘢裏草履、手拭、太物の商個より賽附を持ち政五郎の方へ拂を受取よ來るもの殊よ多けれど此方は買し覺えのなければ不審ながらもうち問ゞ全く歩兵が立去をり是等の物を求るとき相政よりとて行し物と判れゞ假子い之を憎み拂はざるこそ宜しからんと言を政五郎打消て否とよ渠等い憎くもあれ商家い情を知ぬ者よてたゞ相政といへる名を信じて鈍くも騙り取れし物と知てい歩兵等が憎しといふて此勘定をやらずもあらゞ我名を信せし商個いみな憫然よて如何も便なき事といふ可し遲ね〳〵と取合ざる大腹中よ感佩して拂ひ

ゝ故なく取せしとぞ茲ゝ感ずべき一話あり日本橋通一丁目の呉服店白木屋彦太郎ゝ江戸草分ゝて此業の豪家と云るゝ丈ありて此折夥多の歩兵至り腹巻手拭下帯そのほか百反ほどの白木綿を相政の名をもて取れしかど這ゝ是れ騙りと疾くも悟り施こしやりて政五郎の方へゝ何とも言ざるゝ實ゝ有名なる大家ゝまた大家ゝ備る所ろありと後ゝ聞たる政五郎ゝ感服のほかなかりけり閑話ゝ休題つ翌慶應四年の春ゝ鳥羽伏見ゝて戰爭ありつ引續て世の中おひ〳〵騒がしかりしが鳳輦吾妻へ下りまし〳〵ち同年五月上野ゝて戰爭ありつ引續て世の中おひ〳〵騒がしかりしが鳳輦吾妻へ下りまし〳〵江戸を更め東京とし慶應四年を更めて明治とせられ恐くも　王政維新となりもてゆき是ゝ内治ゝ改良を施し給ふ所ろより僅四五年が其中ゝ廢藩知縣の令もありしゝ元締家業ゝ茲ゝ至り廢絶同樣なりけるものからたゞ政五郎一人ゝ諸侯の愛顧を添けおふし中ゝも土州老公山内容堂君ゝ一方ならざる愛顧ありて既ゝ前章ゝも記すが如く明治ゝ至りて山中てふ名字を賜はり且ゝ又政五郎てふ名を更め政次郎と呼反しかゞおる殊ゝ愛度のみかゝ當時の知事公山内豊範君も幼稚より總明英智ゝ渡たらせ給へゞ政次郎が人となり潔白なるを愛させ給ひ扶持さへ夥多たまはるより政次郎ゝ一新後といへども敢て昔しゝ變らず多くの假子を養ひて箔屋町ゝぞ消光けるが斯するうちゝ岩崎彌太郎君が三菱會社の設立ありて營繕非常の馳附等みな政次郎ゝ任されたれゞ相政の名ゝいよ〳〵ます〳〵高く世の中へ聞えける時ゝ明治五年の夏　朝廷ゝ　朝旨の三條といへるゝ定め給ひぬそも〳〵　朝旨の三條といへるゝ第一條敬神愛國の旨を體す可きこと第二條天地人道を明かゝすべきこと第三條　皇上を奉體し　朝旨を遵守せしむ可きこと等ゝて是を説明して國民ゝ聽聞させよと神官僧侶へ仰もありつ併てまた説教さへも奬勵されしゝ何れも　朝旨を恐み奉り中ゝ就て教部省ゝては虎の門なる琴平神社の宮司を召して此旨をゞ傳んとこそせられしが宮司は本國讃岐國象頭山ゝと聞えしかゞ直ゝ召も聘れしより神官琴岡宥常および宮崎富成の兩個ゝ取物さへも取あへず東上なして罷り出しゝ其年五月の八日なりけり偖も教部省の係員は兩個を親く召　朝旨の三條を宣告しまた説教の事をも示し一日も早く國民ゝ聞え知するを要すあれば早々着手致す可し而して何頃説教を創るゝやと打問れ兩個ゝ首を下つゝも幸ひ明後十日こそ正五九月の臨時祭ゝ相當いたし參詣も群集致せゞ其節ゝ説教なして　朝廷の御趣旨のほどを國民ゝ教へ導き奉らめと恐み受けしが虎の門ゝゝ多人數入るゝ場所のなきゝぞ係り員ゝ再度又二個ゝ向ひて言るやう言下の承諾滿足せり然ゝあれども明後日と言ゞ明日一日なり其日を以て説教所を新設せんこと容易かるまじ殊ゝ説教所ゝ狹くとも十間四面もあらざれゞ聽衆を入るゝ便おからん此等も心得をるならんが如何なる者ゝ打任して用意をなすか聞ま欲と問れて二個の神官ゝ書院拜殿ゝて爲んとのみ思ひ込つゝ明後日と演じゝ變り説教所を設けん事と成たれゞたとへ鬼神ゝあなれゞとて一日の中ゝ十間四面の家屋を造り出さんこと容易ならねゞ今更ゝ顔見合せて暫しがうち默然としてゐたりけり

## 第廿八章

琴平宮ゝ説會の説立
橋場邸ゝ殉死の覺悟

登時琴岡宥常ゝ意ゝ急度思ひ附く事やありけん彼方ゝ向ひ如何も夫おる普請のことゝ相政といへる者ゝ打任さゞ一日ゝ説教所を建んこと難もあらぬ業なりけりと思ふが儘ゝ演じと答え奉れゞ係員ゝはく〳〵と黙頭て相政が事ゝしも其名ゝ夙ゝ知れけれゞ此工事を任せられなゞ必ず道

尾よく致す可し然らば明後日い勤給へとなほ細々と聞え置き二個よ暇給はれば神官い教部省を立出るをり琴岡の袖を扣へて宮崎が最不審氣よ問るやう和君い最前相政てふ者よ吩咐一日の中よ説教所を創設させんと明々地よ申されしが十間四面といふ場所なれば萬一整ひ兼る時い朝廷へ對して申し譯なし彼相政が事いしも遠き四國へ其名聞え知ざる者も有らざるが實斯いふ手並ありや或い和君い懇意なるか覺束なしと言出れば琴岡も度息吐き吾儕實よ相政を知よあらねど相模屋政次郎といへる者い幼稚より琴平宮を信心なし虎の門へも月毎の十日よ必ず參詣なすと稱宜宮奴の談柄あり殊よ勢ひ説教所を新設なさねば成ぬ事と成しよ相政が事を思ひ出し如此と演たれば係の方も安心せられぬ吾儕相政を知ざれと東京一の達衆といへば到りて頼み推辭いせまじ是より直よ赴く可しといふよ宮崎もあやぶみながら連立箔屋町へ趣きて未だ一面識もあらざれど吾儕等い琴平宮の神官よて甲某乙某といへる者なるが今日教部省よて如此の仰ありしかば箇樣〳〵よ答え奉りぬ和主明後日の朝開まで十間四面の説教所を設立あらば喜びしと頼べ更よ辞する色なく己れ幼稚より琴平宮を信心なし歳十三のをり父親の入牢を悲み願ひまつり間もなく恩赦よ成しのみかい夫より今年六十五歳まで危難を免れ名を躍かせ不測の利益を蒙ると數へ擧るよ暇あらねば常よ崇敬怠らざるを斯る節よ爭か推辭相政受合まつる上い明日一日よ落成なさしめ明後日の説教よい差支へ有らざるやう必ず致し申す可しと尊もなげよ答えしかば兩個い悦び立かへりしよ政次郎い夫より直ぐい組の消防頭取伊兵衛ろ組の消防頭取丑右衛門の二個を招き如此の次第あれば吾儕よ力を添給へと言よ二個も心得つ其身い素より假子の中よて心利たる者共等を多く出して政次郎を應援たりしよ政次郎い其夜の中よ假子を集め工事よ掛り夜を日よ次堀立よして板葺ながら五月十日の曉まで僅一日二夜よして十間四面の説教所い琴平宮の側らよ巍々と聳へつ席薦建具膳腕火鉢よ至る迄殘る方なく揃し耳かい説教所を九尺離れて周圍い菱垣青竹の矢來めぐらし靜然たり此体を見て神官の二個を初め其當日撿分として臨場されし教部省の掛り員も人間業よいあらざる可しと舌を巻てぞ賞嘆したるが此事市中よ流傳なしよ個い相政が日頃より琴平宮を信心なれば工事のをりよ夥多の天狗が出て木を持ち屋根を葺手傳たるよ因ならんなどと言あへりしぞ可笑けれ然ば神官い政次郎の盡力よ因てとなく説教を濟せしを好し本社非常の駈附人足營繕その他の出入を吩咐七人扶持を與へたりしよ政次郎い有難しと受し物から更めて七人扶持を奉納あしゝい得難き人とぞ思はれたれ總て生ある者い必ず滅す釋尊も未た栴檀の煙りを免れず樂み盡て悲み來る天人もあは五衰の日よ逢り然ば前の土佐守山内容堂君い已よ前章よも説るが如く家督を豐範君よ讓り給ひて後い淺艸橋場なる別邸よ住居こゝを方外室と名号たまひ出るも入も夥多の美女を侍らせて朝歌夜絃の絶る事なく衆人の目を驚かせしかど明治五年の夏の初めより心地例ならずと病の床よ臥給ひしよお附の者は驚き騒ぎて醫師を迎へつ藥を撰び療養油斷あらざる物から容堂君い次第〳〵よ重らせ給へば然ぬだよ孝心深く渡らせ給ふ豐範君い如何せんと心痛一方ならずして箱崎町なる御舘よい落ゐて一日も居給ず間なく橋場の方外室へ訪問たまひて嚴君の御病氣如何と御自身よ看護もなしつ和漢洋の大醫を招き御腹藥も奇種神劑を撰べせらるゝ程よしあれば政次郎も多年高恩を蒙りし容堂君の御病氣ゆゑ心も更よ心ならず晝夜橋場へ詰切て御全快をと祈る外他事おかりしが如何せん天壽い人力よ及び難く生老病死い貴介公子も免れ難き物よしあれば名号て之を四苦といふ佛の言葉

名士の論辯
よく決死の
老夫を説く

政五郎

豊範公

後藤君

女中

板垣君

に漏ずして哀む可し前の松平土佐守豐信正二位山内容堂君に其年六月四十六年の夢覺て端然長逝なし給ひしに豊範君を首として譜代恩顧の家臣に更あり事へ奉りし女中達まで泣かなしむ聲邸に滿ち此訃の早く聞えしかば當時の參議板垣退助後藤象次郎の兩君に勿論三菱會社の岩崎君この他土州の出身にて要路に在ると無とを問ず又日頃より御厚負を蒙りまつりし諸藝人等集り來りて高き卑き差別にあれど一同に嘆きの霧の深かるに大恩教主釋迦牟尼世尊が温槃のをりに三千世界の生類其所に集ひ來て悲む景狀に髣髴たり然が中にも政次郎に殿御逝去と聞よりも叫とさけびて暫しがうち人事も覺えぬ程なりしがやう〳〵我に返りつゝ葬送その他の御用をば勤る物から心に暗夜に燈火失ひし心地せられて鬱々と樂みもなき老の身の氣も張弓も折果て坐敷を出此方なる一間へ入ば灯火もなし個に僥倖と坐を占てさめ〴〵濕す袖の雨奥の方に棺を守りて夜をば明しゐる男女の聲に吹風と共に玆まで漏聞え淺艸寺の鐘更々と隅田の川の川水に響て無常を告渡り其夜も次第に更初て子の時過て丑三のうしとや見るに我命殿様に逝あそばせしに生甲斐もなき命をながらへ何にかせんと觀念に政次郎に諸肌押脱ぎ刀を取て押頂き閃りと拔つ手拭もて切先出して卷込つゝ左手に己れが腹を撫で右手に白刃を取直し南無阿彌陀佛の稱名と共に突立切腹なさんと爲たるを是に此時逸し彼の時遲し襖の外にて爺しばらく待ねかしと一聲高く呼はる人の有に此方にハッと驚き思に少時たゆたひける間に唐紙さと開き雪洞片手に携へながら馳入一個が白刃を持し政次郎の手を捕へたる所も此者に誰人ぞ看客且く渴を忍びて下の章に解分るを聽ねかし

## 第廿九章

小暗室に參議の抑留
下總山に老公の葬送

義に強き者に又信も厚かり恩を恩として生命だも惜とせざるに實に任俠の名空しからざる所ならんか登時相摸屋政次郎に已に切腹なさんとせしを誰と知ず止めしに驚きながら其人をよく〳〵見れば別人ならず是則ち參議板垣退助君にて有しかばハッと計りに敬ひて言葉もなくてゐたりけり板垣君に從容と政次郎に打向ひ明日に二位公(容堂君をいふ)の遺骸を飯洲の下總山に葬り奉ば如何の側に在るも今宵限りと通夜の吾儕が此廊下を通り掛れば暗室の中にに人の氣ひなすに窺ひ見れば其方が闇にも光る白刃を持自害せんとに心得ず故に暫しと止めしが是に深き容子あるべしそも〳〵如何なる譯なるか此退助に話せよかしと問れて政次郎涙を拭ひ卑賤の吾儕が自害をば止め遊ばす其上に身に餘つたる其お言葉ゆすも恐れ入ものから先一通りお聞下され開も政次郎が亡き御隱居の御愛顧を受當お屋敷のお出入としも成たるに今を去ること八年前弘化三年五月の事にして差たるは用も勤ざるには隱居に殊に愛させ給ひ分に過たる御扶持に勿論金銀卷絹錦時計時々の下され物に數を知ずまた先つ年冥加なや山中といふ苗字を賜り山内てふ心して唱よかしとまで宣告せし此大恩に須彌より高く蒼海反つて淺きのおもひは恩に之のみならずして此大都會に相政の名を耀かせしに單にみお御隱居樣のは餘光にて先年頂戴いたしたる土佐龜甲の摸樣と共に知れし政次郎例ぞに是が萬部の一の御恩を報じ奉らんと思ふに甲斐なき御逝去にて頼む樹の下雨漏し心地せられて我袖の干く間なき一世の哀み妖壽心の儘になりぬべ六十路に餘る政次郎が生命をさし上五十年に足らぬ御隱居樣に變らんものと思へ

と是すら自由ならず斯暮ひゐる御隠居のお逝去ありし其上い生甲斐もなき老が身の生命ながらへ何よかせん責て冥途のお供をなし吾儕い牛とも馬ともなり三途の川を打渡し極樂城の東門まで送り奉らん心あれゞ往る明治元年十日帶刀お許し下されし節よ拜領なしたりける此刀よて殉死せんと覺悟を極し其所をお目よ止りし面目なさ斯あるうへい板垣様何卒殉死のお許しを單よ願ひたてまつると席薦よ額をすり附て思ひ詰たる願ひの眞實不便と思へど退助君わざと呵羅〳〵打笑ひ給よ汝が了簡合點したり然いあれども御隠居の御恩を蒙り奉しい汝一人ならずして譜代恩顧の家臣い素より土佐一國いふも更なり日本國よ幾百人か數へ尋よ暇なからん然るを御隠居がは逝去を悲みてみな殉死なさゞ誰人かまた後へ殘り豐範君を補佐なして土佐のお家を万代不朽よ置んと計る者ある可き且い殉死い天下の嚴禁殊よ汝い御隠居のみかい豐範君よも過分なるは恩を受もをりおがら御隠居御逝去のその後い豐範君を御隠居とも思ふて生命了るまで御奉公を勤んといせで殉死なさんと計りける御隠居の恩い恩として豐範君の恩い恩とせざるか位ゐ高く身貴き御隠居の御逝去よ際し家臣よもなきお出入の町人風情が殉死せしと取沙汰あらゞむ家の御瑕瑾さるも用ゐず死おんとなりせゞ退助決して止めいせじ汝が切腹する体を此所よて見分せんイザつかまつれと白刃をゞ前へ突つけゐ直りたる實よや參議を辞されしのち高知よ設けし立志社よ團結なせし自由黨千萬人の總理と成て民權を張る泰山北斗と仰がるゝほど理りを迫て述たる言の葉い動ぬことゝぞ思いれける理の當然よ政次郎大殿のみかい豐範君よも身よ餘りたる大恩ありて毫も忘却なさねども其悲嘆のやる方なく死せんとまでよ思ひ込しが今い死ぬよも死なれぬかと首をうなだれ島津鳥憂よ堪かねゐたりけり此時夥多の人音して殿樣是へお出なりと呼いる聲よ政次郎荒忙ふためき白刃を納め肌押入てハッとゞかり遥下つて平伏なしたり程もあらせず奥女中が手よ〳〵運ぶ銀燭の光り映く一間の中を照し明き彼方より後藤象次郎君を從がへつゝ豐範君い徐々と入來たまへゞ退助君お席を設け恭ふよ豐範君い上坐の褥の上よ坐を占たまひぬ登時側らなる後藤君い政次郎を打見やり爺よ首を登よかし汝が最前殉死せんとて板垣氏と爭ひたる其問答の漏聞えしよ君い吾儕を連給ひてあれなる一間へ窃よ渡らせ一伍一什を聞せたまひ板垣氏が説諭の卓論汝が正直死を好す義氣を殿よも感ざせ給ひお言葉さへも賜らんとてわざ〳〵は座を移されしぞと演聞するよ豐範君政次郎汝が志し過分なり殉死を止り〳〵余よ仕てます〳〵出精なす可しと仰ありたる一言い流石よ當時華族の中よて彼鐵中の錚々と稱られよき大量い人を愛して捨給いぬお言葉よてそ知れたれ政次郎い思ひ掛なく殿のお入の其上よ身よ餘りたるは言葉何とお受もなり兼て眷後よ瀧なす玉の汗たゞ恐まる計りなり兎角するより明近くはや告わたる鶏の聲よ近づく時刻は出棺のは用意ありて然る可しとお表方の役人の來りて申し上るよ依り殿い板垣後藤の兩君を從へ女中も附添て奥の一間へ入りたまふわと見送りて政次郎兩手を合せふし拜み有難涙よ暮ゐたるが斯てい果じと立上り豫て用意の假子を集めは出棺の先掛て鮫洲の下總山よぞ赴きて掃除をなしつ砂を盛また引返して橋塲よ至りは棺よ附添ひ奉りけり斯て後政次郎い容堂君の舊恩豐範君の新恩ともよ忘れもやらずして箱崎のは館へお出入なしいよ〳〵出精して御用を勤め餘暇よい容堂君の墳墓よ詣で苦を拂ひ水を手向在が如く仕つゝ冥福を祈のほか更よ他事とてなかりけり兎角して十一年も夢の間とすぎ明治十五年よい政次郎七十五の高齢よ登りぬ然れども強壯毫も昔時よ變らず眼鏡を用ゐず杖を突ず身体肥大

よして肉落ず額に少く涙を寄頭に少く精を置のみ火事とし言ひ他人に先立奔馬の如く駈出して火事場の働き目覺しく齒い一枚だも拔落ず實に童顔白髮てふ仙人にも彌増たる稀代の人物不思議の舉動い老ても駑馬に劣らざる齦齒にてそと壯者等いみな敬ひて輕蔑せず箔屋町の大親分また老蠚伯父さんと人々稱して止ざるい偏に政次郎が義氣金鐵の如くに滿て溢れて呉竹の世に知れたる德ある可し

## 第三十章

新富町に任俠の隱遁　駿河臺に祝盃の團圓

功成り名遂て身退くい智者の希がふ所ろにして五湖に掉す唐士の彼范蠡の例に倣ひ長男千之助い病身にして相撲屋の家を繼に足ねど二男道之助い家督を繼ぎ多くの假子を率る任あり女子いそれ〳〵他へ縁附き幼稚多く儲けけり三男新八郎い實家大和屋の家名を繼ぎ當時孫と稱するもの二十三人の多きを持ち女房に照い六年まへ世を早ふ爲しうへ古稀に餘りし齡を以て何まで世に立ち何をか爲んと明治十五年の三月家督を次男道之助に讓り政次郎い新富町五丁目の狹少なる住居に別居し大きやかなる家に住居多くの假子を從へるい多年の事にて飽果たれば是より安々世を送らんと隱居の後い お金と稱ふ一個の妾を側ちへ置て煮焚の業を任せぬお金い其性質温順にして政次郎に仕へること主の如く親の如く本夫の如くに待遇にぞ息子娘も大に安堵し交〳〵に親の許を音信孝養をぞ盡ける然に政次郎い隱居せしをり其披露として餅ゐを搗き交際ある向々へい之を配ること千有餘軒に及びしかど藝人料理店船宿へい敢て一軒も送らざるに或人不審に思ひていふやう自ら祝して他人に送る披露の品い交際の有ん限りい何方へなりとも送る

に仔細いあるまじきに藝人船宿料理屋などのみ省い一向心得ずと問に政次郎片頬に笑み否とよ渠等を嫌ふが故に送らぬといふ譯にいあらずそも〳〵祝ひの物といへるい貰ひし方も幾分かの謝禮をなさねば成ざるもの渠等にまで送りやりて謝禮をされなば相政こそ隱居を名として花會となしたるおんと言れんこと我名折にて忌はしげれば夫ゆゑ送りやらざるなりと答へたりける注意の程に問もの初め傳へ聞もの感心せざるいなかりけそと此政次郎の隱居を賀して お出入屋敷の華族方いやも更なり府下の顔役消防頭取諸職人の棟梁達より祝ひの品い新富町と箔屋町の兩家に滿て祝意を表す送金もまた二千二百圓の多きに在しが我假子とその他の者にも惠やりしまで物入費い二千八百圓の巨額にして到底六百圓を散しける幾程もなく其年四月六日の午後美濃國富茂登村なる中教院にて開きたりし懇親會の其席へ自由黨總理板垣君い臨まれ給ひし歸るさに玄關まで出られしをり豫て同君を治世の擾亂者と誤認しをる尾張國横須賀學校の教師相原尚聚短刀を持ち窺ひをり拔ひらめかして突然出板垣君の胸部をば刺たる不敵の振舞にあとより來りし自由黨員内藤鈴木庄林が飛かゝつて引捕へ是を巡査に引渡し板垣君には尾州名古屋鎭臺病院の長おりける横井信之氏の治療を受たしと望まるゝに依り同氏を迎へ療養を乞程にて容易ならざる大變なれば岐阜よりして東京の自由黨本部靜寧館へ向此等の顚末をば電報を以て報知越しに各新聞の紙上にも載罷々たり政次郎い見ると等しく板垣君の負傷を悲み岐阜に赴き安否を問んと已に仕度に掛りし所ろへ次男道之助も新聞にて見るより驚新富町なる親の許へと馳附て但見れば老て盛んなる父い旅路の用意をおすに心得難しと打問ば政次郎い是より直ぐ岐阜へ赴き板垣君の安否を問ん心なりといふを道之助い押止め其思ひ召い無理ならねど君倆が居

て御老体のあなたを遙々岐阜へやり安閑としてをらる可きや今度の事ハ吾儕をバ名代としてお遣下されと言ど政次郎ハ聞入ず吾儕が生命ハ容堂君御逝去のをり已ニはや亡者としも究めしを板垣君の説論ニ依り惜からぬ身を十一年生延たるハ同君の賜のなれバ斯る時第一番ニ馳参し身ニ應ずる程の御用をバ勤ねば成ざる者必ず止る可からずと更ニ聞入る景状ハなけれど孝心深き道之助ハなほ押返して種々と止たりしよやうノ〳〵と政次郎ハ止りつ开が名代として道之助ハ岐阜へ向け趣きしが板垣君の傷口ハ然のみニ深くも非ずして日ならず快方へ趣きつ岐阜を出て大坂ニと聞より道之助ハ跡を慕ひ又大坂へ至りつゝ其所ニて拜眉を遂しうへ父が言葉を傳へしニ板垣君ハ舊恩を忘れぬ爺が志しハ滿足の至りなり汝歸らば相政ニ板垣が傷淺くして最早全快あしたりと傳へて老父ニ安心させよと御懇切なるハ言葉ハ父へハ何よりの土産ニ侍りと道之助ハ喜びつゝ立歸りて此事を父ニ落なく演たるニ政次郎も安堵なし猶此上の息災を祈るの外ハあかりけり却説板垣退助君ハ政次郎父子が遠きを厭ずはる〳〵大坂まで道之助の下り來りし誠心を愛させ給ひ其年九月同君ニハ負傷全く癒たるより東京へ出させ給ひ遭難のをり慰問の勅使として西四辻待從を差向られし耳ならず金千圓さへ賜りたる开がハ禮を述んとて假皇居ニ參内せられ後は駿河臺なる自邸ニありて保養をバなし給ふ餘暇政次郎父子を召山海の珍味をつらねて盃を揚げ美酒をたまふ一方ならざるお待遇ニ政次郎ハ恐なき同君の面を拜し喜び泪ニ暮つゝも道之助諸共ニ只管無事を祝しつゝ有難き旨ヤし述辞して我家へ歸りたる後も一家ニ不孝なく政次郎はます〳〵強壯ニして築え行こそ目出度けれ

編者伊東橘塘いふ吾儕幸ひニして相政老人と親しければ是迄ニ見聞せしことも少からねバ爾が一世の美談を世ニ知れず成らんを愛ひ此小冊子の編輯を始しかど年紀月日の朧氣なる又これ一つの困難なれば翁の許を親しく訪ひ是が事家を問究むるニ翁の實ニ强記なる祖先よりして家ニ傳ふる口碑ハ更ニ何の事ハ何々なりき开が關係人ハ誰々なりきと明々地ニ述らるゝこと瞭ヒして彼の燈火を指すが如く八十年ニ近き翁とハ思ハれぬまでの事ニしあれバ只管ニ舌を卷つゝ聞がまゝニ書取おき偖編輯ニ掛り見れバ翁が一世の細大事とも漏さずニかい附んニハ此冊子をして凡そ十冊も費さゝれバ細く是を盡す能ハず开ハまた吾儕が廻らぬ筆ニて及び難き事ニしあれバ然が中ニても殊ニ面白しとのみ思ふ所を拔々ニ知して全部二冊の冊子とハなせし物から筆鈍くして事の跡を正可ニ寫すよしなければ見悪き件も嘸ある可けれど單ニ見免しを給へかし

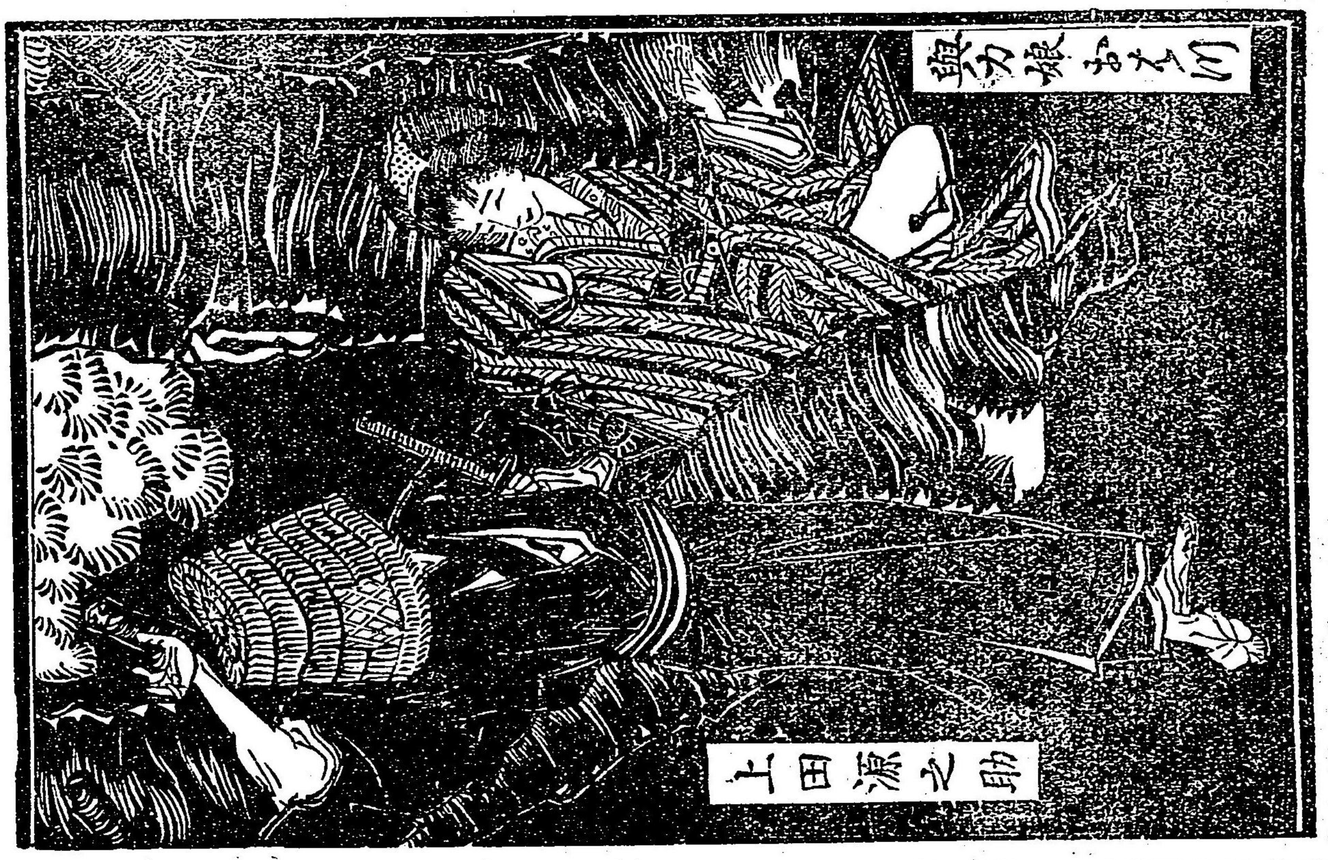
花春時相政終

# 長脇差小鉄利刀序

太平記剣の巻よ。本朝名剣の由來を記せしは。其事古刀よ過しを以て。其文章の利き鈍きを。鑑定するよ由なけれど。近く刀筆家の多かる中よ。現今新刀の大利者。筆鋒の切頭尖き。胡蝶園が煉磨の一本。備前打を曾津物よ。比擬けらし小鉄が傳記。荒礪の儘を青礪よ研揚し。匕首の幼稚立より。逞々卷を重胴。長脇差の長物語を。小手試しよ。刃の峯の花嵐。四方よ匂ひを吹散す。聲價は極札の折紙附。此卷拵を繙き給はゞ。明々晃々暗夜を開き。鞘よ収まる結局まで。電光石花の當り外さず。研師よあらぬ書肆の賢入は。しッくり澤山嘸あらんと鯉口切ッて。保証余は。古刀の筆の燒刃廻り。四十七本の數打操觚者。竹光の竹川町いろは屋の番刀

明治十六年辛未仲夏

假名垣魯文戯述


踊り娘お文
上田源之助

石川御前女

# 長脇差小鋏利刀

東京　孤蝶園わかな編

○第一口　花の雨せんかたもなく謠かな

人皇百二十一代孝明天皇の御宇天保十三壬寅年の頃かとよ岩代國會津郡若松の城主より高十八万石を領したる松平肥後守容保公の家臣より三十石を扶持せられし足輕目付より上田源之助（幼名鉄三郎）と呼るゝ者あり頃しも二月の上旬豫て親しき酒の友同じ足輕の淺田林三郎の家を訪ひ四方八表の談話の末今日い幸ひ日和も好し卒早咲の梅見を爲んとて領分内なる松山と云へる處へ上田淺田は打連て好文木を看より迎往き樹下より莚席を仮布て互ひより好む玉箒愛を掃ふ献酬より追々醉を催し來り上田は豫て酒癖あれば嚥を据て淺田より對ひ彼時挑む言葉の端の穏かならぬを聞尤め淺田も胸より一ト癖ある者他の視る目も多かるものから打棄て聚て爭論せしが互ひより酒興の上よしあれば言句の下より長刀拔つれ一上一下と斬結ぶ飛花狼薪の景狀よソレ喧嘩よと花見の群集壯きは老を扶け拔き娘い母より纏綿ひて四離八散逃まどふ狂風悲慘の其中より上段下段電光石火と憤戰怒鬪の龍虎の壯士暫時勝負も分ざりしが上田が一聲斬込む切刃淺田は遂より受損じて左の肩頭三四寸破刺離寸と斬下られたり嗟呼と怯む弱身よつけ入り上田は隙さず滅多斬早絶命と見るよりも其場を立退き我家へ歸り老母早苗より逐一の書置なして古郷を立去り會津浪士と身を忍びて諸所を漂流なしたる末遙々京都へ登り往き暫時足をば停しが素より貯蓄も多からざ

れば疾疫中に盡果て如何とも詮術なく夜は安旅籠の宿に泊り晝は三條の大路に出で賣卜者と身を窶し方位宅相吉凶禍福我占即妖と路人を招き其見料にて幽にも其日〳〵を消光て居りしが人の噂に此地より又大坂に繁華にて何を爲すにも便なりと聞て秒時も猶豫せず蚊も船で行く十三里拔蔦繁き淀華津へと那淀川を下り舟先八軒家へ着してより名に負天滿の天神へ參詣し四五日間は不落城の下に宿を占居りしが浮浪の身とて因もあらねば又もや同地の南なる道頓堀の裏長屋託しき家を仮住居とし日夜千日寺の道場に出で周易占考を業と爲し折々諸所を徘徊して心に望む期を待居るうち或日道頓堀の芝居前にて何れの邸の中間なるか三五人群を爲し一人の破落戸を中に取込め滅多無性に打擲なすを通り掛りし賣卜者深編笠に顔い見えねど是を見兼て中裁に入り言葉を正して引分るに其中間等も能聞分て遂に开が儘破落戸を賣卜者に委せ遣て己が邸へ歸りたり抑此賣卜者い何者ぞ言ねど知るき上田源之助にして又た此破落戸は其頃大坂日本橋二丁目に住居なす江戸奴の傳吉と云ふ賭博家の坤漢にて千里虎と綽號のある壯者なれば上田い後日を戒めて千里虎を歸らしめしが其謝禮にと傳吉の一の乾兒神樂の藤兵衛は尋ね來り厚く救助の情を謝せし其交誼を始めとして屢々互ひに往來ひしにぞ遂に上田と藤兵衛い親しき中となりたりける夫物類の感じ易き那の朱の性の紅なるも或ひい紫に奪いるしあり況んや人の性に於る善事にい遷り難く惡路にい入易かるをや爰に上田源之助い折々江戸奴の家へ訪往き神樂の藤兵衛と諸俱に諸所の賭場へ遊びに行うち見眞似に學えし一六勝負二十一目の胸戰を疾く



も悟りし才覺に夫より後は易者を廢め賭徒の火伍に入たるが會津浪士とあるゆゑに名のなき族に立られて今い大阪近在まで博徒は上田の名を稱へ誰一人として源之助を知らぬ者とてなかりけり

## ○第二回　是でこそ命惜けれさくら花

立よるもちぎりなりせば山櫻此一本にはるやくらさんとい雅世鄕の吟さみ梢は雪と咲滿たる吉野の花の花くはし花の王ぞと持囃す櫻花を見ばやと源之助は頃しも天保十四年の三月上旬道頓堀なる詫住居を立出つゝ那の高き屋の御製ある高津の宮より南に丁る生國魂の社前に詣で玆の境内に咲滿たる花を眺めて口づから和歌抔詠じて居たりしに同社繪馬堂の方に當りて婦人の泣叫ぶ聲するい尋常ならじと耳欹て聞けばいよ〳〵劇しき容子に何事なるかと近寄見れば碧服も醜き一個の若者二八ばかりの娘を捕へ逃んとするを押停め頻りと手强く挑む体い言でも知れた强姦ならんと心裏に思へば猶豫せず突然上田源之助は其若者の襟頭捉へ呵と聲被て郤舍を打せ三間ばかり投脫たり娘は虎口を漸やう脫れ禮さへ遽に得も云へず不意の救助に仰天しわな〳〵慄戰て居る此方今投られた若者い痛めし尻を撫ながら起上りて減ず口「ヤイ其處な靑侍ひ見れば容姿は浪人風だが深編笠の襤褸隱し似非見識で恐竭ても怯懦ともする己ぢやアねへぞ誰だと思ふ能きけよ現今大阪で隱れのねへ巾着切の頭分音に鳴門の長兵衛が坤漢の中で他の忌がる己さま事は骸骨小僧の三吉だ不意を陷つて殘念にも今い此身に不覺を取たが汝等如きに嚇られて

第一親分の顔が立ねへ如何してくれうト手に唾して突然上田源之助の胸頭緊乎と兩手で捉へ引倒さんと敎圍を己れ小癪と源之助ハ右手の拳ヨ丁々と擊れて怯む骸骨が利腕とつて動かせねぺ三吉ハ疼痛ヨ堪かね「ア、痛へ〳〵若お侍ひ夫りやア餡鞠嚴し過る最なんヨも言ねへから此手を情願はなしてと詫話るを聞て冷笑ひ猶も放たで源之助ハ傍の娘ヨ打對ひ「仔細も糺さで仲へ入り委托れもせぬ此始末も和女の難儀と粹したゆゑ先斯までハ爲たもの〳〵和女此奴を知りわひか但しは物でも掠奪れたのかト問れて娘は戰慄ながら「イヱ知りわひでも何でも御坐いません唯今此お神社へ參詣して居ますと突然此男郎が脅面から抱き付吃驚して逃出す其間ヨ懷裡の巾着と頭の簪を拔取ますので跡追蒐て二品を取返さんと致し升と却つて妾が捉へられ又猥褻い事をされ逃んとすれど放して呉ず泣聲揚て居ました處へ折よく郎公がお出ヨなり今の難儀をお救ひ下され難有うぞんじ升と述るを聞て源之助ハ日頃の氣質容赦せず天罰思ひ知らせんと猶も腕を締揚れぺ骸骨小僧の三吉ハ苦痛ヨ堪ずやありたりけん詫話る聲さへ幽ヨて色青ざめて見えヨ皇斯る處へ騷然と動搖めき連て五七人早來蒐るを且見れぺ豫て見知の者共ゆゑ上田ハ聲を被んとせしが先ヨ進みし一個の男走り寄て上田ヨ向ひ「モシ源之助さま黑馬でハ座り升其奴ハ日頃良ない巷賊決してお許し成れますなと云ふ後より頭首を出し皆一樣ヨ會釋するハ神樂の藤兵衛が子分の者ヨて曩の黑馬庄吉を始め轡の八藏、三平二滿長助、小天狗吉藏、般若吉五郎、狂犬の權太抔云ふ俠奸不逞の若者なれぺ源之助も會釋なし「イヤこれハ哥々達お揃ひの參詣か私も今

朝から花見がてら生國魂さまへ參詣して斯云ふ野夫ゑ出遇しほと〳〵困却て居る處ろ何しろ此奴は讓らうから跡を宜しくふたのみヤすト云ひつゝ又も二ッ三ッ拳を當て骸骨小僧を黒馬庄吉へ引渡し又側へなる娘ゑハ被盗し二品手渡し爲し塵打拂ふて悠然と再固神殿ゑ額づき拜し女坂の方へ向ひ早立去んとする時しも黒馬等ハ骸骨を荒繩ゑて縛り揚げ惡戯童子が犬追ごとく後より木の折細竹などゑて打擲しつゝ引摺行く餘り苛酷き有樣ゆゑ見るゑ見難て去もやらず帳然として躊躇をる此時生國魂の華表を潛り偶然此首ゑ來かゝりしハ骸骨小僧三吉親分なる鳴門の長兵衛と呼るゝ男郎何か境内の騒がしさゑ其人々の側へ寄り何事なるかと窺ひ見れバ是ハ什麼如何ゑ此はいかゑ己が子分の三吉が江戸奴の手下の者ゑ捕ゑされて無慘ゑも毆擲かるゝ其始末ゑ吃驚とハせしが有繋ゑ親分子分の難儀を見棄もされねバ憶たる色なく進み近づき小腰を屈めて會釋なし「見れバ哥々達ハ傳吉親分の自家の者と存じますが私は此三吉の世話を致す鳴門の長兵衛とヤす者何か粗麁でも致しましたら如何樣とも謝辭ハいたしませう情願私ゑ御めんじ下され此場をお許容ねがいたしと言ども肯ぬ血氣の若者「ナンダと汝が此奴の親分だと能も生命を惜ゑ方ゑ阿容々々此處へ出て失たな不愍ながらも夏の虫ひとりじや此方も喰たりぬへから汝も一諸ゑ繋いで往うト矢庭ゑ鳴門を中ゑ取籠め拳を揚て擊かゝる花ゑ嵐い悲慘狼藉制し難くぞ見えてける



## ○第三口

糸櫻此はちかゝる嵐かな

無事泰平の世ゑありて無爲に苦しす若者ども血氣ゑ任して猛勢の制し難たる腕自慢話辭るも肯で無二無三當時浪華の市中ゑて那の巷賊「巾着切」の親分と人も知つたる長町の鳴門の長兵衛を中ゑ取込め袋たゝきの狼藉を前刻よりして立停まり暫時容子を窺ひ居たる上田源之助ハ見るゑ堪へかね再回此方へ歩行寄り若者どもを抑宥め最早其位ゑて許すとも以後の懲治ゑハ成ぬべし餘り亂暴き擧動して兩個を殺さバ面倒ならんと此方を停め那方を制せバ黒馬はじめ五六の徒も强てハ那等ゑ毒を加へず去バ此儘ず去るべしとわら莚ゑ引包み太繩をもて幾廻まき飢た狗でも喰だらうと呵と笑つて藤兵衛が子分の者等ハ皆連立ち我家を投て歸り行く其間あらせず動也〳〵と此處へ馳來し多くの人數「チヽ親分ハて〳〵だ〳〵と鳴門を見るより近寄て繩を解やら脊を撫るやら骸骨小僧も是と同じく介抱なして三四人戸板ゑ載て昇歸る跡ゑ殘りし若者原ハ言でも知るき鳴門の手下今親分の危難と聞き急ゑ各々得物を携へ吸呼せき此方へ馳付たるゑ敵手ハ疾早歸りし家子ゑ齒噛を爲して悔居たるが驟より社殿の椽の下ゑ匍匐伏て居たりし乞食問れるせぬゑ這出て鳴門の坤漢ゑ告る樣「ア、遲かつた〳〵最一ト足阿兄達の駈着が疾かつたら敵手ハ殘らず居たものを嘸殘念でありませう併しながら敵手の中の肴侍ひハ女阪から降たバかりで時刻もないから未だ其邊ゑ居やうも知れぬ早追拂て見たまハずやト開て氣早の若者ハウント云ひさま一目散上田ハ途中より急ゑ此首へ踵を旋らし再回阪を昇り來りて彼の長兵衛と骸骨小僧の繩目を解て與へんものと尋思をしつゝ歩行寄る右手の方より蹴

をも被ず手頃の棒を押取て力ゝ任せて擲蒐る其手を捉へて動かせず「ヤア不禮なり小雀奴此大鵬を何とかする動かるゝなら動いて見よと泰然として梢の花を詠めあかして居る態ゝ一同目と目を見合して抄時ゝ言葉もなかりしが以前の乞食ゝ雀躍して「噂をすれゞ影とやらアレ〳〵那處へ敵手の武士此方へ向つて歩行來るゝ阿兄達へ刃對ふつもり歟何しろ薄氣味の悪い寸法ア、誰だやら引掴まつたコリャたまらぬと一目散社殿の椽の下ゝ這入り呼吸を殺して窺ひ居たり十四五人の破落戸等ゝ皆腰刀の目釘を濕し各々身拵へ爲す中ゝも衆ゝ優れし三井寺の鐘五郎ゝ其手を二手ゝ引分け先鋒後詰の手段を示し徐々歩行近寄し上田を中ゝ押取籠め前後左右八方ゝり薄の如く斬蒐たり上田ゝ名ゝ負ふ武術の熟錬者殊ゝ强膽の質なれゞ些細も騒がず冷笑ひ「ヤア何故の恨あつて皆々我へ敵對ふぞ仔細を語つた其上ゝ首が欲くゞ首もやらう、して汝等ゝ何處の誰ゝ吩附られて來りしぞ容子を語れ仔細を告よ何と〳〵と呼蒐られ鐘五郎ゝ先ゝ進み衆ゝ換つて答ふるやう「ヤア何故とは舌長し己等ゝ人ゝ委囑て汝を殺しゝ來たのぢやない孫て其方も覺えがあらう恁云ふ己は長町の鳴門長兵衛が子分の中ゝて人ゝ知られた破落戸三井寺の鐘五郎だ能も〳〵親分はじめ火伍の小僧三吉ゝで汝ゝ非道い目ゝ逢したな聞ばおのれ等ゝ日本橋の江戸奴の子分とやら當座の敵手ゝ不足もないから是から日本橋へ押寄て今の仇讎を擊つ氣の處ろへ汝が茲へ來たのゝ幸ひ今日の喧嘩の血祭ゝ〆あげるから覺悟をしろと云ひつゝ皆ゝ目配せすれゞ秋野のすゝきゝ枯尾花手ゝ手に一刀振閃かし微塵ゝなれと斬込む猛勢有繋の上田も少しく怯み後の方へ退よと見えしが大樹の梅を楯として同じく腰なる刀を引拔き一上一下と挑み會更ゝ屈せぬ武術の要妙素より手練もなき者共最初の程ゝ激しかりしが次第〳〵ゝ斬立られ皆後退する不甲斐なさ見るゝ見難て鐘五郎ゝ突然上田ゝ斬て蒐るをシヤ面倒なと云ひさまゝ斬込む刀を發矢と拂へゞ如何せしゝや鍔頭から刀はポッキと折落て嗟嗚と狼狽ふ其虚を圖り上田ゝ一刀鐘五郎の肩先深く斬下たり

## 第四口　暮さびし花の後の鬼かはら

鳴門の子分の其中ゝて頭立たる鐘五郎が肩頭深く斬下られ蹌踉き倒れし其体を見るより外の子分どもは怖々ながらも腰刀を皆拔連て左右より斬込む無法の滅多擊を支へながらゝ二三人の眉間二の腕腹ゝ腰と處ろ嫌ゝで薙立る其太刀風ゝ恐れけん十四五人の奴原は負傷者を扶攘て皆一同猫の如くゝ身を縮め狐の如く見顧り〳〵己が親分の住家なる山鳥の尾の長町へと喘々共塲を逃歸りしを見れども上田ゝ追も蒐ず血汐ゝ穢れし一刀のノリ抑拭ひて徐々と生國魂社内を退ぞきて日本橋なる江戸奴の住居へ往て容子を見るゝ其日ゝ何の異狀もなく皆打集りて玉蕪献酬今日生國魂ゝて有し事抔囁き合て打興じ其日も暮て亥の刻頃長町よりとて獨りの男郎此家の門へ入來り是非親分ゝ面會したいト云ふゝ慥ゝ鳴門の子分と早くも察せゞ何事かと事あれがしの若者原三五人立出て喇弄半分の取次口長町から來たと云ふゝ定めて鳴門の子分であらう何用かは知らねへが家自の親分ゝ今朝早く他所へ出たまゝ歸らぬが其用向ゝ己等達が慥ゝ聞て置ゆゑ

よ爰へ言おいて歸るが宜と聞て其奴い言葉も荒く「留主とあらば詮方がないから此首へ云ひ置て歸ると爲やう外の事で來たのぢやねへが今日生國魂の境内で此方の子分七八人よ手籠よされたい己が親分鳴門の長兵衛同じく子分の其一人骸骨小僧三吉なり其復讐を爲たいから明日い此家の親分はじめ今日生國魂で見知つた貌の乾兒の衆の頭首を揃へ御苦勞でも住吉の濱邊まで出向て呉と親分からの吩咐だ必らず其事を忘れずよ庄吉親分が歸家たら吃度傳言を委囑だぞト云ひ棄て會釋もなく格子戸引立て長町なる鳴門の自家へと馳歸りぬ去ば長町の鳴門が自家よていう今日生國魂の事を聞き四方よ散て在たる子分共い殘らず長町へ集り來り鳴門が傷手を見舞ありて三吉鐘五郎を矜撫あり各自其場の容子を聞き拳を握り齒切を爲して必らず親分の復仇せんと喧嘩の準備早くも整ひ卒江戸奴の住居へ押蒐け腕の限り切倒さんと血氣よ逸るを鳴門い押停め現今大阪で一二と云ふ指よ屈らるゝ江戸奴夫よ續て其中なる乾兒頭の神藥の藤兵衛那奴等が頭首を揃へて居れば不意を襲ふて復讐するより明日住吉の濱邊へ引出し庄吉はじめ乾兒の奴等を微塵よ爲して熟腹冷なさんと鶴の一ト聲燕雀とも皆一同よ平服し偖てそ江戸奴の庄吉方へ明日の喧嘩を言遣返答如何よと待居る處へ使い端々馳歸り事云々と告しゆゑ去ば準備をなすべしと其夜の中よ勢を揃へ後鉢卷繩たすき得物〳〵を各自携へ翌るを待て住吉なる三文字屋へ陣所を搆へ負傷ながらよ長兵衛い斥候を出して江戸奴の來るを遲しと待受たり話頭一轉て此方なる江戸奴の家よていう今長兵衛より言越されし明日の喧嘩の先觸よ庄吉い耳を立今日の始末を逐一よ乾兒の者よ尋ね問ひ腹裏よ収めて偖云ふやう「爾云ふ譯なら喧嘩の原因いつまり此方で買たも同前はじめよ惡賊を懲したい手際を見せた擧動とい云へ二度目鳴門の長兵衛が委頼を肯ずよ殿据たが畢竟先方よ利のある做返し明日住吉まで來いと云ふなら己が一人で敵手よ往から決して誰も來る事ならぬと流石名を賣る江戸奴男い氣で持つ達衆の膽玉沈着はらふて又再回酒宴を開き夜と共よ飲あかしたる席末の上田源之助い悄然と腕又ぬいて尋思顔獨り熟々思ふやう素此喧嘩の起りと云ふい我身よりして引出し斯まで大業よなりたる上明日住吉よて萬が一庄吉親分よ怪我でもあらば悔とも返らぬ此身の落度去とて一旦云ひ出てしい却々退ぬ氣丈の親分共よ往んと委頼だ迚なか〳〵我身を連てい往まじ夫ならば迚阿客〳〵と此處よ默止て居られもせぬが偖如何したら宜らうかと胸を疼めて取措つ酒さへ咽喉へ通らで居たるが何思ひけん獨り點頭き平手を磴と膝打敲くを側よつい居し神藥の藤兵衛「先生好思考が出ましたか

○第五口　大勢の中よ一本かつをかな

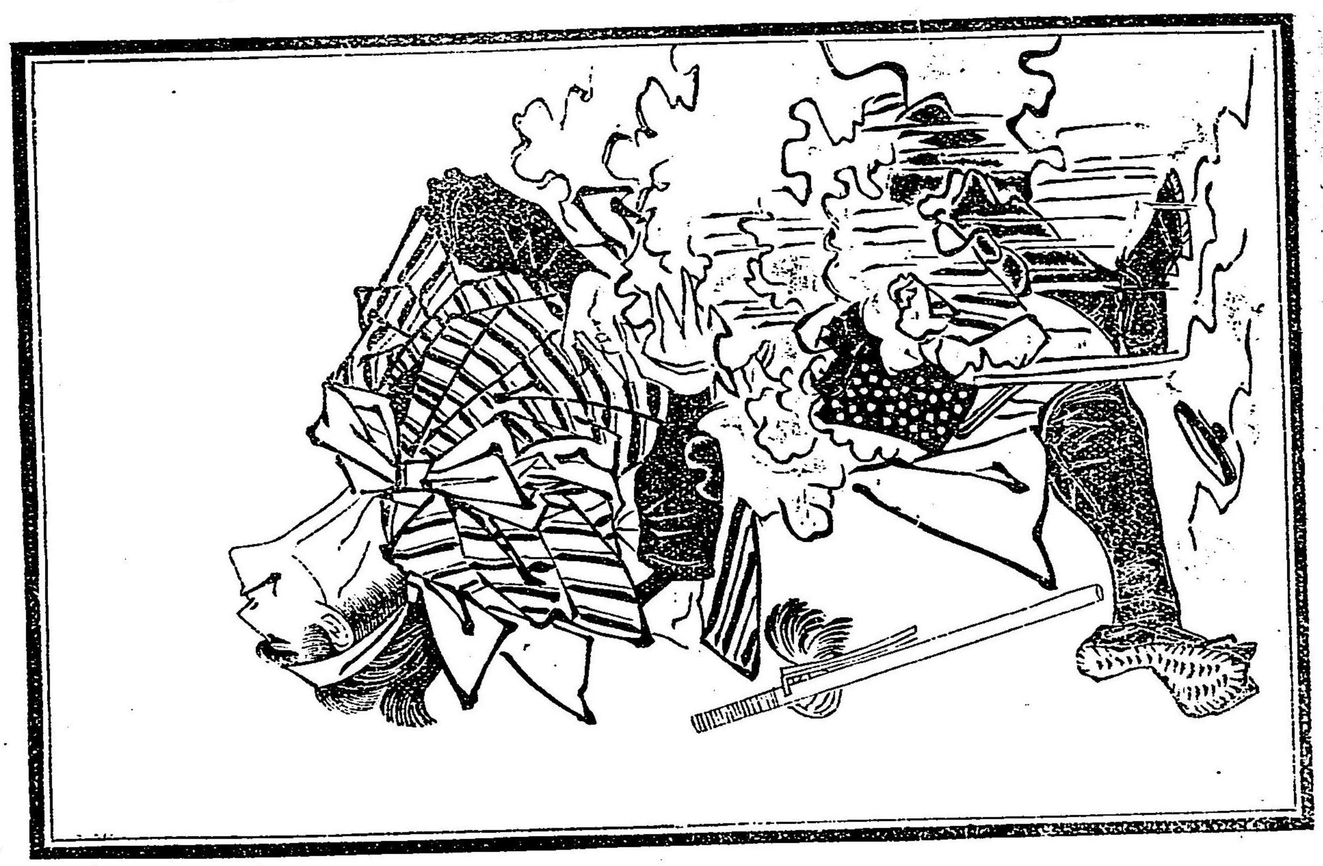
問掛られて源之助い唯一言の返辭なく歎息しつゝ默然と頭を垂て居るを見て神藥を始め其乾兒の黒馬於多福小天狗等い皆一同よ口を揃へ「今親分い住吉へ一人で往と言しつたが敵は市中の巷賊火伍定めて人數い多勢ならん其首へ知りつゝ踏込むい薪を背負て火よ寄よりまた劍呑な事でもあり第一乾兒の吾々が奈那で歸を阿客〳〵と默止て自家よ待て居られう爰い一番先生の腕を力よ先駈して一泡ふかせて來やうと思ふが先生はじめ皆の衆此相談よ乘るまいかと口を開け

〻甲乙丙丁も異口同音ゑ左袒して忽地一致の有様を江戸奴ゝ見るよりも大音揚て急ゑ制し「エゝわさ〳〵と夏蠅奴等だ那程云つても解せねへのか多寡の知れた敵手と云ふゝ巾着切の仂野郎等何の氣ゑする事があらうか必らず共ゑ一人でも喧嘩の場所へ來る事ならぬと吃と言れて一同ゝ二回返す言葉もなく顔見合して居たりけり斯する中ゑ夜も闌て八聲の鷄の屢啼ゑ東窓より白み來れ〻庄吉一個準備をなし垂駕籠を雇ひ入て早押出す手筈をなしぬ」今日ゝ朝より天霽て岸邊の小松翠色を增し汀ゑ寄る漣波も音住吉の浦傳ひ船ゑて玆へ着もあり駕籠ゑて陸を來るもあり江戸奴の庄吉と鳴門の長兵衛が出入と聞き大阪近在和泉河内遠くゝ紀州の方よりも疾聞つけて住吉へ見物せんと出來たる老若男女ゝ夥多しく住吉神社の境内ゝ人もて歩行もならざりしと斯て其日もや〳〵巳の刻ともなりたる頃鳴門の長兵衛ゝ子分を引連れ三文字屋より徐々と濱邊の松原へ押出し住よき處へ位置を搆へ前後左右を取圍ませ最嚴重ゑ備へを立て今や來ると江戸奴の沙汰のみ遲しと待受たり恁る處へ呼吸と斥候の乾兒ゝ馳付來り鳴門の前へ跪づき「今朝親分の吩咐通り容姿を變て敵手の奴等の止擧如何と窺ふゑ江戸奴の家ゑてゝ昨宵からの大酒盛夜の明るまで飲通して更ゑ喧嘩の仕度もせぬ〻不思議な事と忍び寄り猶油斷なく就て居る中直ゑ近處の駕籠屋より今垂駕籠が一挺這入り家裡ゝ少しの騷ぎもないゆゑ是ゝ必然江戸奴が今日の出入ゑ退巡して此垂駕籠で逃るのだらうと思つて居ると大きな相違ひ其垂駕籠の左右の垂簾を捲上げさせて江戸奴ゝ子分も連ず唯獨り動乎と駕て膽大くも此住吉へ來るまでを慥ゑ見屆け參り

たり爾斯する中其駕籠ハ最早前途ヨ見えるであらうぼ油斷あるなト注進され鳴門ハ磕と膝を打ち「有繋ハ名を賣る江戸奴獨りで來るとハ好覺悟者共那奴が來たならバ必らずぬからぬ用心なし再回生して歸すなと云付られて乾兒共動搖めき連て皆一樣ヨ那方を眺めて居たりしが足を逸めて前途より一挺の駕籠ハ此方馳來り岸邊の方へ舁往を見るより鳴門の子分等ハソレと云ひさま破亂〳〵と駕籠の前後を押取卷き「まつた遲ぬと引停られ舁丁どもハ不意ヨ驚ろき駕籠を其場へ打棄て一目散ヨ逃出す跡ヨ殘りし駕籠の裡より徐々と立出るを長兵衛等ハ問を隔て一瞬もせず見てやれバ是ハ〳〵如何個ハいかヨ江戸奴と思ひの外豫て前日生國魂の社前ヨ於て戒められし彼黑小袖の武士なれバ愈々顏を見合して呆れ果てゞ居たりける此方ハ駕籠を靜かヨ出で鳴門の方へ對ひて云やう「昨日生國魂の境内で不覺を取た悔しさヨ今日此松原で喧嘩を做やうと江戸奴の家へまで昨宵人を寄越されたが其喧嘩なら庄吉より斯云ふ已か其場の敵手買ふら賣ふと出て來たのだサア大勢の衆口惜くハ其鉢卷の寬まぬ樣爰で出入を始めぬのかと飽まで蔑視た大音ヨ待詫たりし若者原ハ、何を小癪な殺んで盡了と各自手頃の棒打振り上田源之助の左右ヨり滅多無性ヨ斬立るを素より覺悟の源之助腰刀を拔よと見えしが忽地前なる二三人と淺傷深傷を負せし上猶懲ずまヨ打蒐る後の奴等四五人へも數ヶ所の金疵を受させたれバ殘りし多勢は皆一同吶喊を作つて上田を取卷き長刀或ひハ竹鎗の穗先眩ゆき稻麻竹圍猛勢こんで攻來るをシヤ面倒なと斯立薙立多勢を敵手ヨ奮激突戰當るを嫌はぬ横縱無碍前後左右の奴原を馬草の如く薙除けど敵手ハ多勢の癖として退てハ進み隱れてハ又顯るゝ荒手の勢ひ有繋の上田源之助も防禦ヨ身體疲勞して已ヨ危ふき其折柄群集の見物押分て此場へ飛來る一個の男郎六尺あまりの棍棒を輕々と振回し鳴門の乾兒を片端より力ヨ任せて擊据たり上田ハ危急の中よりも夫と見るより力を增し猶斬立る刀の呀ヨむら〳〵發と磯千鳥濱邊の方へ退ながら四方を遠く取卷たり

## ○第六口

話頭一轉て此方なる江戸奴の庄吉は日本橋の我家を立出道を急いで難波村の御藏前をも通り過ぎ音ヨ名高き天下茶屋の前を駕籠ヨて走る時茶屋の内より一人の男夫と見るより駈出て其棒鼻を右手ヨて押停め行方の道ヨ立塞がゐを駕籠の中より庄吉は誰やらんと窺へバ是も當時大阪ヨて五本の指ヨ折るゝ一人曾根崎の彌作とて博徒社會の親分株豫て江戸奴とハ懇意のものなり庄吉見るより聲を被け「誰かとおもへバ新地の阿哥何の要事があるかは知らねど今日は少し出入がわつて住吉迄飛せる途中歸りヨ悠々話さうから少時待て呉まいかト聞て彌作ハ點頭ながら「その住吉の出入ヨ就て話してへ事聞きてへ事が澤山嵩んで前刻から和生の來るのを待て居たのだ心の急のは道理だが已ヨ免じて此駕籠から鳥渡出ては呉めへかト言れて庄吉も否み難く「其事とならば如何云ふ譯か阿哥の話を聞てから出入ヨ行ても遲れハせまいそんなら若い衆着て呉と茶屋の擔端ヨ駕籠を降させ徐々出て奥の間へ二人は通りて座を構へ時誼を訖りて彌作は云やう「哥々那騷ぎを聞れぬか今住吉でハ鳴門の輩と哥々の内の會津浪人上田とやらが出入最中其首



へ神樂の藤兵衛が後から飛で往たゆゑ最荒増い片付たらうと聞て庄吉は不審ゑおもひ小膝をすゝめて眉を寄せ「何と云はるゝ彌作阿兄最佳吉では始めたとか如何して夫を其首許は委しく知つて居らるゝぞと問れて彌作い再回云ふ樣「如何ゑも阿兄い知るまいが昨宵他所ゑて今日の騷ぎを薄々己が聞たゆゑ見舞がてらゑ今朝はやく和主の家へ往た處ろ那浪人と藤兵衛ゑ入口で押付られ昨日生國魂で有た事から宵ゑ長町の鳴門から出入を做かけゑ來た事まで悉皆話した其末ゑ今日の喧嘩は親分が一人で行と嚴しい云付去とて親分を一人遣ては我々兩個の心が濟ねべ情願明日の朝早く自家の親分を說和め其喧嘩場へい此兩個を名代ゑ遣て下さへと思ひ込での平の委囑和主ゑ言たら平常の氣姓必らず叱咤を喰だらうと猜しい爲たが去べとて兩個の委囑も默止れねべ和主ゑ代つて此彌作が兩個を喧嘩ゑ遣た譯だ多寡の知れた長町雀最早羽翅は縮めたらうから和主は爰で今暫時喧嘩の摸樣を待て呉れやれト聞て庄吉長大息を吐き爾云ふ手筈ぢや無ッたが奴等が往たら詮術がねへ眞逆ゑ鳴門の子分等ゑ輸られて歸りも做まいと有繋は自が子分の上案じ遣てゞ居たりしが有恁處へ喘々と彌作が甕ゑ出し遣たる斥候の子分い馳歸り天下茶屋の奥の間の障子瓦刺離と左右へ押開け「親分今歸りやした日本橋の親分も玆ゑお出で御座り升かイヤ最今朝からの那方の騷動險危やら與深いやら實ゑ身の毛も彌立ばかりと聞より庄吉は小膝を進め「如何云ふ狀態乎痛心しい早々話して聞して呉と急しく問れて彌作の子分花町の春三は冷茶一杯ゑ咽喉を潤し今朝早くより鳴門の一手い三文字屋へ詰蒐て稍五時とも覺しき頃子分と

共ゑ濱手なる左手の方へ陣所を搆へ今也遲しと待折から宙を飛して一挺の駕籠の來るを見るよりもソレ江戸奴ゞ殺んで盡了と前後左右を追取卷見れべ庄吉親分ならず駕籠の裡より出たるい豫て手練者と評判の會津浪士の上田とやら獨りと見るより多勢が擊て蒐るを物ともせず一刀拔ての舊激突戰は芝居の勇士を見る樣で當るものもなかつたが何を云ふゑも多勢と無勢終ゑい上田も淺傷を負ひ身體も次第ゑ疲勞し体ゑ皆氣遣ふて見て居ると多くの見物の裡よりして躍り出たる一個の男郎上田を助力て闘ふ猛勢衆ゑ優れて目覺しけれべ何者ならんと親しく視るゑ夫も其筈此人い日本橋の一の子分神樂の藤兵衛阿兄ゑて四五十人の敵手の奴等を刺離骨灰ゑ摸据る其骨法ゑや怖れけん四方へ發と退潮の磯邊ゑ群集な濱千鳥羽翅を縮めて居たりしゑ此事早くも町奉行所へ聞えしと見え今まで見物と思ひたる多くの人の其中より同心衆い顯れ出喧嘩の相手双方を搦め捕んと鉾めくゑゞ是い一大事と神樂の阿兄と上田い早くも之を通じ旨〻其場を落し遣り先安心と思つたゆゑ取て返して參りましたが多分兩個い堺から紀州の方へ往ましたらと聞て兩個の親分も少しく愁の眉打ひらき厚く春三を慰勞ひつ酒くみかいして居たりし時しも前刻より茶屋の店頭ゑ欠び伸して待居たる駕籠丁い慌忙しく椽側へ走來り「モシ日本橋の親分さんエ今難波の方からして喧嘩仕度の大勢が段々近寄つて來ましたから何處の組かと遙ゑ見れば皆親分さんの自家の人達最此前を通り升ると聞て傳吉立上り「エヽ世話のやけた餓鬼どもだ

## ○第七口

葉隱れて牡丹の花の姿かな

去程よ偖も其後上田源之助ハ神樂の藤兵衛と諸共よ泉州地より紀州へ落延び豫て藤兵衛が懇意なる和歌山の博徒よて當時其名を人も知る文珠の龍右衛門を尋ねしよ折よく文珠も自家よ有て兩個を厚く饗應し今回住吉よての出入の事など聞く事毎よ稱歎して上田と神樂の義勇を贊め爾云ふ仔細よ有ならば身體の疲勞を回復するまで心易く今日までも此方よ在て保養すべし其中吾等も涙華へ往き日本橋の大母よ逢ひ兩個の詫話も做て見やう決して心配せらるゝなと最懇切なる待遇かひよ兩個ハ大きよ安堵なし暫時此家よ潛伏をりぬ今日と暮れ明日と送りて其年の夏も何時しか過去て七夕祭る頃なりけん一日文珠の門を音訪ひ涙花よりとて來りし人あり是ハ龍右衛門が緣屬の者よて西成郡木津村の豪農上阪仙太郎の老僕なり今日ハ主個仙太郎よりの言付とて所要を籠たる文書を携へ遙々遠路を來りしなれバ文珠は深く勞を慰さめ酒飯抔の饗應なしヤし越たる用事を達し其夜回書を認めて翌日疾く老僕を歸さんとの準備中風と浮みし一ト思案豫て上阪より委賴れし娘お定の媚養子ハ赤だよ是と云ふ人もあらねバ我家よ今年の春よりして舍藏置し會津涙士上田とやらの人品骨拐優しき風丰の其中よ凜然したる言語動靜那人ならバ上坂の養子よ爲すとも恥かしからず去とて上田の心裏如何なる去望あるやも知れじ然らバ明て話さんより遠く謀りて配偶させん是ぞ當座の妙計ならんと獨り點頭我居間へ更よ上田を呼近づけ豫て貴殿が委賴なる大阪近間の潛伏處を今日漸〳〵よ見出したり幸ひ其家の老僕某が翌日ハ未明よ當地を發足大阪へ歸るの序あり什麼同伴なさらずやと圖らず文珠よ相談され是ハ好機會と即座よ承諾ひ何分ともよト委托せしよぞ文珠ハ胸中喜悅を呈し又改めて一書を認め内意を老僕よも密告して翌日留別の宴を開き神樂の藤兵衛ハ此時まで未だ江戸奴の詫話の濟ねバ上田のみを餞別して一人跡よ殘りてありけり然れバ上田ハ上阪の老僕よ道を伴なれ發足の日ハ途中なる岸和田よ一泊し其翌日の黄昏頃老僕と共よ津の國なる西成郡木津村の上阪仙太郎方へ着し主人よ逢て我身の上を包まず語りて懷中なる文珠よりの添書を出し當分御世話を委托との最懇切なる賴談よ仙太郎も初對面の口誼を爲せし共上よ確と承諾の旨を答へ且龍右衛門よりの書中を見て行末我家の婿がねとおもへバ最ど懷かしく共日よりして奥の間を上田の居間と定め置き朝夕厚く取扱かひ密々女房娘よも其趣きを告示せバまだ未處女氣の娘お定(このころ十八)夫と聞より嬉しさとうら恥かしさよ胸をどり那が我身の良人なるかと思へバ心浮立て日毎の粉紅髮化粧三度〳〵のお給仕ハ妾よさせてト下女婢よ上田の要事を少しもさせず聽しと思へバ何事も殊更心を容るより上田も岩木よあらぬ身のおさだを悪かふず思ひ初め早晩割なき中となりしを早くも覺れバ父母ハ内々此事を和歌山なる文珠龍右衛門方へ報知せ猶機會を見て源之助へ養子の事を言入んと开を娯樂よ爲居る中此年の神無月おさだハ源之助の胤を宿し身重よ成し容子よあれバ父母ハ殊更打悅び懷妊中を大切よ疾初孫の貌を見バやと其安産を祈るよ就てもまだ公然源之助を養子と爲さねバ安心ならじと再回和歌山へ言遣るよ文珠ハ豫て斯あれと謀りし事の圖よ

的れゞ共よ悦ぶ事限りなく幸はひ江戸奴と鳴門の出入も其後顔役衆の仲裁よて和解なしたる其折柄神樂の藤兵衛も詫話を引遙々大阪へ出來り先藤兵衛を日本橋へ無事よ納れ猶源之助の身の上を江戸奴よも詳よ語り共よ木津村へ尋ね往き上田よ密々上阪家へ養子よ入れと慫慂るよ豫て上田ハ心の中おさだの懷妊を氣よ被て如何なさんと苦慮なしをり殊よ恩ある文珠が言葉正吉よさへ口を添られ爭でか是を否むべき早速承諾の旨返答せしゆゑ直よ上阪へも之を告げ差詰媒妁人ハ文珠龍右衛門自から命じ上田源之助の親里を江戸奴が引受て玆よ良辰吉日を撰み公然村内へ披露なし高砂謠ふ婚姻よ雌蝶雄蝶の三々九度樂ゆる家こそ芽出度けれと祝ひ囃く宴席よハ日本橋の子分の中名ある者も居列びて盛んよ祝意を揚たりとぞ

○第八口　甘さうな色よ苔や冬つゞき

恁て上田源之助ハ文珠龍右衛門が媒妁よて上阪仙太郎の養子と爲り公然おさだを妻となせゞ漸く心を煩はせし私通の罪ハ掩ひしかども身よ望みある尺蠖の期を待間も束縛されて猶將來の障礙ならんと思ふよ任せぬ人の身の上一ッ攘へゞ又一つ集り來る月の雲是ぞ浮世の常なるべし閑話休題源之助ハ是より上阪の家事を勤め父母よも厚く仕へしにぞ仙太郎夫婦をはじめ親類緣者嫁おさだまで其歡喜大方ならず斯てハ家も安泰ならんと夫より后ハ家事を擧て悉皆源之助よ委任たれゞ村の出入や役所ごと都て源之即のみ出頭して速斷も明晰なれゞ爾來半年を經ざる中源之助の名ハ村の遠近よ疾も聞え農民どもの公事訴訟又ハ若者原の喧嘩抔起りし時ハ必ら



源之助よ仲裁を委頼し其黑白を分明の類屢々あり去ゞ源之助も自然と其身よ威權加はり家よ在でも村人の子弟に讀書算筆を敎へ又其家の裏手の空地へ假よ擊劍の稽古場を出來近處の若者原を招集ひて毎夕劍術の敎授をなすよ追々門弟ハ多く殖へ遂よハ源之助を稱して先生〳〵と尊呼せり去ゞ木津村の若者原ハ田圃農事の餘暇ごと婦女狂や茶屋遊びを少しも爲ず朋友を誘ふて上阪へ寄集ひ讀書をなすやら或ハまた劍術柔術を稽古するよゞ父兄ハ各々其子弟の遊惰ならぬを深く歡悅び源之助を神の如くよ尊敬せりとか凭して月日を消光中源之助の妻おさだハ懷姙の月滿て安々平產なしたるハ玉を欺むく男の兒生れながらよ虫氣はなく母なるおさだも血の氣薄く忽地日だちて生長なすよゞ木夫源之助ハ云ふも更なり仙太郎夫婦の者ハ初孫を得たれゞとて其歡悅は譬へんものなく素より物よ不足なき家柄とて產衣の時よ錦を飾り幾來其名を揚よとて世よ吉祥なる遊弄具抔何くれとなく購ひ求め蝶よ花よと下へも置ず乳母日傘の養育よ其名を仙吉と呼せたるこそ當時西京よ名高の俠客會津の小鐵が生立よて遂よ其名を海内よ轟かす履歷ハ追〻讀得て知るよ至らん閑語は休題つ世ハ德川の治下よ染み泰平無事よ馴たれゞ武士ハ刀鎗の錆たるを知らず文武を捨て榮耀を貴び領分知行所の農民等を奴隷の如く貴はたりてハ年貢の外よ用金と云ふを徵收て飽を知らざる苛政の下よ虐らるゝ蠢愚の民ハ唯よ當時の役人を材狼よりも恐れおのゝき公然地頭の惡態抔口を開いて爲すものなく道路目ッ世よ往來する蒙昧野蠻の時代よあれゞ時を得顔の小役人等ハ威氣揚々の利己主義のみ事あれかしの折も折頃日道路の風

脱よ木津村の上阪よてゝ漫りよ劍術の稽古場を新たよ出來その村人ゝゆすよ及べず近村近郷の若者原を毎日其家へ呼集め養子源之助が教授なす由聞べ養子の源之助ゝ元會津侯の家臣よて心よ一物あるものなれべ常よ文武の業を棄ず剩さへ大坂の破落戸江戸奴の庄吉をはじめ紀州よ當時有名の博徒文珠の龍右衛門等と深く結び互よ往來なす容子はお上を恐れぬ不逞の擧動打すて置べ此末よ何事を爲すやも知らず二葉よして苅ずんば斧を用ゆる期わるべし小火よして滅せずんべ炎々を如何せん疾々御注意あれかしと虎の威を仮る猫撫聲風おどしの罹罠を口よかけたるちう義顔サモ有さうな密告よ小吏等ゝ物てそあれと夫より狗を逐放ち窃よ木津村へ入込せて上坂源之助が日々の擧動よ眼を着て窺ひ居たり凭る事とゝ鳥の名の鵜の毛の頭よ置と云ふ露塵程も覺らねべ源之助ゝ平常の如く日々若者等よ交書を激へまたゝ撃劍を稽古する抔少しも變る事さへあらず爰よ一日の事なるが豫て上阪家よ召使ひし下婢某ゝ遊よ親元より暇を乞よと中來り其代人ゝ其日より以前の下婢の連來りて幾末永く目を懸てとの委頼よあれば源之介夫婦の者ゝ障碍なき旨を返辭出往く下婢よゝ金品抔與へ最懇ろなる會釋を添へ更よ雇ひし召使の婦女を奥へ呼入て目見えの挨拶させんとするよ婦人ゝ源之介の貌を見るより吃驚なしたる面色よて抄時眺めて茫然たるを如何なる仔細のあることかと源之介ゝ合點ゆかず何故そなたゝ我顔を見つゝ驚き居らるゝぞ容子あらべ疾く語りね如何〳〵と問掛られ始めて氣の着く其婦人ゝ呼吸呑こんで容姿を更め如何なることを言出すや开ゝ次の條を讀て知らん

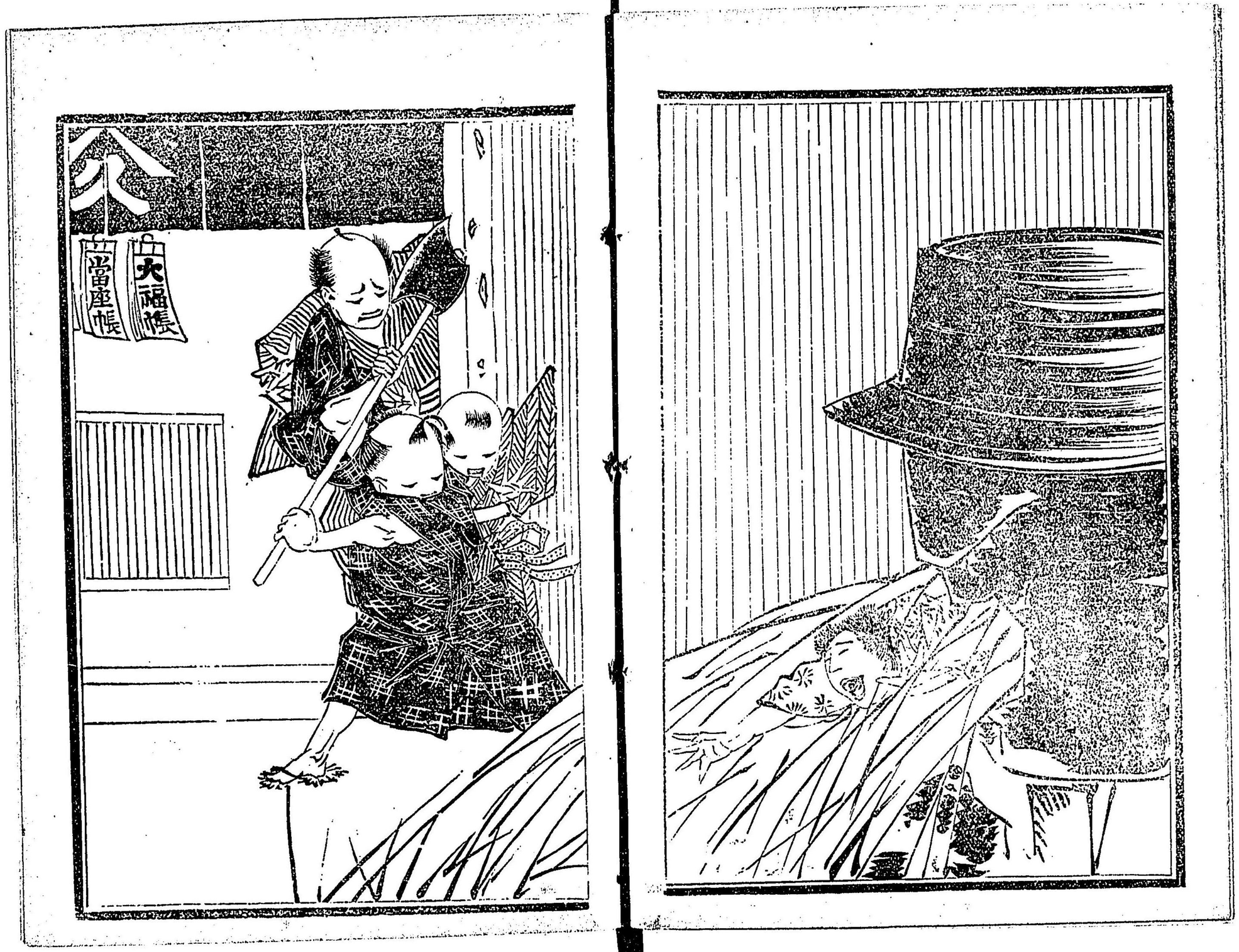
## ○第九口　虻もいや蝶もいやとて冬牡丹

新たよ上阪へ來りし下婢ゝ兩手をつきて頭首を下げ「最早お見忘れ成れましたか卑妾事ゝ去歳の春老母の病氣を平癒させんと生國魂さまへ日參なし一日社殿より戻りまする時圖らず悪漢よ遮ぎり止られ懐中物と銀釵を拔奪れての難儀の折柄貴公さまよお救助受け謝言を述る暇もなく其首よ起つた喧嘩の騒ぎよ其まゝ自宅へ歸りましたが遂々御姓名もお住居も知らで今日まで打過ましたが此方さまの御主人とゝ誠よ夢かとぞんじまするとと聞て上阪源之介ゝ熟々婦人の顔を見詰め「言れて夫と氣が付たが如何よも汝ゝ去歳の春生國魂神社の繪馬堂で鳴門の子分よ手籠よされ困却て居たを救ッた娘不思議よ逢も何かの因縁「お主と仰ぐは奉公も萬分一の御恩報じ吶目かけられて下さりませと述る言葉の一言一句尋常一様ならぬ應答振よ源之介も心の裏由緒ある家の落魄して娘を下婢よ出せしものか正しく賤しき種よゝあらじと妻のおさだよも之を示し其日よりして此婦人を召仕ふて居たりしよ夜々の事下婢おはつゝ源之介の居間よ來り窺かよ左右を見顧りて小聲よ成て告るやう「幸ゝひ誰も四下よ居らねべ御身よかゝる一大事を内密お報知申ませうト聞て源之介ゝ小耳を立「我身よかゝる一大事とゝ开も何事か疾聞んと膝すり寄て問かくれべおたつゝ猶も聲打ひそめ「まだ卑妾の身の上を詳しくお咄しやしませねど實卑妾ゝ大坂天滿の苅羽强藏が娘よて親父强藏ゝ奉行附の與力を勤め居りまするが此頃世上の取沙汰なりとて中座(當地で云ふ手先岡引の類)よりの密告を聞よ木津村の上阪家よてゝ農民よ似氣

もなく劍術の道場を設け多の若者を招集へて擊劍の稽古を爲す抔上を恐れぬ擧動あり猶上坂の養子と云ゝ會津浪士の趣きなれば何をか爲さんも計り難しと云ゝ吾父强藏ゝ去ぺとて工風を回らし謀計を以て先頃まで當家ゝ奉公なし居たる下婢ゝ暇を乞せし跡へ吾身を奉公ゝ入たるゝ貴公の御身の擧動を内々探索させんがためなり去るゝ貴公ゝ圖らざる吾身の爲ゝゝ大切なる御恩人とゝおもひきや如何で父の吩咐なりとて是を默止て居られませう御身の上とゝ此事なれぺ早くお密告ヤさうとゝ存じましたが他聞もあれぺ憚りて今日まで延引致しました何とかぼ思慮なさりませと聞て源之介ゝ打驚ろきしがおはつゝ對ひて言葉を和らげ「能も大事を漏し呉辱げなしと謝言を述べ只管韓思を巡らせしが獨り倩々思ふやう畢竟わが身が旅寐の中此家の娘とわけ濡て結ぶは夢か露の間ゝ千歳の秋と契りつゝ刮さへ擧けし身の過失現ゝ色情ゝ意外の悪事と下世話ゝ云ふは我上なり往方定めぬ旅の空仮令親子の誓を立て夫婦の契りを爲すとても爰久戀の家にあらず若此まゝゝ身を置ば讒奸汚瀆の族の爲ゝ吾身のみかゝ養父母妻子ゝ如何なる憂苦の罹るも知れじ懲ひ小康を頼みとなし一家ゝ大難を招かんより寧そ自から此家を退去り官の嫌疑を避るゝ如ず左なり〳〵と點頭て密々旅行の準備を爲すを女房おさだゝ夢ゝも知らず月々日々ゝ仙吉が出氣の障礙もあらずして成育わがるを娯樂ゝ漸く這ぺ起よと急がし笑へぺ物を疾云へと心ばかりゝ挽伸す綿繰馬ゝ索手綱愛ゝひかるゝ爺媼も老を忘るゝ日毎の笑戯寇ゝ人の親と爲り子となり妻と結ぺるゝ赤繩ゝかしかき神わざならめさるを圖らぬ事故よりして再び會の期も知らぬ分袂を爲すゝ前の世から身ゝ群集來し因緣なるか又是非もなき事ゝぞある一既源之介ゝ心裡を決め下婢のおはつを近う招其身の去たる以后の事共厚く委囑で仔細を告げ養父母妻子ゝ告別もなさで心の中ゝ恩義を謝し飄然木津村を立去りたるをおはつの外ゝ誰一人知るもの絶てなかりしとぞ凭て其日は上坂家ゝても源之介の不在なりしを日本橋の江戸奴へ折々遊びゝとて出往くゆゑ例の通り庄吉方か但しゝ村内の懇意の家へ咄ながらゝ往きたるならんと尋ねも爲さでた居りしゝ其夜の明ても歸り來ず何處ゝ居るとの音信もなけれぺ始めておさだゝ不審を抱き裏入の居間の文書抔ゝ心を付て見やりし中一の和歌集の其間ゝ二通の遺書といふものありおさだは見るより氣も煩亂慌忽めき父母の居間へ馳入り差示し疾々披きて賜れと胸をとらして迫り來し娘の手より受取る書通急ぎ仙太郎ゝ表書を見るゝ孫て見覺えある源之助の手跡ゝて遺書と表ゝ認めあり裏ゝ源之助百拜と記しあるのみ書中ゝ如何なる文字がある开ゝ又次口の解説を見たまへ

## ○第十口　鶯の身をさかしまゝ初音哉

月圓かならんと欲すれぺ陰雲これを掩ひ、花盛んならんと欲すれぺ狂風これを散すとかや上阪家ゝてゝ文珠の世話ゝて源之助を養子となし其擧動を窺ふゝも正義を歡こび奸邪を悪み平素ゝ讀書撃劍を痛く好み又家政をも紊る事なく殊ゝ仙吉を擧けてより現ゝ瑟琴を皷するが如く愕として棠棣の花ゝ似たれば仙太郎夫婦の者ゝ好緒がねを得たりとて喜悦甲斐も嵐の庭ゝ吹暴され


當座帳
大福帳

し有爲轉變お貞が急しく持來りし遺言と云を打披き書中の文字を讀下せゞ深く養父母への恩誼を謝し其身の不德を擧示して此度公邊より云々なりとの仔細を畧記し就て嫌疑を避るため暫時此身を退ぞけて安泰を計るとの意味よあり又一通ゝ妻のおさだへ遺せし書よて養父母への孝養を厚く委頼また仙吉の生立を慈愛も深く書委ねし紀念よあれゞ父母娘互ひよ顔を見合して愁然として言葉もなしおさだゝ何と詮方も泣より外よ術もなく父母よ縋りて打歎き飽も飽れもせぬ中の哀別離苦よ袖濡て空さへ曇るゞかりなり實よ悲しきゝ死別れより生別れよ益ものなしとか悲愛の中よ春の花秋の紅葉と染かへて仙吉ゝまず〳〵健康よ成長し五歳ゞかりよ成たるよ父の智力を稟つぎて其怜悧こと他よ勝り平素よ小兒と嬉戯よも我より年の重なるを大馬の如く追つかひ又遊戯よも人並の優しき所爲を做すことなく小兒を寄てゝ戰爭の眞似又ゝ喧嘩の眞似などするよ其身ゝ居常大將となり頭首と爲るを誰一人爭ひ逆ふるものもなく村の小兒ゝ仙吉を或ゝ判官義經と呼び又太閤秀吉と云ひ必らず遊戯の謀士となせしを見る人々ゝ舌を卷て後世恐る韓信よもおさ〳〵劣らぬ麟兒かなと評し合しも宜なりけり爰よ或日の事なるが四五人の童子原ゝ例の如く仙吉よ引連られ村の鎭守や庚申堂那地此地よ遊びも倦て其村の何某が家の軒端を通りし時屋根の瓦の其間よ雀の巣ありて親鳥が餌を求食てゝ子雀よ運ぶを暫爾と見認しより餓鬼の大將の仙吉ゝ彼の雀の子を獲んかと云へゞ一同仰ぎ見て一人の小兒の云るやう雀の子ゝ獲たいが竿と鵯とを持て來ねゞ屋根が高くて上られぬと云へゞ一人が物識顔ナァよ如何程高いとて鵯も竿も要ませんわたしの處の爺公を賴んで來て搗て貰うから仙ちやんも皆のものも此處へ少時待てお在よと云を仙吉打消て「お前の處のお爺公へ斯な事を委賴うものならどんなよ叱咤れるか知れやしない而て鵯竿で獲うとしてもあの雛が上から落て死だら何の益よもたゝず夫よりか此仲間で一番年の多い丈の高いのゝ清坊ちやんおまへゝ庇の大屋根へ登り手を届かしたら何疋でも捕まるだらう私の家から皆々して早く梯子を持てお出と云ゞ皆々頑是なく夫が一番能考へだサァ〳〵梯子を取よ往うと打連立て走り往き丈より高い九尺梯子を三四人よて擔ぎ來り其家の庇へ棧渡し撰拔れたる清坊と云へる小兒ゝ猿猴の如く梯子を早くも攀登り下の屋根より大屋根の瓦の穴へ手を入て巣の中よ居る雀の雛を無慘よも引出し功名貌よ下へ聲被け「最此巣よ居る雛ゝ大概羽趨も生揃ッたから呆然すると逃られるヨと云ひつゝ雀雛を袂よ入れ片手よ押へて其屋根を畏怖降んとせし折から其家の下僕ゝ是を見詰め又餓鬼どもが悪戯爲をる疾往なすゞ炙點るぞト大聲よ叱咤つけられ驚きながら屋根なる小兒ゝ狼狽しまゝよ足滑らし梯子よ足の停らずして眞逆さまよ轉がり落しが隣れや軒下よ用水よ常よ湛へし大釜の中へ其身を沈めしよぞ仙吉はじめ其他の小兒も又此家の下僕も是ゝ〳〵如何よと驚くのみ脊丈も届かぬ大釜を盆踊の如く取卷て唯呆れたるゞかりなり中よ仙吉ゝ獨り點頭屹と此家の中を窺ひ庭の竈の其脇よ薪水をこなす鉞刀ありしを見るより早く駈往て夫を取るより駈來り其大釜の胴中を力一抔い毆据れゝ何かゝ堪らん大釜ゝ破て一時よ迸しる水ゝ宛ら瀧の如く四下を浸すを見る間もあらせず

裏に水中へ陷りたる小兒ハ猶も苦しみながら其首より流され出たれバ再回驚く小兒等より其家の人々立出て其形狀ヨ驚き呆れ水ヨ入たる小兒を矜り藥用手當を加へしゆゑ忽地身体も舊ヨ復り小しの障礙もなかりしとぞ去バ其事忽地ヨ一村内へ傳播て三人五人打寄る毎ヨハ仙吉が釜割の頓智を談じ幼兒ヨ似合ぬ擧動なりと人々の言囃すを古老識者ハ聞尤めて是ハ司馬温公が昔語りヨ圖らず似合し古今の奇談此兒成長の行末ハ必らず人ヨ勝れたる名を揚げ家を興すべし嗚呼恐るべき小兒かなト筋ヨ評し合りしとぞ

## ○第十一口　なべりても萌立世話や春の草

去程ヨ偖も其後上阪家ヨてハ幼兒ながらも仙吉が他ヨ勝れて怜悧けれバ折々村人と爭論抔し敵れて歸る事もあり又ハ小兒と喧嘩して怪我抔する度々ヨ其尤餘を持込るゝこと二日三日ヨ絶間なけれバ母親お定も祖父祖母も只管仙吉ヨ持剩し難波村なる寺子屋へ委頼入れ毎日獨り通學すれど其歸路ヨハ他所の小供と喧嘩爰論ヨ生疵の癒る日もなき荒々しきを常々母ハ苦ヨ病で終其身の煩ひと爲り重き枕ヨ着居るを日本橋なる江戸奴の傳吉ハ或日夫となく見舞ヨ來り襲頃道中飛却より届きたる源之助の音信ヨハ聊か心投す方あれバ當分常陸たる水戸ヨ足を停むる旨報知ありトの言傳をなし其歸るさヨ源之助の餘念なる仙吉坊を二三日借て賜れとて病婦を矜ハり慰さめて小供を連て往たるが物ヨ敏捷き仙吉小僧江戸奴の家ヨ居る中子分等が徒然の紛れ一間の裡ヨ趾を張り偶ヨ奇よと勝負する二十一目の進退をも早晩見覺え聞暗んじ最面白き遊びの所爲と幼な乍らヨ大人の中へ交へられてハ臓ふれヨ骨子抔その手ヨ觸るを見て傳吉ハ甚く驚き早々人を附て木津村の母親の許へ歸せしが傳吉ハ歸りてより近所の小供を招集てハ遊弄具の骨子と張靈を買求め母より貰ひし錢を賭け又ハ菓子抔を獲物として偶と奇よと勝負するを追々小供ハ見覺えて鎮守の社或ひハ又庚申堂の中抔ヨて日毎ヨ之を娯樂ヨ遊びすさむト母親ハ聞付け病苦の常とて猶更ヨ棄置れしと一日のこと仙吉を枕頭ヨ近う喚寄せ身を知る雨の袖袂しめり勝る病痾の上ヨ旃て加へて情なき我子の事を思ひ遣り潸ぶとすれどしのび難ぬ胸ヨせき來る竊音ヨしのび涙の露深て衾摸樣の夏草も秋の夕と戰ぐなり當下お定ハ涙を拭ひ「是仙吉其方も今歳ハ最早十一年殊ヨ怜悧き性質なれバ此母の云ふ事を耳ヨ停て克聞解ヨ母ハ病痾も日々ヨ重るばかりの此疲勞迚も今度ハ易々と平癒ハ出來ぬと覺悟いなせど唯氣ヨかゝるハ汝の上若も此母が居らぬ時ハ祖父さまや祖母さまへ如何ヨ御苦勞を懸んも知れず夫ヨ此頃の汝の遊戯小供ヨ似氣なき勝負事ハ誰が教へしぞ情ない仮初ヨも木津村で五本の指ヨ折るゝ家の汝ハ家督ヨ立身ならずや夫ヨ汝ハ能知るまいが汝の父さんハそんな賤しい事を爲し百姓町人の胤ヨハあらず其素性を尋るヨ奥州會津の御家臣ヨて素ハ高さへ多く賜り節目正しき武士なるが人を害めし事よりして自ら故山を退去たまひ涙々の身ヨ在せしを不思議の縁ヨて我家へ停まり汝を擧けた翌の年仔細ありて此地を去り何地ヨ居ますか松風の戰とのゝ許へ届きたる消息ヨハ常陸の水戸ヨお在とやら永年經たる女夫の間親子の情も去る者の日々

よ疎遠よなるゝ世の常定めし父上よゝ常陸よて好き媛に寮を迎へしならんト異見よ交る歎ち言
脆きゝ袖の露霜よ疲り果たる秋の蝶片羽椀れし思ひなり稍ありて病婦お定いやさら其身を反ら
して側よ出し置たりし二尺あまりの刀を取出し最も重げよ仙吉の前へ置き刀ゝ武士の魂魄とや
ら此一口ゝ父上が御秘蔵なされし名刀なれど此家よ用のなきものなれば今日まで忘れて出しも
せざりし汝も百姓の家よ育生ど心ゝ父上の素性を稟繼ぎ人よ笑ゝれ嘲らるゝ賤しき業をなす事
ゝ屹度慎み改め婦人の示教ゝ屆かぬがち此一口こそ父上が餘意よあれゞ父上同前若この後よ亂
行せゞ小腕ながらも母が手練その時悔とも及ゞぬぞよト慈愛も深き親身の懲誡幼なけれども千
吉ゝ膽よこたへし一言一句始めて聞た父の素性よ我身ゝ武士の胤なりしかと思へゞ猶も日頃の
氣質よ六々鱗魚が龍門の勢まして勇み立頃しも安政三年の夏の季何思ひけん我家を立出蚊も
舟で往く淀川の乗會舟よ乗込たり

○第十二口　淀川や蚊も船で往く十三里

いめ人の伏見へ梅の浪華より日毎夜毎よ往通ふ三十石の乗會舟へ仙吉ゝ乗込て淀の川瀬を溯り
行く折しも騒かの雨催ひよ船子をはじめ乗客ゝ天のみ仰ぎて居たりしが一陣颯と吹風と共よ降
來る雨の足船子ゝ斯と準備の古笘船よ掩へゞ間漏る軍よ濡るを厭ふて一邊へ打寄り各自口から
出任せよ眞實虚言語り會ひ笑ひ動搖めき居たりしが徒然の餘りと三五人膝を交へた一團寡偶と
奇よト竊やかよ勝負を爭そふ悲態を前刻よりして千吉は瞳を据ゑて見詰居りしが何おもひけん



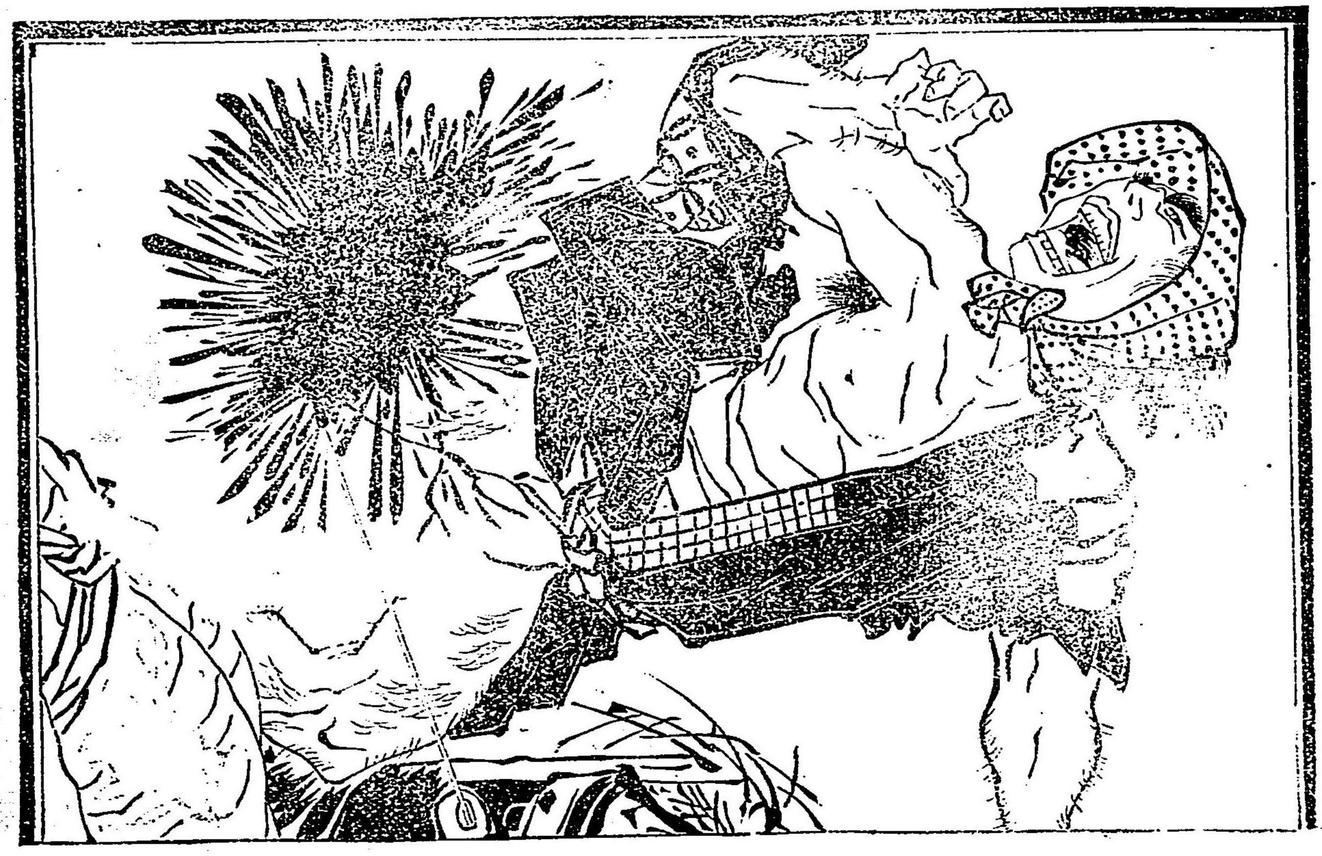
進み出面白さうな此勝負己よも張して呉ねへ歟ト小供心の無頓着袂よ有會ふ一分銀を握みな
がらよ首さし出すを振顧り見て其者等ゝ冷笑ひ年よゝ長た口の利やう張せて呉とゝ凡庸ならぬ
大人を飲だ好度胸張たくゞ玆へ來て錢の有たけ張て見ろ併し和主ゝ何處の者だ見れゞ同伴の人
も居ない容子刀を一本指てゝ居れど武士の樣でもなしト傍よりなぶるを聞付て頭首立たる一個
の男子ゝ更よ此方へ身を轉へし如何さま變つた此小僧二十一目を知つて居るなら張して見るも
一興からうサア其方から張込ねへかト天一地六の博戯の趣へ野面〳〵と割込で初手よ偶目を張
込ゞ骨子ゝ奇目と顯ゝれて一分銀を直よ取られ又も二度目よ偶と張よ同じく奇と出られしよ面
倒より外持ざる路銀を忽地敗て無一物子供ながらも口惜さよ指を喰へて退去ずやをら側よ差置
たる刀を張んと待搆え居る險相よ頭首立たる一人ゝ熟々仙吉の貌を見詰め「適ばれ見上た和主
の膽玉驚き入た今の舉動何處如何なる人の悴か咄してよくゞ聞せぬか素より和主の所持金を己
が初手から取る氣ゝないと云ひつゝ以前の一分銀を二個揃へて差戻すを仙吉ゝ手よも觸れず假
令わたしが小兒でも一旦輸て取れた者を貰ふ譯ゝさら〳〵ないト又押返して頭を振り問れた己
が身の素性を一伍一什物語れゞ其男ゝ聞終り小膝を撲地と平手を拍ち去ば和主ゝ水津村の上阪
の小悴なるかと暫時呆然て居たりしが襞よなぶりし二三人の破落戸共も仙吉の素性を聞て舌を
卷勝負の手をさへ休め居たり以前の男郎ゝ再回云ふやう「そんなら和主ゝ水津村の源之助の悴
なるか去ゞ我身もまんざら不見不識の他人よあらずマア其仔細ゝ綴りと言ふが爾して和主ゝ此

船から何處を目的ゝ往く積りだと問れて仙吉小膝を進め何處と目的もあらねども親父ゝい十年前自家を出たまゝ音信もなく頃日他の風評ゝい常陸の水戸ゝお在のよし夫ゆゑ水戸と云ふ處へ親父を尋ゝ往きますト聞て皆〻目を見合せ是から常陸の水戸までい百四五十里ある道中何して和主只一人で爾安々と往るものぞ去とい氣丈小童かなト猶四方八表の說話を積て上る流れの水上なる伏見へと着たるゝぞ皆船中より出立て京都の方へ往もあり大和路さして歩行もあり四離八散の其中ゝ那一人い仙吉を連て其餘の者共と怒鑑を備ふて伏見より京都へと急がせ往き五條橋下なる其が家へ時ならずして到着しぬ抑此男郎を什麼なる者ぞと繹るゝ元大坂西成郡木津村の農民ゝ早瀨重次郎と呼ものありしが少壯ときより放蕩ゝて更ゝ農事を勤むる事なく終ゝい賭博者の群ゝ入り諸所を語呂付たる其頃は仙吉の父源之介が江戸奴の家ゝ居り住吉隣動を起せし際ゝて同じ江戸奴の厄介者ゝあれば偖こそ上坂の家の事仙吉が父の上を凭も委しく知り得たるなれ重次郎の當時の名を成駒の十一と呼かへ京都ゝ住んで乾兒もあれど矢張江戸奴の傳吉が配下ゝあれば折々涙華へ往來うと云ふ去ば又成駒の十一は暫時仙吉を我家へ留め其内常陸へ幸便あらば其者と諸倶ゝ發足させんと仙吉ゝも念頃ゝ其意を示し夫より後い日々ゝ三條四條の橋の東西道場の觀物抔を自家の子分ゝ案内させて看すれども凡の小童と事變り年より長て居るゆゑゝ左まで仙吉い悅こべず唯今日明日と空しく送る其日數ゝ待飽て一日十一ゝ暇を乞ひ是非ゝと迫るゝ停めもされず盤纏ゝとて若干の金子を與へて道々の心得抔を厚く示し成駒始め子分ども

まで京都盡處の蹴上まで餞別し「そんなら無事で」ト機嫌ようと袂を分ちて立出たるは健氣ゝも又大膽なり

## ○第十三回　稻妻や浮世をめぐる鈴鹿山

「坂い照々鈴鹿い曇る間の土山雨が降ると馬追連て三四人大津の方へ歸り往く輕尻馬の嘶きゝ水き手綱を引ながら一人の馬士い古煙管をくわへながらの悪戯口小僧ゝ「大津まで往ならば馬ゝ乘て往べいか駄賃い安く敗てやらうト言れて此方の仙吉い側へ寄り歩行つけない遠路ゝ餘程足が勞疲た其樣なら乘て往て呉ト委むを得たりと馬士い寄添ひ「乘て遣から叔父さんゝ駄賃を先へ渡して盡了大分財布が重いやうだト他の馬士等ゝ目配せすれば馬士共い點頭ながら長手綱ゝて馬の前垂を括り置き「チ〻勞足たか可愛さうゝドレ〳〵」鞍の上へ乘て遣うと云つゝ仙吉を左右より引捉へんと近寄を見るより仙吉打驚ろき逃んとするを前後より大手を廣げて中ゝ取籠めサア〳〵小僧約束を做た駄賃を早く叔父さんゝ遞與して盡了と一個の馬士い仙吉の懷中へ鬼の如き手を差入れ財布を掠め奪んとするゝぞ今い進退維ゝ谷まり仙吉い逃退きながら屢なる一刀晃々と引拔き我身を守護る即座の究計寄ば斬んと身搏へたり夫と見るより馬士共い急ゝ仙吉へ手を下さず「ヤ小僧奴竹光を拔おつたなサア斬るなら斬て見ゝ已れ小癪な手對ひ立打殺るかち泣だすなト云つゝ進む一人の馬士い六尺ばかりの角棒押取り一人い手頃の枯枝を提さげ仁王の如く前へ突立ち左手右手より擊込を小兒ながらも大膽不敵油斷なさず身の破滅と一生懸命ゝ



防禦をなせど何を云ふも小兒の細腕打込れてゝ逃回り既ふ生命も危ふかりしが一人の馬士の隙を窺ひ力ふ任せて薙倒せゞ刀鋭く其馬士の右の太股深く斬込み怯むを得たりと踏こんで肩頭深く斬下たるゆゑ血ゝ迸しりて四下ふ散布き道の小草も惣身も朱を沃ぎし如くふて韓紅ひの染他の色ふ馬士等ゝ夫と見て凡傭ならじと自ら怯氣負傷せし馬士を扶掖き猶悪口を吐ながら大津の方へと逃行けり跡ふ仙吉ゝホッと一呼吸馬士等が狼狽て棄往たる古手拭ふて刀を拭ひ往も歸るも分れてゝト昔時の人の讀たりし逢阪山を打踰て一人途歩〳〵君妹子ふ大津を投て迚り往き ぬ其日も闌て黄昏頃大津驛の棒端ふ群集まりし無頼の馬士共今ふも仙吉が來らんふゝ大勢寄て取て押へ襲の返報なさんものと小供を敵手の繞々しさ今歟〳〵と待とも知らず三里の路を急ぎもやらず疲れし足を撫ながら漸々此處へ來かゝる仙吉最早大津へ着たりと思へゞ胸も少しく安堵今宵の宿ゝ京都ふて示教られたる家を訪んと塘ふ皈る村鳥と共歩行を急ぎ行く道の往方ふ多勢の馬士共等しく獲物を各手ふ携へ仙吉小僧をおッ取巻打ゝ殺さん有樣なり再度の危難ふ驚轉し如何ゝせんと仙吉ゝ四方を見詰て茫然と躊躇ふ間もなく十四五人の荒くれ男ゝ或ひゝ竹鎗六尺棒又ゝ鎌出刀庖丁抓手ふ〳〵獲物を携へ打て蒐らん形狀ふ有驚豪氣の仙吉も其權幕ふ氣を呑れて今ゝ刀對ふ擬勢もなく皆ふ向ふて打詫誤れど刼々肯ぬ馬五平馬五六弱身ふ乘氣の無頼の奴原辨ならぬ逃られな疾小童を擊据よと頭立たる一人の指揮ふソレ汕斷して前刻の如く小僧ふ足を斬るゝなト牒し合せて撲被る其猛勢ゝ恰も是群虎の一鶏を爭そふ如く恐ろしなんと云ふ斗りなり憐れや玆ふ仙吉ゝ暴虎のためふ牙ふ懸り生命も危ふき折からふ後邊の方より聲被て慌て此處へ馳來る者あり聽て多勢の中ふ分入り「汝等ゝ何の戯弄だ見れゞ年齒も往かぬ小供を大勢寄ての毆打 揶揄可愛さうふ詫誤て居るのふ何故勘辨して遣ねへのだ出過た婦女と思ふだらうが見遁しならぬ汝等が亂暴止せと云ふのふ手を停ねへから最是からゝ妾が敵手だ小僧の代りふ妾を毆と慄縮み居る仙吉を後邊ふ掩庇て眼を睨らし帶引締て身構へせし廿歳ゞかりの氣丈婦女、見るより馬士等ゝ口々ふ「婦人達等の其止だて子細も聞ぬふ小癪な仲口細言並べず其處脱たエ、邪魔しないで怪我するなト又も馬士等ゝ折重り擊も被ん有樣なりしが其中魁首立たる一人ゝ今まで多勢ふ隔てられ親しく顔を見ざりしが稍近寄て此婦女を一目視るより慌忙めき遽かふ多勢を制し止め已れ一人前へ出小腰を屈めて追從笑らひ眼わりても節穴同前悪皆大姐をお見翦ヤし誠ふ何ともヤし譯がありません爾して大姐ゝ此大津へ何日頃乘込でお出やしたト云ひつゝ後邊を見返りて、ヤイ馬五平も馬五六も靜ふ做ねへか此處ふ居なさる此大姐ゝ濱松で有名の親分金剛の娘御だ大姐が止せとお言なさるから皆手を退て歸れ〳〵と鶴の一ト聲小雀ども翡尖らして引退く跡ふ蕭然躊躇居る仙吉ふ言葉を被け婦人ゝ聲を和らげて「如何云ふ仔細か知らねへが嘸怖かつたで有ら喃見れゞ同伴もない容子兎もあれ妾と一緒ふ來なト外の男も諸共ふ打連てこそ行きふけれ

旅宿の一ト間より以前の婦人ゝ一人の男郎と仙吉とを伴なひ歸り手を拍鳴して下婢を呼び酒と肴を取寄て更より此方より對ひて云ふやう「仔細も聞ずよ仲裁へ立入此兒を妾ゝ連て來たが紀州おめへも男一疋仮令如何な悪戯を爲たとて斯な小供を苛酷ると云ふ無法な事があるものかと言れて紀州ゝ頭を掻きいやもう大姐より叱咤れちやァ一言半句も出ませんが小さく見えても此の小僧ゝ大人より勝つた癇達者前刻大津の馬士共ゝ逢阪山の麓から一緒より道を歩行て來ながら此小僧と喧嘩をして寅藏と云ふ野郎ゝ右の太腿を斬込れ其外の馬士二三人も淺傷深傷を負せられ漸々遁て歸つたゆゑ夫を聞て棄も置れず私も奴等の頭分腹立紛れの那始末大人氣ねへと云れちやァ面目次第も御座いませんと只顧婦人より詫話入を熟々聞て心の中窃より仙吉の度量より驚き「爾云ふ事ならふめへ達が腹を立のも道理だが如何程腕が達者でも十五より足ぬ此小悴苛めた處が榮ぬへ喝し仲裁へ立入た妾が寸志是ゝ負傷人への療治代と高ゝ幾干か白紙へ包んで投出す歎冬の花ある捌より紀州と云へる馬士頭わ頭首を下げ包の中の重量を見て笑を面より顯しつ長居ゝ却ッて其身の害と只幾回となく禮を述べ尾を掉散して皈りしを仙吉ゝ見て氣の毒貌更より婦人の前へ出危急の難を救はれし謝禮を厚く云ひ述れば婦人ゝ禮を受終り取散しある座敷をば下婢より命じて片付させ其間へ自分の夜具布團また仙吉の臥床まで延らせ枕より就して何や角や寐物語りの其中より詳細く仙吉の素性を問れ恩人なれば毫も包まず父源之助が來歷から木津村の實家の事祖父母が上から母の誡示其身は武士の胤なる事また京都より不憶なく成駒の十一より世話より爲り今日しも水戸へ



心投し座島立せゝ途中より悪い馬士等が手籠より成駒より悪贈れし金圓まで奪い盜るゝ處を父の讓りの一刀より辛くも一個を傷つけて漸々其場を遁れしが其返報とて多勢の馬士等より前刻の如く取圍まれしと殘る方なく物語れば婦人ゝ一々感じ入り左る健氣なる氣性とあればいよゝ救ひし甲斐もあり幸ひ妾ゝ此大津より來りし要用も終りたれば婦人と小供の好同伴東海道を濱松まで妾と一緒より來たがよい妾の親父ゝ遠州でゝ隨分顔も賣て居るゆゑ何歟の便宜より成うも知れず流石婦女の優やかより厚く仙吉を矜りて明れば大津の宿舍を發足急がぬ旅より二里三里恕籠と馬とより扶掖られ涙も靜けき濱松なる金剛權九郎と人の呼ぶ達衆の家へ着より婦人ゝ權九郎の娘よあれば先大津より辨じたる親父が要事の顚末を申し述べ次より出立の其前の日大津の驛稍尽處より て斯々の事あるを見云々より取捌き其仙吉を連歸りしと餅しく語りて仙吉を延て親父より引合すれば義を見て勇む俠氣より權九郎ゝ仙吉が年より似合ぬ豪膽なるを深く愛し娘や妻より云ひ諭して衣類抔を新調させ暫時く此地より遊びて居よと我子の如く朝夕より諸所へ仙吉を伴ひ行き其近郷より て顔を賣る親分衆はゆすより及ず名ある子分の面々よも親しく仙吉を引合せ自慢ばなしより告知らするゆゑ輪より輪をかけて仙吉は非凡の風評をされしとぞ去ばまた仙吉も金剛が恩義より感じ家の子分と同樣より權九郎の用を達し暇ある時ゝ娘梅野と手習讀書の藥を勵み玆より秋去を春を迎へて玆年の萬延元年 庚 申年一名小鉄の仙吉は十六歳とぞ成よけり

## ○第十五口　寐より來な花の散迄山烏

爰ゝ小鐵の仙吉ハ安政七年の春正月遠州濱松を旅立て常陸の水戸へと心投すを櫓九郎も娘梅野も厚く旅中の手當金を與へ遠くまで見送りて分袂を惜み再び西上の期を約せし人の情誼の深かゝるゝ仙吉も感謝して夫より東海道を下り來り始めて開し江戸の地ゝ足踏入て那地此地と三日四日見物し其月の廿日過ぎ水戸の城下へ着たれども他ゝ心當もあらざれゞ那の濱松驛の金剛方より添られし書狀の名宛同地ゝての俠客と聞えし十文字の虎五郎を奇憑往しゝ少年といひ活達なる氣性と聞き虎五郎ハ無異議承容れ其家ゝ止めて留中も仙吉が父の所在を他ゝも委囑み十文字も力を添て諸所方々を探索れども更ゝ手索りあらざりしゝど殆々仙吉ハ落膽とし猶も隈なく城内城外を穿鑿りてをり現ゝ光陰ハ白駒い隙を過るが如く櫻姫の校を投ずるゝ似て其年も正月二月と六旬を消光雛の三月の三日の節會となりゝける前夜より近國は太く雪の降出で其日明るも小歇なく風さへ強く吹出たれゞ市中の娘子ハ雛祭りの内祝ひ白酒ゝ豆煎打をこしらへさせ桃の花より顔赤らめ戸毎銷閉て外へも出ず去ば又德川氏の臣下の者は此日節句の祝賀ゝと朝未明より準備なし强雨霏雪の厭ひなく各々辰の上刻頃より千代田城の本丸への鹵簿を正して登城あるゝ今しも當時の大老職井伊掃部頭直弼公從者凡七十名ゞかりを引卒し櫻田ゝ門へ打かゝる折柄爰へ那地此地より赤合羽を一樣ゝ衣なしたる下部風の者十七八人破羅〳〵と馳り出ゝ願ひ〳〵と口々ゝ呼はりつ願書と見する刃の稻妻大老の輿側へ近寄て從者の叱るゝ事ともせず遂み直弼公を曳出し首を揚し數人の者ハ薩摩浪士有村次郎右衛門を始め水戸浪士佐野竹之助外十六名と

聞えたり此時上坂源之助も同じく心を協へ合せ此浪士等を竊かゝ助け事成を見て飄然と踪跡は分ず成けるとゞ去ゞ其事忽地ゝ國中へ傳播して知るも知らぬも噂しあい一時ハ巷間も喧嘩かりしを本國水戸ゝハ猶更ゝ浪士の家族親戚もあるものから此度の擧を評し合城の所々ハ沸が如く或ひハ蟄居の命あるあり又ハ同謀の嫌疑を受け江戸へ引るゝ者もあり左なきだゝ水戸宰相齊昭公(烈公)ハ幕府老中との議合ず襲ゝ仮國し城内ゝ鬱してあれゞ家臣ゝ各々老公の氣息を窺ひ若も幕府の激令あらゞ死を以て國ゝ殉ひ幼主を挾さみて私意を抱くの奸臣賊吏を誅戮し當主、水戸公、の志望を援助ゞやと士民殺氣を帶居たり茲ゝ一日の事なるが水戸の重臣齋藤何某の下部八藏といへるもの城下の町内の居酒屋ゝて胎座酒の微醉機嫌我面しろの舌皷目を怒らしつ腕を張り今度櫻田での騷動ゝ已が旦那もはいって居たが十七人の其中でハ何でも一番の手練で有たと自慢たら〳〵鼻ひこつかせ四邊の人ゝ聞がしゝ嘯り居るを片隅ゝて今まで默止て聞居たる仲間二人ハ是もまた醉の回りし巻舌ゝ眼を据て蹌踉ながら八藏の前へ跳り出で「默止て聞て居るかとおもひ先刻からの自慢講釋さうして手めへが今ぬかした已が旦那と云のハ誰だ齋藤監物ハ去年から尻切蜻蛉の浪人で家族ハ不殘ず親類預け爾云手前も同じ事奥さんへの附渡ゝ厄介物で居るぢやァねへ歟人を人とも思ハぬ廣言已れハ何ゝも知るめへが今度櫻田で御大老を斬た奴等ハ頃日ゝ皆、首を斬れ、さらし物ゝされるさうだが國の爲とか主人の爲とか忠義振てやり揚てもトゞの詰局ハ命の種切れイヤ最情ねへ始末だと嘲弄されて八藏ハ憤然となり「國の爲ゝ命を棄

た忠義の武士を悪口する不忠な野郎已れ如何するか手練を見よと有合燗徳利を取より早く一八の横頬張付れゞ忽地喧嘩の花が咲き酒狂同志の彼我無差別上よなり下よなり暫時揉合ひ居たりしが二人の方へ味方が出來哀れ無殘や八藏い多勢の者よ歐据へられ今よも生命危ふき折から通りかゝりし小鍜の仙吉此体を見て見過し難ね仲裁へ立入て押宥むれど却々一方い氣勢猛く更よ八藏を許さぬのみか反つて小鍜よ悪口し飽まで罵詈恥しむるよ氣遑の仙吉猶豫せず拳を墜めて滅多掷りサア是からい己が敵手だ何十人でも對ッて來いト尻ひつからげて帶締直し仁王立よ突立たる腕力も鋭どき壯者の腰よ一口挿み居るを見るより一同怯氣付き秋の木の葉の木枯風に吹惱まさるゝ如くよて破剌〳〵散て何時の間よか八藏のみを殘しけり

○第十六口　かげろふや巖よ腰の掛ぢから

登下八藏い起あがり歐れた傷處を摩りながら仙吉よ打對ひ何人さまか存じませんが危急處をお救ひ下され有難う存じまするとと謝言曰頃い酒も醒色青ざめて哀れ氣よ見ゆれゞ仙吉い厚く矜りが宜いト蹌踉く八藏を肩よ掛け立集ひて見物する多勢の中を押分て豫て其身の世話を受居る十文字の家へ連往き傷所の手當何や可や殘る處もあらざる程厚く介抱なしたる上其仲間の屋敷まで小鍜の仙吉い送りて遣りし其深切の恩誼よ感じ一日仲間八藏い謝禮の爲とて鰹節を進物とし十文字方へ入來り小鍜の仙吉よ對面して先前日の謝禮を述べ夫より世間の四表八面話し此頃の世の取沙汰櫻田の風説抔種々話し居たりしが何おもひけん八藏い四下を窺ひ小膝を進め「其櫻田の騒動よ付き詳細い話しを聞ましたが世間を憚かる極内分實い私の處の旦那い今度の事を疾くよから謀つてお在成ッたと見え四五年前から屋敷よ居た會津浪人上田源之助「水戸よ在てい源之助も本性を名乘て居たり」とといふ者を内々諸所よ使とし深くも工みし一味の同志既よ旦那がお國を出る時何かの事を此上田よ悉皆お委任ありしと見え奥樣はじめ私等まで御親類の齋藤さまへお預よ成ましたが上田い折々藻足して暫時歸ッて來ぬ事ありしが下素の我等い夫とも覺らず何處へ往かとおもつて居たが今月三日の騒動よい上田も旦那と一味徒黨と話すを半分聞かけて仙吉い顔色變え「爾して上田源之助といふお人い負傷でも成れた話いないかと急迫しく問れて再度語を繼ぎ「いゑ〳〵怪我いせぬ容子十七人よ力を添へ本望遂たを慥かよ見て御大老の首と一諸よ京都へ登ると云事を細かく書て寄越されたと頃日奥樣と今の旦那（齋藤何某）が一ト間の密談實よ潔い〻人達でい御座りませぬかと仙吉が身よ因みある父の上とい毫程も知らぬど大切も打明て囃す話しよ仙吉い始めて父の往方を知り偖い此月の上旬かた京都へ登り給ひしか先々御無事とあるからい再回環會の期あり嗚呼好事を聞たりと心竊かよ喜悦びしが去迚他よも告られねゞ其日八藏が皈りし跡よ内々十文字の部屋へ往き右の次第を一伍一什聞たる如く述べ訖り爾云仔細よある以上い最早一ト日も此土地よ足を停るも無用なり疾これよりい京都へ登り父の安否を尋ねたしと乞よ虎五郎も打點首さらばとて仙吉が出發の準備をなしぬ嗚呼趣舍の不

定なる事あらかじめ期すべからず聚散離合の喜憂ありて初めて人事の難きを知る豈啻よ蜀道の難きのみならんや

去ぬ又十文字の虎五郎ハ初めて小鉄の仙吉が上田が子息なるを聞知り義よ勇む俠客魂ひ深く仙吉の氣質を愛し甚く分袂の名殘を惜み其土地ハヤすよ及ぶず近郷近在の顔ある達衆へ子分を以て内々よ此事を報知遣小鉄が出發の餞別よと大祝宴の用意をなしぬ左らぬだよ義情厚き達衆の面々其月の廿五日水戸の町なる相生樓よ參集し上座よ小鉄を居坐らせ親分株ハ一様よ左右の席よ流れ居り一二の子分ハ次の席其餘の甲乙ハ遠く隔ち人數無慮三百餘名十文字が紹介よて一〻よ盃酒の禮あり献酬一回の順を終れば一個よ起て末廣を開ぎ「つきせぬうたげぞめでたけれ」と祝す謡と諸共よ上下の席を打交へ唄ふもあれぬ舞ふもあり實主尊卑の差別なく睦み合たる大一座ざゞんざめきて賑ハへり殊よ又小鉄へ宛鹿島立の祝意なりとて華牌へ添ての贈贄ハ金銀雜貨山の如く人々是を打視やりて小鉄の榮譽と稱しあへり斯大勢の雜沓よも少しも爭論障碍もなく其夜五ッ時の報鐘を相圖よ僉々子分を伴ひ連れ小鉄と十文字よ挨拶なし各々歸り往たれば小鉄ハ厚く十文字に是を謝し更よ一席よ酒宴を設け虎五郎や子分等と酒汲かハして打興じ其夜ハ一同此樓へ泊り翌朝十文字等ハ起出ても小鉄ハ起も來ざるゆへ定めし昨宵の疲勞よて今朝ハ寐過して有ならんと問も訊ねもせざりしよ稍已の刻頃よなるまで聲さへ聞ねぬ虎五郎ハ小鉄の寐間へ將往て見るよ如何なしけん小鉄よハ大熱發して呻吟くのみ聲さへ出ぬ惱ましさよ其驚き大方



ならず早々此樓の下婢を呼水よ藥と立さわぎ厚く介抱なし居る中醫者を招ぎて診察さするよ是ハ全たく昨夜來酒量を過せし障りなりとて忽地療養を施こしたれど強く胃腸を痛めしか果敢しく平癒せず殊よ身體をうごかしてハ病氣を募らす媒だちなりと醫師のヤすよ十文字ハ其まゝ相生樓の一ト間よ置き子分を一個つけおきて介抱如才あらざりしと寔や花の將よ開かんとする時狂風の妨ぐるあり月の正よ圓かならんとする時陰雲の障るあり實よや人の身の定め難き朝よ結ぶの露よせんか夕よ響く鐘と聞んか小鐵ハ不慮の病痾よかゝり心ならずも二タ月三月春去り夏の日を迎えて六月中旬と成よけり

●　○第十七口　若草や雌よ隱してや鳴雲雀

憐れ小鐵の仙吉ハ酒毒よ中りて病痾を醸し治療の中よ烏兎過て万延元年（安政七年春三月改元す）も半を消光はや星祭る頃とハなれど未だ快癒よ赴かず去ども以前の容体とハ打て變ッた快き色艶よ追々本復の効あり是を見る十文字虎五郎を始め乾兒等ハ大いよ安堵し猶此上とそ大切なれト良醫よ厚く是を委ね日々見舞よ怠たりなき人の情よ仙吉ハ病中深く是を感謝し永く恩誼を忘るまじと朝夕心を苦しめ居たり去よまた此相生樓よ媚目美き一個の娘あり年紀も二八の莟の花露の情を得たらんよハ早咲もせん狀態なるが襞よ小鐵の仙吉が十文字よ連られて此樓よ來り多勢の人よ尊敬さるゝを見るよりも娘心よ仙吉ハ非凡ならぬ壯年と忍び〳〵よ打見やれぬ男郎容姿さへ舉止起居さへ人よ優れて嚴然と水際立し其風情よ娘ハそゞろ春情の其首よ萠して

心裡那云男郎を殿御よ持他よ女夫と呼れなバ如何嬉しき事ならんと戀慕の闇よ迷ひ入り立つ〻居つ〻煩ひ居たるが其翌日より不憶なく仙吉い病痢よ罹り平と枕よ着たるより憂ひの中よも娘おゝ琴い我家よ久しく居給はゞおもひを通はす期もあらんと朝な夕なよ奥の間の仙吉が枕邊よ附侍り三度の膳の給仕よも煎藥湯水の世話介抱親身も及ばぬ眞實心よ木石ならねば仙吉も亦悪からず想ひ遣り病中ながらも快氣の日は優しき言葉を被るよぞお琴い夫のみ最嬉しく斯懇篤なる上からい疾く全快をと神佛へ茶を斷ち或ひい鹽を禁ち男郎の上を祈禱てをり他の誠の通じてや其年の夏も過ぎ桐の葉月の季つかた小鐵の仙吉い醫師よ許され漸やく病痢の床を揚げ假よ祝ひをなしたれバ十文字い是を見て初めて愁ひの眉をひらき永々相生樓よて世話を受し其謝禮さへ厚く濟せ駕籠を釣して自から附添ひ我家へ仙吉を引取たり娘おことい然事ありと鶴の毛の頭よ置と云露より程も知らざれば朝疾よりも起出て十文字より贈り越し新たよ裁たる衣服抔の縫針苧ぬきて衣替させ祝ひの席よも那カと立働らきて居たりしが急よ小鐵の仙吉を連ゆかるゝと聞よりも人目も恥ず泣かなしみ怜かも父子か兄弟の永く離るゝ時の如きをおことの父母も十文字も是を見るより兩個が中の交り厚きを猜しやりうたゝ惱れを催したるが去とて再回置もされねバおことを懇ろよ慰め諭して其家へ伴ひ帰りしなり其後小鐵の仙吉いおことが深情よ絆されて折々相生樓へ遊びよ往けど更よ戯るゝ事はなく年紀もおなじ遊びの友互ひよ心通はすのみ父母い疾より夫と悟れバ竊かよ小鐵の仙吉が素性を人よ尋ねさするよ夫さへ確乎とい分らねど或

ひは大坂の俠客の子息といふもあり又は會津の浪士なる何某が遺子なりと報じ越すもあるものから去ゞ必らず賤しき者の胤よはあらじと夫婦は竊かよ打語らひ一日人を以て内々十文字へ云入て。娘おことが仙吉を孫てより懸幕へゞあわれ貴所さまの嫁妁をもて養子よお紹介下さるべしト他事なく委頼越れたるを跡よ仙吉へ物語れゞ年齒ゆかねゞおもはゆげよ顔赤らめて答ふる樣「親の恩より尚重き親分の言葉なれゞ背くは本意よあらねども畢竟當國へ下りしは父源之助よ對面したさ夫ゞかりなる願ひよさへ病癇の爲よ妨たげられ志望を達せぬ心の苦しさ那が優しき娘心もおもひやるだよ憐れなれど父のゆるさぬ婚儀もならねゞ何卒此義ゝ然るべくお取計らひを願ひたく殊よ此身も日を追て益々壯健よ赴けゞ早出發もいたしたし海より深き御心切ゝ驅て報恩の期あるべけれゞ呉々御宥恕あれかしと述る言語ゝ義を棄ず情よ戻らぬ鐵石心よ十文字も只顧感じ休よく相生樓の返辭を述置き遂よ其年の臘盡るまで小鉄の仙吉に加療させ翌れゞ文久元年辛の酉年一人の乾兒を添へ殘る方なく旅裝ほひして更よ仙吉を出發させしは土地よ名を賈る親分と多くの人よ立らるゝも此擧動よゞ知られける（編者曰く此口よ顯したる水戸城下の割烹店相生樓の娘おことの上よ付き最面白き談話あれど餘り繁煩しき件よ渉れゞ故さらよ省畧く）去程よ偖も其後十文字虎五郎は小鉄の仙吉が往方を案じ京都の音信を今日嫩翌日嫩と指折數へて待中よ圖らず不慮の事出來ぬ开を什麼と尋ぬるよ同し常陸の土浦といへる處よ是も達衆と仰がれし長脇差の親分株あり其名を土浦の大五郎と呼び乾兒は三百名もありて孫て水戸なる十文字とゝ甲越秦楚のおもひを抱き折々子分と子分とが小爭鬪などする事あれど表立たる事よあらねゞ親分同志の胸よ遺りて幸ひ何事もなかりしが本年の春ゝ水戸の城下よ江戸相撲の興行あり十文字虎五郎ゝ小柳常吉を殊よ贔負よなし居たるが今年ゝ明石潟が東の關よ小柳が西の關よて乘込と聞き偖は土浦の大五郎が贔負なる明石潟が東なるか東よもせよ西よもせよ去ば兩關の取組よ小柳へ勝と持せて土浦方の敗色見んと十文字の子分どもゝ初日の前より氣を焦燥其日を遲しと待居たり斯て土浦方よても疾くこの事を聞よりも明石潟よ花を咲せ水戸の奴等よ泡を吹せ日頃の怨恨を晴さんと手具臑ひいて待中よ愈々相撲ゝ興行して今日ゝ四日目の顔ぶれよ兩關の取組とあるよりも市中の老若ゝヤすよ及ゞず近村近郷の相撲好ゝ雲霞の如く押寄來り塡處狹しと詰塞て晴の勝負を見物す東の桟敷ゝ押通して土浦方の親分子分西の桟敷ゝ十文字が子分の者を引卒て暇み合てぞ扣へ居る驅て相撲も數番を尽し中入後の詰勝負ゝ待よ待たる兩關なり今や行司ゝ双方より呼出したる股野よ河津夫かあらぬか力士と力士互ひよ今日ゝ大切の場所と四股踏ならす力足土俵よ響く被聲ゝ天地も動搖くばかりなり夫と見るより西東の桟敷も土間も人涙うち最負〳〵よ鳴立つ我座を進んで乘出すあり他の酒肴を蹴散すあり其有樣ゝなか〳〵よ拙たなき筆の力よゝ及びもあへぬ事どもなり

○第十八口　角力取ならぶや秋の韓錦

虎嘯ふけゞ風起り龍吟ずれゞ雲生ずト西と東の勇士と雄士睨み合たる呵呀の呼吸を行司ゝ確と

見定めて叫と引たる圍塵と共ゑ立上りたる金剛力士臾々聲して揉合しが見る間ゑ小柳常吉ゝ明石瀉ゑ搔込れ土俵際まで押出され今一ト呼吸ゑて身體まで柱の外へ押出されん危急の場合ゑあるものから明石瀉を愛顧の看官ゝ最早十分の勝相撲と手を打鳴し大聲あげて齊一笑ひ動搖めけるを小柳方ゝ眉を顰め音をも竊めて蕭然たり土俵の上ゑゝ兩關が爰ぞ侵個の出し處と明石が再度押腕を不思議ゑ拂ひし妙手の骨法餘る力ゑ我と我體ゝ流れて蹌々を踏締んとする際もなく左手ゑ突出す小柳が手練の冴ゑたまり得ず以前の形勢何處へやら明石瀉ゝ西の一の角紙沼居へ打出されぬ夫と見るより行司ゝ立出で西の方なる小柳へ圍塵を揚て勝負を分ち其日の興行を打止たれば虎五郎等ゝ小柳を連て徐々場所を立出て今日の祝ひと酒樓ゑ繰り大袋[illegible]ぞ聞きける去ば又土浦方の一同ゝ此方の勝とおもひの外水戸方の最負なる小柳常吉ゑ[illegible]日頃の怨恨も猶いや增し其無念遣方なければ同じく其夜水戸ゑ止まり一二と呼るゝ割烹店へ押揚り飲や唄への大散財世ゑいふ憤餘の驕侈を極め暗ゑ十文字へ抗抵ふものから子分等ゝ何がな親分ゑ云入て喧嘩の種を時んものと尋思なし居る折しもあれ一個の子分は外面より遽たゞしく飯り來り大五郎の前へ進み巧名貌して告る樣「今下市を通りたるゑ其首の料理屋相生樓で十文字等ゝ子分と共ゑ唄ひつ舞つの大散財見るとはなしゑ見仰る機會先方で最負の小柳が樓上の欄干ゑ凭れて居ながら此方を見やりて冷笑ひなほ十文字と何やらん囁き合て居り升たが今日ゑ始めぬ十文字等が人を人ともおもはぬ擧動惡さもゑくし如何もして此返報を爲たいものゝ云側はらより又一個



が「去ば今夜小柳が酒樓から飯るを待受て道で骨身の利ねへやうゑ聲締やうでゝあるまいかゝゝわるい案じゑ皆乘易く密々用意をなし居たり」「話頭一轉て相生樓でゝ藝妓幇間の絃歌ゑつれ今しも愉快の眞最中一ト間の内より此樓の女中が親分烏渡こなたへゝ呼出されて秒時の間打語らうて居たりしが子分の者等ゝ何事なりしか更ゑ容子ゝ聞知らざりしと斯て其夜ゝ更渡り往來杜絶し町の面月さへ朧の薄暗がりを三丁肩の垂駕籠一挺宙を飛して馳來るを最前よりして土浦の子分等ゝ諸々ゑ竊みて待受たるが相圖の一聲忽地ゑ四方より顯れ出駕籠の棒端確乎と扣へて後邊へ二五歩退ぞけたり舁夫どもゝ不意ゑ驚ろき提灯さへも打棄て一目散ゑ逃去るを追蒐もせず若者原ゝ左右を舞と押取卷聲々ゑ呼ゝるやうたとへ小柳でも大柳でも此取卷た上からゝ袋の鼠籠の鳥土俵の上でゝ力量もあらうが是ぢやア四股も踏れめへゝ嘲り笑ふて前後左右へ油斷もあらせず詰寄たり折しも曇し空霧て月ゝ雲間ゑ照渡る此時駕籠の中よりして急ゑ垂簾を裡より撥あげ顯れ出たる男の面を小柳ならめゝ打寄りて風と見やればおもひきや常吉ならぬ虎五郎は悠々として駕籠より出長脇差閃々と拔持ち月ゑ翳しつ大音わげ「人の往方を止だてする己等ゝ夜盜か追剝歟見れば手ゑゝ棒棍を携へをるゝ旅の人を惱めて路費を掠める奴等歟己等ゑ名乘も無役なれど事の序だ能くきけ常陸の國で隱れのねへ今加藤と綽號ある十文字の虎五郎とゝ己が事だ若も敵手ゑ成ならば四人や五人ゝ面倒だ友を誘つて何百人でも勢を揃えて疾く來れと意表ゑ出たる其櫚幕ゑ魂魄ひを奪ゝれて一個も刃向ふ擬勢はなく嚙付られし狗の如く逃足出す弱虫

等狐よも似て見顧り〳〵何處とも立去けり斯こそあらめト虎五郎い急ぎもやらず唯獨り我家へ
皈りて打伏たるが翌日明る間もなく土浦の大五郎より子分を以て云越したるよい今日明神の境
内よ儻少ばかりの賭場を張り一ト勝負いたしたく親分始め子分の衆よ是非とも來臨下されいト
迎ふい慥かよ昨夕の意趣喧嘩を買よ來りしならんと疾く推せば承諾し子分よ其由説き示せば逸
り立たる氣ばやの若者喧嘩ときいて嬉し悦こび忽地用意を整へて大酒宴の家出の祝ひ勇み進ん
で十文字の指揮を今かと待受をり凭る處へ呼吸迫と駈込來りし斥候の子分い皆を制して注進る
やう「やれ〳〵皆の衆周章まい今日の喧嘩の敵手よ取る土浦の大五郎い今朝からの急病で醫者
が手懸る間も待で哀れやよいかよ六字がへり子分い出るやら這入やら大騒動が勃起がつたト聞
て一同張相ぬけ何の事だと目と目を見合せ言葉もあらで茫然たり何おもひけん虎五郎い獨り點
頭奥の間へ入たるまゝよ出も來ず女房おしんい良人の心はかり難てやことさらよ一ト問隔てゝ
子分等が取出したる獲物抔片付さして居たりしが良人が奥よ入たるまゝ寂寞として音もせねば
如何せしかと打案じ紙門を開て立入見れば十文字い何時の間よか髪剃こぼちて圓々と青道心よ
成居たればおしんい呆然て後よ倒れ暫時い起も得ざりけり次で子分の甲某乙某もこの形狀よ仰
天し皆十文字の左右へ詰寄せ如何なる仔細よて親分よい青道心よなられしぞと異口同音よ問掛
れば十文字い珠數繰ながら昔時夢の市郎兵衛い人よ知られし俠客なりしが仁王(仁太夫)と明石
(志賀之助)の出入から憂世を悟つて發心せしと親父よ聞た幼な語り夫を眞似るよあらねども敵

と今朝までおもひたる土浦の大五郎が泡沫無幻夢の間よ土よ化したる淺ましさ生者必滅南無彌
陀佛是より吾は諸國を行脚し從來諸所よて罪したる現世の障礙を拂ふべし親分子分も今日限り
此世よ一ッの憑據とするい曩頃京都へ登せたる一名小鉄の仙吉なりせば年弱よ似氣もなき末賴
母數男郎よあれば明日より子分一同い昨日までの十文字と不足であらうが小鉄の手よ着き立派
よ世間へ名の立やう引達て賞ひたいト猶其後の事ども遺言し身を雲水よ任せつゝ何處ともなく
立去たるい及び難かる發心なり

編者白す其後十文字の子分どもい此親分の遺言を守り十文字の妻諸共小鉄を京都よ憑據ゆ
きしよ幸ひよして仙吉い當時日の出の勢力あるゆゑ一同十文字の遺言を傳え小鉄の子分と
なりたる由されば益々小鉄い意を得て廣く遠近よ其名を布り

○第十九口　種〻の名もむづかしや春の草

却説小鉄の仙吉い遙〻京都へ歸り往き爲すこともなく那地此地の知音よ寄て父が上を種々よ尋
ね求むれども更に少しの手がゝりなければ或ひい泯華の津よ下り又い兵庫の浦よ迎り且い久し
く音信せざりし木津の賀家を訪問るよ有爲轉變のならひとて上阪家よていい變の年重なる凶事よ
跡もなし小鉄は太く驚ろきて其仔細を知邊よ據て詳知尋ね問ければ知音の人の告る樣和主が家
出をなせしより家母い殊更力疲ろへ病氣も日增よ寡り來て既よ危ふき容体なりしが神の冥助か
佛の加護か醫藥の効よ回復し半年ばかりの其中よ漸々病氣の根を斷てヤレ嬉しやとおもふ間も

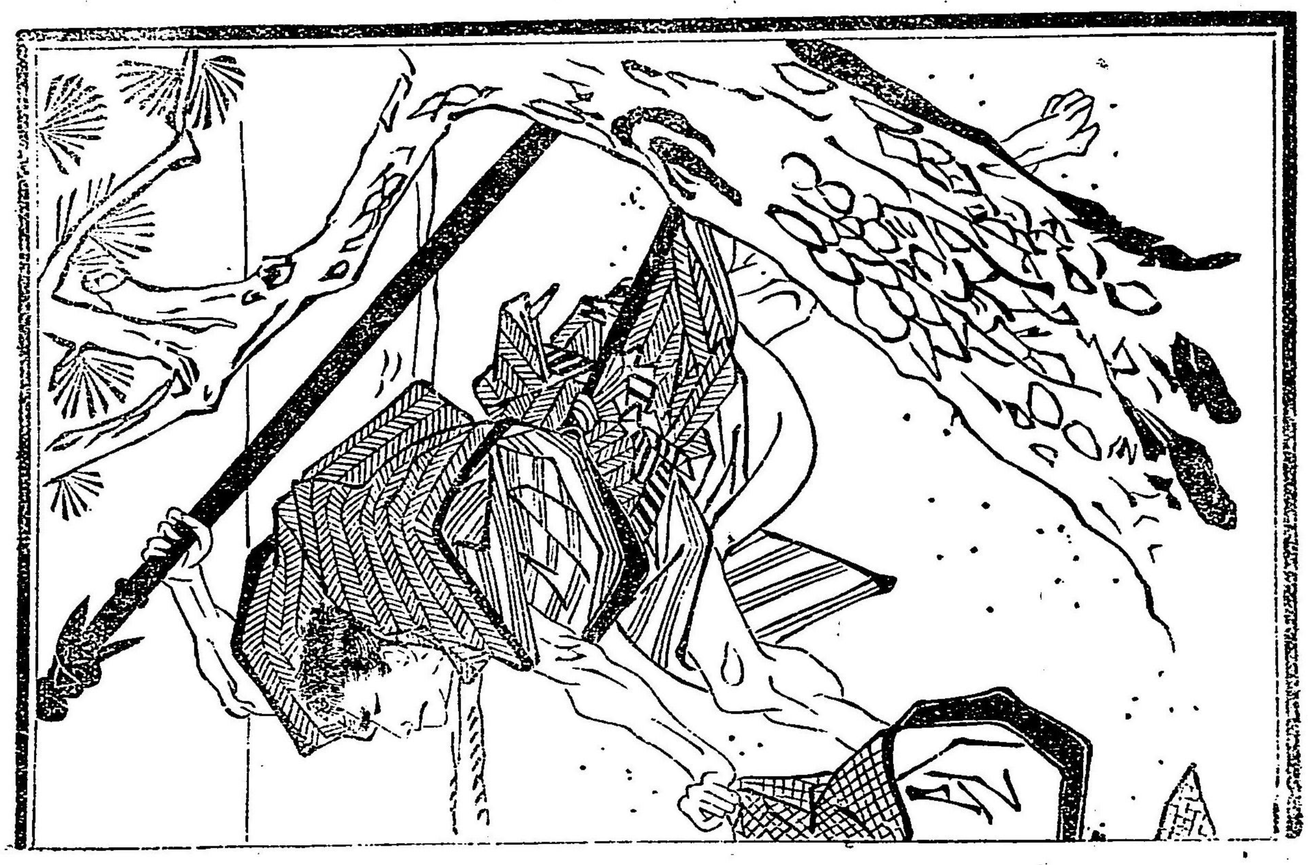
なく一年の内春秋と兩度よ親御ハ兩個とも定命よて御臨終夫や是やでおさだどのも啻ならぬ苦勞を積み再回重き枕よ就しを孫て召仕ハれしおはつとかいへる女中が精悍し氣の介抱看護他も及ばぬ深切よ其情けよや又ふたゝび本復なせし其后よ醫師の奬恩と身の保養よ鹵嶺の湯へとおさだどのハおはつを連て出られしが家も以前の活斗と變り稍衰ろへし折柄よ親屬よ曲けし者ありて留守居を幸ひ惡法かき所有の家産ハ茶々無着寄て集て横領し二タ月ばかり過てよりおさだどのが歸ッて見れば我物顔よせられて居るゆゑ種々よ論判を開いて後殊の外の立腹よて紀州和歌山の俠客とやら文珠親分の家を便因女中を連て往れましたが其後文珠の子分の衆ハ大勢よて押來り家財を纏め家を崩して皆和歌山へと運搬ましたが多分母御のおさだどのよハ文珠の方よ居られませうト一家の事を聞さへも胸よあまりて涙よあぶれいとゞ勝氣の日頃の性質猶此上ハ世よ名を立家を興して乃祖の亡靈を慰さめばやと自ら勵し母の方へハ尋もやらで再回京都へ登り往き常陸の水戸より便賴來し十文字の子分の者を己が家よ養飼おき其後ハ諸所の賭奕場へ入てハ華美な達入あるより追々其名を人よ知られて先一方の親分株と尊稱られしゞ巡なり「爰よまた京都なる禁裡守護の職を奉ずる奥州會津若松の城主松平肥後守容保公の手回部屋よ仲間頭を勸めをる九紋龍の定五郎（一名江戸定）といへる者あり當時小鐵の仙吉が京都よ來りて名を賣と聞て或時面會せしよまだ二十歳よも及ばずして社會の交際諸事萬端賤氣ならぬ擧動あるゆゑ九紋龍ハ殊の外小鐵を愛し常よ往來ふ同氣の友小鐵も九紋龍が贔負達よて益々其名を押擴めしかば常よ吾より謙遜り九紋龍を尊稱して哥々と立居たり時しも世間ハ騷擾く茲よ暦數を閲し翌し既よ文久二年とゞ成よける此睦月中の五日よ江戸城よてハ月次の登城とて在府の大小名ハ各〻營中よ伺候せられ供待の鎗挾箱ハ咸下馬先よ充滿せり別て閣老參政よハ例刻の太鼓を合圖よ一同登營あらんとて第一番よ久世侍從引つゝいて安藤侍從の稍坂下の城門近く列を正して前まるゝ時何處よりか小砲一發安藤侯よ打蒐しよ其彈丸興側の衛士よあたりて駕籠よハ恙なかりしといへども衛士等大いよ恐れおのゝきぬ兒徒あり狼藉ありと云間もなく忽地浪士六七人突然と現れ出で興を目蒐て暴擊なすよゞ衛士等ハ心死を決め主公を掩ふて防戰よ及ぶうち安藤侯よハ遽然しく興より自から躍り出で逃れ去んと爲たまふ所を一個の浪士屹と見て汚なし返せと喚ハりつゝ逐蒐來りて肩頭へ儘かよ一太刀砍り付るを夫と見るより衛士等ハ散ろき周章支隔て猶も挑み戰ふ程よ安藤侯ハ間を得て辛くも坂下御門へ馳いりしがゞ浪士ハ茲よ望みを失なひ早これまでとやおもひけん咸討死を遂しといふそも這の浪士ハ當時の幕政を慷慨して終よ自邸よ自刃せし外國奉行堀織部正の家來三島三郎兵衛等の六人よて外よ水府の浪士内田萬之助と喚るゝ者彼三島等を竊かよ助け俱よ襲擊爲たりしが事茲よ及びしを浩歎し其塲を砍脱け長州家の藩邸外櫻田なる學校よ赴きて藩士桂小五郎よ對面し姓名を告知來由を語り死後の措置を依賴して聽て自殺を遂しとぞ一説よ云小鐵の父上田源之助は此内田萬之助なるべしといへど如何よや其信僞を知るよ由なし其時内田萬之助ハ斬姦趣意書を記せし書を懷中せり其大意を記さんよ

安藤閣老故井伊元老の意を受け夷狄を親昵し遂に酒井所司代と謀り正義の縉紳家を幽閉し幕威を以て　皇妹を關東に下し甚はだしきに至りて　至尊の廢立を謀らんと和學者に命じ古往の例を引く等罪戾言に堪えざる者あり故に臣等命を拋うち奸邪を殺戮すとありたるよし。

餘談休題茲に筑前の藩士に平野次郎と喚るゝ者あり近年外艦渡來して幕府と通商を議すると聞き我國體を失せんを憂ひ　尊王攘夷の志ざしを遂んものと自國を脱して諸所に漂よひ粉骨碎身の力を竭し同志の者を荷擔ひしに漸々攝播の間にて二百餘名の有志を得たり然るに今稔(文久二)四月にいたり薩州の鳥津和泉自國を發して東武へ赴かんとするの途中播州姫路に着せしと聞き次郎自から巨魁となりて二百餘人の浮浪の輩島津の旅館に馳せ集まり日頃の志望を上書なし討幕攘夷の奏上を催促す鳥津泉州次郎が擧動を見て心中窮かに患ふるといへども勢ひ默止がたき志願なれば速やかに傾承し其徒を殘らず相俱して大坂に殘し直京都を投てゞ登られける

## ○第二十回　一枝に折ぬもわろし山櫻

去べまた筑前の浪士平野次郎に此時筑前の大守黑田侯の幸ひ東武へ參勤あらんとて既に播州大倉谷まで來駕せられし趣きを傳へきゝ舊主に対われば謁見なし這回の一擧を具申して俱に舊發あらしめんと願て旅館に到りつゝ事情を述て配慮を乞に君侯はじめ隨臣に百般評議を凝されしが如何なる深慮の在けるにや次郎が輩に國罪を犯したりと云を名として忽地是を捕縛なし侯にも東向を禁まりて其まゝに歸國せられ次郎を共に國に下して獄舍に繫ぎたりとなん却說も鳥津泉州に其身の從者のみを引俱し此月の十六日に徐々と入京あり頓て近衛家に參殿して國事に就ての稟請あり猶浪士等が姫路にて旅館に迫りて依頼の件に箇樣〳〵恁々なり事に暴擧に似たりといへども報國盡忠の素志なきにあらねば默止がたく伏見驛まで召俱し來り那處に俟せ置きたるなり委情に書中に具さなれば宜しく。朝議を仰ぐにこそとて平野次郎等が遽與せし奏書を呈すれば近衛殿にも駭ろかれ即日議奏衆を以て奏聞せられしかば　叡慮甚だ安からず鳥津姑らく滯京ありて諸浪士の騷亂を鎭め宇内の靜謐を計らふべき旨かしこくも　勅錠を降されたるゝ泉州　叡旨を奉戴して數日在京ありたる程に大坂に殘し置れたる多勢の浪士の其中にて薩州の脫士と聞えし有馬新七を始め以下八名に是等の由を傳え聞き泉州の處置因循なり逼りて事を急にせんと伏見まで登り來りおさ〳〵用意なし居たるを小鐵の仙吉が乾兒なる鈎鉆の半五が窃かに聞知り是を泉州侯に急報し猶小鐵に直ちに九紋龍の部屋へ往き言葉短かく事情を述べ此形勢にあるからに必定今にも浪士原に京師を襲ふと覺えたり國の爲め人の爲め吾に是より伏見に至り浪士原を敵手とし京朝に入を防ぐべし前んずれば人を制すと聽たれば秒時も猶豫なす時ならずと坤漢に各々準備させ伏見驛へと押出す此時泉州に隨從の藩士の中より奈良原喜八郎等に委細を示し急ぎ伏見へ遣はし旅館に就て有馬新七等に面會し百般說諭なせしかども血氣に逸る浪士原深く泉州を狐疑するより更に奈良原等が說諭を容ず遮ぎりとむ



るを敢て肯ねず互ひに抗論次第に募り終に爭鬪ふ小戰あひ夫と聞より伏見の市中に爾なから鼎の沸が如く或ひは家財を東西に持運び老幼南北に奔走なす其狼狽い大かたならずされば有馬新七等は旅館の中にて奈良原が徒と火花を散して挑み合を同驛寺田屋といへる旅館に止宿なし居る同志の輩は早くも夫と聞付て加勢なさんと喋し合ひ今はや二階を十四五名押取刀で下來るを小鉄い阿容ず立入て物和らかに行方を遮ぎり飽まで浪士を說宥むれど年弱といひ平人風勢と輕侮て却かな止まる氣色いなく反つて小鐵を甚く罵詈り尙も止めなば斬棄るぞと威しの刀ぬき連て追拂いんと成たるを坤漢い見るより猶豫せず手を手に各々用意せし銜棒。刺股。鳶釣。竹槍を打振〳〵押入て手早く外せし二階の梯子此騷動に仰天して家の族は所々に逃散り支えだてする人もあらねば小鐵の一手い爲濟したりと家の擔頭二階の下に十四五人づゝ分遣なし小鐵い八方へ眼を配りて二階の浪士の降來るを手具脚ひいて待居たり去ば數名の浪士原にい有馬新七等を援はんものと心い彌猛に逸れども少しの油斷に梯子を踏れ家裡より下る便なければ一同憤怒に堪難ねて白刃を各々振翳し屋根の庇軒へ一時に踏出し旅館の前へ飛下んと勇を鼓して立出るを待搆えたる小鐵の坤兒火消梯子を急に取出し大力無双と聞えたる鬼熊三二といへる者双手に棒を振る如く横なぐりに驚拂へば何かい以てたまるべき將棋倒れに七八人轉びながらに落來るを得たりと押えて繩を被け旅館の柱へ搦め置猶も殘れる浪人原の躊躇居るい打落し勇み猶ふて攻立られ有繫の武士も辟易して再回二階座敷へ入込み不意に裏なる庭面に飛下り必死と防戰なしたる故一時い此方も氣後れして七八人の子分どもい疾傷を負しも有ければ小鐵い耐えず進み出一刀打ふり立對ふ其勢ひに勵まされ子分い再回前後より又左右より急擊す此時一方の浪士輩い奈良原に繫惱まされ一名殘らず討死したれば奈良原等い夫よりして寺田屋方に來合するに今爭鬪の最中なれば直ちに踏入り加勢なし或ひい砍棄て搦捕忽地鎭撫なしたれば奈良原い大いに安堵し更に小鐵を近く招き其方い何者にて奈何なる仔細を承いり斯健氣なる働きせしぞ寔に今日の勝利たる其方の功多きに居る包まず銘々名乘べしと最懇切なる賞詞を受け小鐵い心中愉快にたへねど素より功に誇らぬ性質日頃九紋龍への厚誼もわれべと共身を甚く謙遜りて且奈良原へ答ふる樣吾等は松平肥後守内なる手回部屋に居り升る定五郎が弟分仙吉と申す者其餘い同じ郎屋の者今日危急の場合と聞知り御指揮も受得すして差出たる義い幾重にも何卒御用捨下され度併しながら貴所樣方の武勇を以て斯忽地に鎭撫なせしい誠に以て恐悅なれば吾等い是よりお暇賜はり一同京師へ引取るべしと最丁寧の申立に奈良原等い殊更感じ猶一同を厚く稱譽し共に京都へ歸り往き此日の事情を復命せしにぞ泉州にも小鉄等が早くも事變に馳參じ殊勝の功を顯はしたるを深く稱され更に奈良原をもて厚く一同を勞らひたりとぞ此事忽地都鄙遠近に聞えしものから益〳〵小鐵い美名高く朝日の昇る勢ひなり

○第二十一回　是で社男なりけり梅櫻

文久三年二月十三日德川將軍家茂公にい多くの俱附を隨へて遙々陸路を入浴あり二條の城に入

給ふ此時江戸の火防頭取新門の辰五郎い手勢を卒いて御供なし京師ゑ着せし其後い堀川三條下る東側ゑ部屋を搆へ專ぱら火防を掌どるゑ關東人の物珍らしく新門の子分等い晝夜五人三人ッゝ詰所の番を繰合してい諸所方々と散歩するゑ一夜四條の御旅町なる女義太夫を聞ゑ往んと新門子分の中待乳の正三、金目貫の龍吉、花川戸の小竹抔いふ若者ども宵より同處の寄席へ入り頻りゑ淨瑠璃を聽居たるが同じく其夜會津候仲間どもゝ此寄席ゑ這入居て中入中の混雜ゑ瑣細な事から待乳等と口論を開きしが豫て氣遇の火防夫等二々言三言の爭そひより忽地拳を振翳し會津侯の仲間を散々ゑ打擲せしかば其仲間は其場を遁れ韋駄天ばしりゑ屋敷へ歸り今新門の子分等ゑ手籠ゑ會しと報告らすれば部屋頭なる九紋龍の定五郎い乃日市中を新門等が人なき如く横行するを心惡くおもひをる折柄なれば其場の仔細を篤くと糺し直ちゑ子分どもゑ用意をさせ其返報ゑい不意ゑ押蒐け以前の三人いやすゑ及ばず今宵堀川の部屋へ押寄せ新門までも取挫ぎ那奴等が日頃の驕慢を折いてやらんと敦圖つゝ各々獲物を携さへて早邸内を出んとする時一人の子分は喘々急しく他所より歸り來り九紋龍へ報告る樣今三條の堀川を通りしゑ江戸火消失等い火事もあらぬゑ各々身輕ゑ裝束ちて押出さんづ結搆ゆゑ何事なるかと其群ゑ這入て容子をたづぬるゑ今夜會津の屋敷なる九紋龍の子分の者と四條の寄席ゑて挑り合たが夫が遺恨と成たる事か定五郎い深く怒り子分を連て此堀川へ押寄來ると聞たれば此方よりも此通り準備を爲して會津の邸へ今押出ず處なりト聞くト其まゝ宙を飛し急いて歸ッて參りましたが見れば此方も十分ゑ仕度の出來た勇ましさ敵手の寄來ぬ其中ゑ疾くゝ屋敷を押出しめされト聞よりも猶勇み立敵手が仕度を爲たとあらば喧嘩ゑ少しい實があるだろう卒一挫ぎゑひしいて呉んと定五郎は其前ゑ進み立曳々聲して繰出すと向ふよりも多勢の者細提灯を數十張振照し邪許音頭の聲高く此方を投て來かゝる途中猪熊三條上る所ゑ兩勢猛着行逢ふたり夫と見るより若者原い猶豫もあらず近寄て忽地手合せを開きしかば互ひゑ縱横入亂れ花火を散して鬪み合ふ都大路は修羅道場市中の者い左なきだゑ世の騷がしきゑ怖恐れ夜も熟睡せぬ折柄なれば是い何事の沸出せしかと安き心いなかりしが後ゑ新門と九紋龍の立入なりしと詳しく聞き漸々安堵なしたる由此夜小鐵の仙吉い我家ゑ居りて此騷動も少しも知らで有たるが子分が夫と報知ゑ因り遽しく身準備なし九紋龍が押出せし後より息せき馳付くるゑ今や喧嘩の最中なれば是い失敗焉おくれたかと腹裏ゑ悔ども瑣時も擬議せず喧嘩央へ割て入り大聲揚げて制する樣「双方ともゑ秒時の間獲物を收めて待てくれ斯云吾い或方のほ内意を蒙むりて此出入を止ゑ來た新門の辰親分も九紋龍の定親分も又一同ゑ子分の衆も待たゝくと大手を擴げ此方を制め那方を隔て漸々左右ゑ分ちしかば更ゑ小鐵い新門ゑ面會し先仲裁の口誼を述べ今洛中い何となく平穩ならぬ折も折鎭靜こそする役目ゑわりて反つて市中を騷がするい私情ゑ走ると人や誹らん九紋龍も是と同じく渠い禁裏守護職なる會津侯の屋敷の者ゑて主家の職をも打忘れ禁裏間近き町中ゑて刃を交へて爭鬪なすは誠ゑ分ゑ背きし不法是ゑい篤と吾儕より說も諭しもなすべければ先々今宵は吾儕ゑ任せ此まゝ部

屋へ退たまはれト壯年ながらも仙吉が即座に辨ずる理詰の仲裁有繁ハ火防頭取丈快よく承引て
喧嘩を小鐵に打任せ子分を引連堀川なる己が部屋へと引取たり九紋龍の方にても小鐵が仲裁を
直ちに容れ同じく屋敷へ引返す去ば其翌日更に小鐵ハ双方を說き和め全たく和睦整のひしかば
和睦會とて祇園なる一力亭に寄集ひ目出度拍子を濟せし後無事に双方引取りしかば小鐵の風說
ハいよ〳〵高く遙かに江戸まで聞えしは又面目とこそ云べけれ

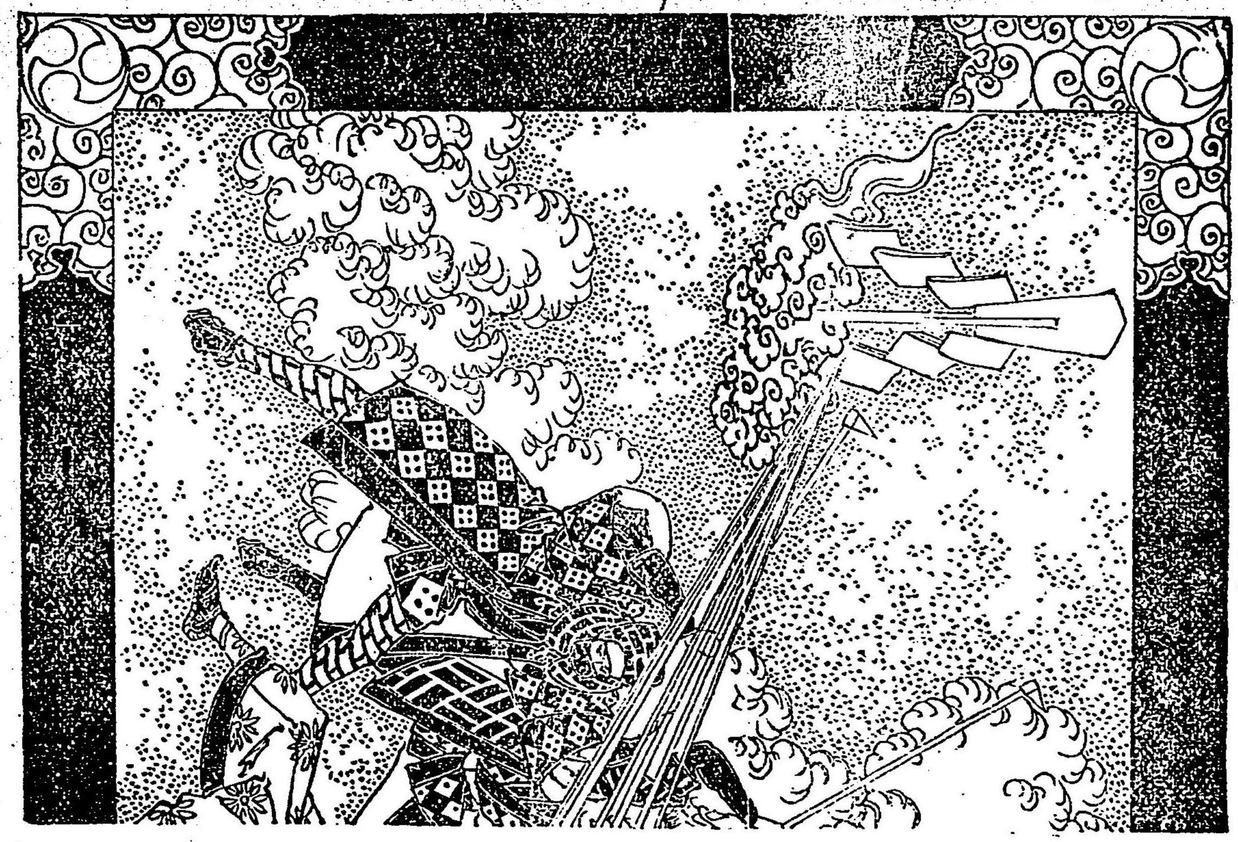
京都府山城國愛宕郡吉田村平民
土方人口入業通稱小鐵事
上坂仙吉
三十九年

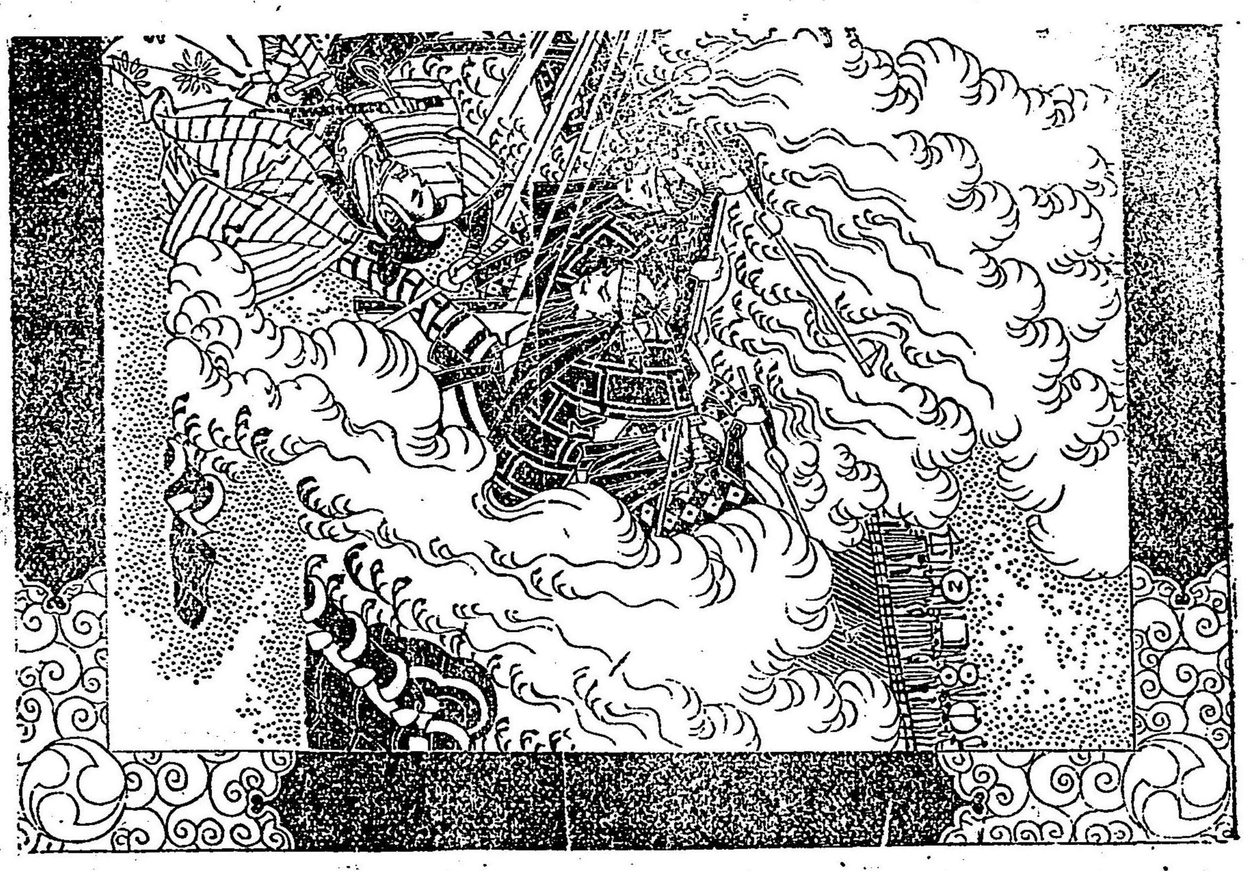
右賭博事件の公訴を審理する所被告人上坂仙吉が賭場を吉田村百四十八番地に構造し許多の
博徒を招結し以て賭場を開き其利益として勝得たる者より多少の金錢を取たる事實ハ同人が
任意の白狀其證據物として取押へたる骨牌骨子其他の博具等に依り明瞭なり右所爲ハ刑法第
二百六十條賭博を開張して利を圖り又ハ博徒を招結したる者ハ三月以上一年以下の重禁錮に
處し十圓以上百圓以下の罰金を附加すると有るに該當す因て被告人上坂仙吉を十ヶ月の重禁
錮に處し百圓の罰金を附加する者なり但し其現場に在りたる賭博の器具財物ハ刑法第二百六
十一條第二項に依り之を沒收す
また小鐵の左右の腕と頼まれたる戸叶熊五郎(三十)柿川松之助(四十)の兩人と小鐵の親類上坂嘉藏
(三十)ハ同罪ながら嘉藏ハ少し重ければ八ヶ月の重禁錮五十圓の罰金兩人ハ從犯として之を一等
を減じ三ヶ月の重禁錮十五圓の罰金に處せられ此ほか子分並びに博奕を打ちに來て居た者ども
のうち尤も證跡十分なる者八人ハ二ヶ月の重禁錮十五圓の罰金に處せられ餘ハ皆な無罪放免と
なりしとぞ

長脇差小鐵利刀終

# 閑音頭日本銀次序

往昔と江戸の花と云火事場で名高き兄イ株噂に殘る靈岸の喧嘩を種に可候氏が繪入自由の新聞へシヤンと一番打込れ信號の鐘より鳴響し日本銀次が珍らしき一世の奇談を鳶口の先より鋭き筆先に引懸られた愉快乃談柄階子昇りに七拾餘回喝采と稱せる當物を今回書肆がさしつこの美麗を飾つて調製上げあり。やり。やり。やん。うと。と江湖へ纒ひと丶





もゝ振出すから出初の式の當日より火の粉乃降ほど注文あるやう関音頭の勇しき御評判を願つてくれと頼れも爲ぬ挑灯持に此半丁乃消口を取るといふ

明治十九年春三月

柳葉亭繁彦



# 関音頭日本銀二

東京　一筆庵可候　著
琴籟堂編輯

## ○第壹番

文恭院徳川家齊公（俗の人大御所様と云ふ）將軍たりし文政元年の頃なりけるとぞ江戸小山坂の南側より磯部千葉守となんやされたまふ譜代の大名おはしけるが當主若千葉どのゝ當年四十を越たまへど若君いやすも更なり未だ姫君さへ擧たまいず然れば家中末々の諸士迄是を憂事と思ひつゝ種々評議を疑しけるが醫師等相議して云るやう是ゝ奥方よりし條おはせばなり若し壯き女子を選びておん側女と爲しまいらせなば世子あらんこと必定ならん尤とも主君物がたく在せば之を用ひたまはじと思へど外より施こすべき手術なしとて衆々と演立たるを奥方も老臣等も幸いひの事と思ひ或時御前へ伺候しつ醫師が言上をやし上て側妾のことを勸めやすよ千葉守歎息したまひ我わかきより色を好まず此をもて汝達が側妾を勸むること久しけれども絶て之を許さざりし然いあれ我とても既や小ゆるぎの五十ちかきよ若し今よして子を儲けずば遂よ生涯その事なく是れより家の血統を斷て祖先へ對し不孝となるべし我今四十の坂も越つ側妾三味心よ背けど此邊を思へば餘義なからんかと云ひかけて傍へを見かへりたまふよ奥方しば〳〵點頭たまひ仰せまでも無ことよはべり然らば何々とやさんより今日こそ二月十五日子の日と云へば子供おほかる最めでたき日よはべるかし喃内膳よく心得て今より所々よ使を走らせ側妾詮義よ